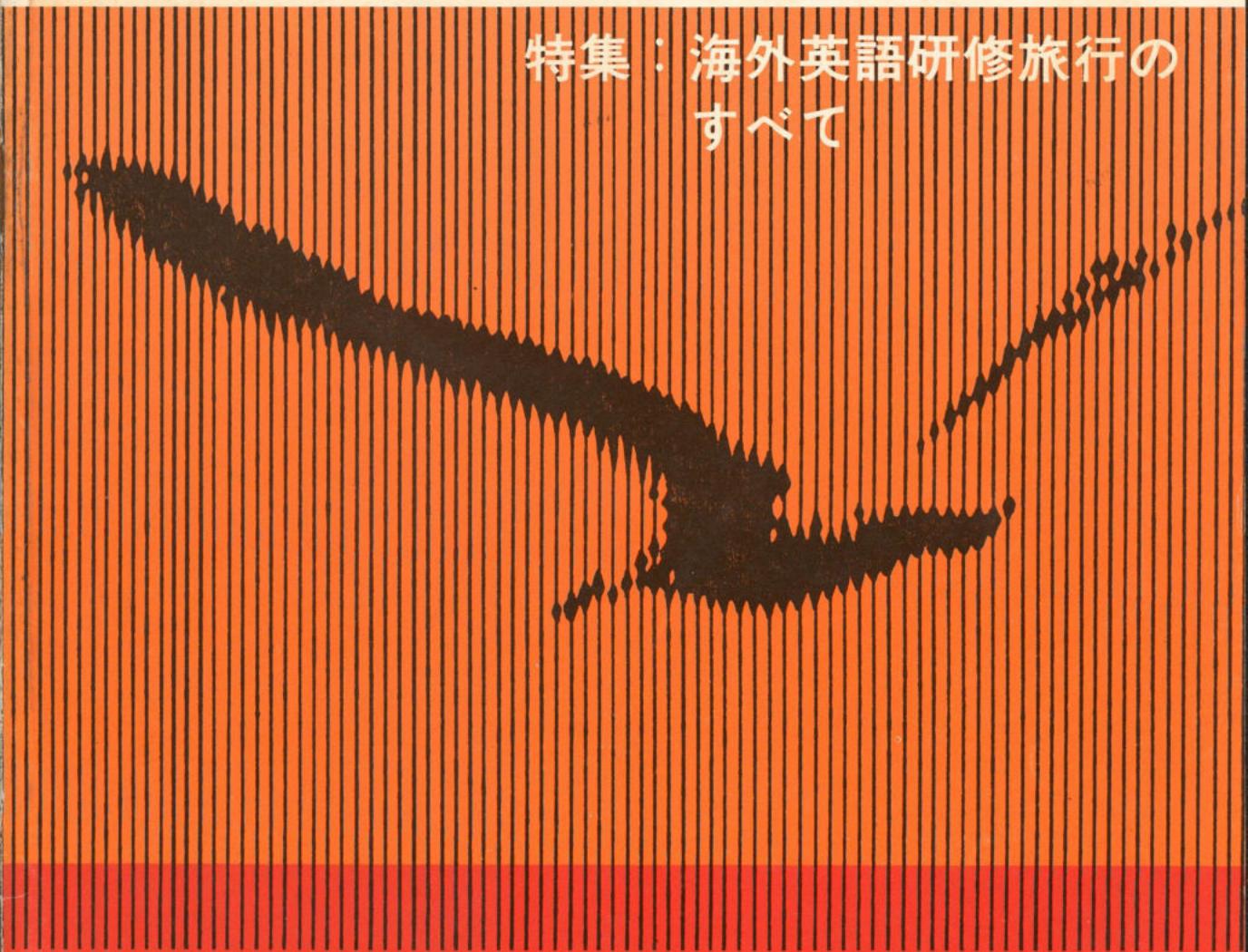


NO. 68
WINTER
1980

英語展望

ELEC BULLETIN

特集：海外英語研修旅行の
すべて



英語展望

No. 68
WINTER
1980

ELEC BULLETIN

Edited by Natsuo Shumuta and Akira Ota
The English Language Education Council, Inc.
3-8, Jimbocho, Kanda, Chiyoda-ku, Tokyo



【特集】海外英語研修旅行のすべて

対談:短期海外英語研修を志す人のために.....國弘正雄・浅野輔	7
海外研修のためのオリエンテーション.....高橋敏彦	12
高校生への手紙.....田村 泉	15
アメリカ英語研修.....ハルコ・クック	17
資料:今年行なわれる主な海外英語研修旅行.....	20

【国際展望】

素っ気ない若者たち.....平野敬一	2
Trip to China.....Sherman Lew	5

【連載】

漱石のロンドン(その4).....伊村元道	28
Community Language Learning の妥当性と その限界(その1).....石田雅近	32
アメリカン・フォークロア.....倉田好子	36
Native Americans 7:二重言語・文化教育(2)山本昭・吉見子	39
英語の謎(その11).....戸田 豊	41
英語謎々考.....橋内 武	23

【Challenge & Response】

高校用新指導案(試案)について.....伊藤元雄	43
【英語教育の情報と資料9】言語学習者の言語.....玉崎孫治	45
【新刊書評】『英語教育学研究ハンドブック』.....伊藤嘉一	49

新刊紹介.....	51
新刊案内.....	54

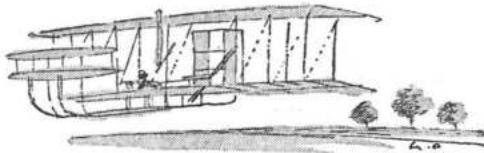
ELEC 同友会通信.....	55
展望通信.....	56

表紙デザイン

太田英男

素っ気ない若者たち

一旅の感想一



平野敬一

去る6月下旬に成田を発ち、北米観光旅行のつもりで出かけたわけでなかったが、久しぶりのカナダ訪問というので、つい寄り道が多くなり、カナダの玄関口のバンクーバーに始まり、ここカナダ東端のセント・ジョンズ市に落着くまで、途中、ピクトリア、トロントその他アメリカの都市まで含めて、計9都市を訪れた。その間、知人宅に泊めてもらったりもしたが、宿泊に利用したホテルの数も計9つになる。あらかじめ予約をとってあったのは、その中の1軒だけで、あとは全部、行きあたりばったり、バス・ターミナルや空港へ着いてから、電話で交渉し決めたものばかりである。同行した家人にとっては、その日の宿泊先もはっきりしない旅の連続で、神経の疲れることだったろう、と察している。

国内旅行もめったにやらぬ小生のこと、当令しきりに話題になる「国際感覚」はおろか、「国内感覚」すら怪しいのである。当然、旅慣れぬための失敗や戸惑いは少なくなかつた（途中、大金〔?〕入りの財布を落とすといふハマもやつた）が、まあ、英語教師として勉強になる点がないわけでもなかつた、と思っている。

以下、旅慣れぬ人間が、14年ぶりの北アメリカ訪問で見聞し、感じたことを、思いつくままに、2、3書いてみたい。

ヒアリングのこと

私は、きわめてヒアリングが悪い。純粹に物理的聴力が悪いのであって、日常、補聴器の厄介になっている。家庭で使う日本語でさえ聞きとれぬことが多いのに、ふだん疎遠にしている英語が楽々と聞きとれるはずはないのである（したがって私は英語のヒアリングに自信のない人の気持や苦労は、よく分かるつもりである）。というわけで、今度は（昔は、いまより少しは耳がよかつた）、相手のいうことの半分も聞きとれまい、と覚悟して出かけたのである。

私は、ふだん、教室で学生に英語のヒアリングには、もちろん聴力も重要だが、それよりもしろ大切なのは相手のいわんとすることを予期（anticipate）する能力である、ということを説いてきた。つまり、相手が次にこういうだろうということを、ほとんど無意識に予知しているからこそ聞きとれる場合が多いのである。この予期能力を養成するのが語学訓練（特に会話のため）の要諦だと私は思っている。機械的なパターン・プラクティスももちろんこの能力を育成するのに役立つに違いないが、その他に、いろいろのものがこの能力の育成に寄与するように思われる。発話の文脈あるいは状況に対する適確な把握（このsituationでなにが予期されるか）、あるいは話者に対する共感（心を入れて相手のいうことに耳を傾けるのと、上の空で聞き流しているのとでは、ヒアリングがおのずから異なる）などは予期能力にとって大事なファクターであろうし、外国の生活習慣に対する理解も、当然、この予期能力を強めてくれる。

聴力に自信のある人でも、思いがけないこと、つまり予期していないことを聞かれると、聞きとれぬ場合が、当然生じる。英語のヒアリングが苦手という人は、私のように物理的聴力が悪いという場合はむしろ少なく、訓練不充分のため相手のいうことを予期する能力が劣っている場合の方が多いのではないかと思う。

こんどの旅行においても、私は、ほぼ予期していることだと（たとえばホテルの空室の有無の交渉などは問答のパターンが決まっている）、小声でも聞きとれるし、予期していないことだと、大声でも聞きとれない、という経験を何度もした。だから、余計、ヒアリングと予期力の関係の大切さを痛感するのである。

それだけではない。私の印象では、どうも近ごろの若い人们（これはカナダだけの例でないかもしれない）、昔に比べて、応対のしかたがぶっきらぼうになったようと思われる。余計なことをいわないのである。センテン

スをちゃんとおしまいまでいわず、やたらに端折ってしまうのである。いわゆる clipped sentence を濫用するのである。だから、聞いている方で補足をしないことは、意味が通じないことになる。この欠けた部分を補うのも、ヒアリングのだいじな要素ということになろう。

たとえばホテルに投宿するとする。2人連れに対してベッドはダブルかトゥインクと聞くのは、おそらく日本のホテルでも行なわれていることだろうから、フロントで “Double or twin?” と聞かれても、まず聞きとれる（はずである）。ただ、こういう場合でも、係りはちゃんとしたセンテンスで（たとえば “Would you prefer a room with a double bed or one with twin beds?”）聞いてくれないのである。余計なことばを使ったら損だといわんばかりである。特に若い人たちにこの傾向が強いうに見受けられた。

“Cash or cheque?”

筆者が最初に泊まったバンクーバーのホテルでは、フロントの若い女の子が挨拶も前口上もなしに、いきなり “Cash or cheque?” と問い合わせてきたのには驚いた。その質問の内容に驚いたのではない。（支払いに小切手を使う人が日本より多いお国柄だから、事務的に確かめるのは、あるいは当然かもしれない。）驚いたのは、その質問の尾ひれをつけない素っ気なさに対してである。こんなことも聞かれそうだというなんらかの用意がなかつたら、いきなり [kæʃərtʃék] といわれても、分からぬ方が普通でなかろうか。礼儀作法をわきまえないといわれる当節の日本の若者でも、お客に向かって「現金？それとも小切手？」というような口の利き方をしないはずである。「お客さまは神さま」と外国へいってまで主張するつもりはないが、お客に対して丁重な口の利き方をする習慣が一般に薄れているように思う（もちろん中には異国の旅人に対して噛んで含めるようていねいに説明してくれる係りもいないとはいえないが、それは例外中の例外であろう）。したがって、単独で始めて外国旅行をする人は、あらかじめホテルのフロントでは、どういうことが聞かれるか、素っ気ない clipped sentence でも、それを予期し聞きとれるよう、準備をしておく必要がありそうだ。

“Salted or unsalted?”

こういうこともあった。バンクーバーの Stanley Park へいったときのこと。この公園には動物が非常に多い。公園の中に動物園もあるのだが芝生にリスその他の小動物が走り回っているのである。私はこのリスたちになに

か餌をやりたいと思って、公園内の屋台で売っている袋入りの落花生を買いにいった。すると若い売り子は、いきなり “Salted or unsalted?” ときた。こういうふうに活字にするとなんでもないのだが、落花生に「塩つき」と「塩なし」の区別のあることを迂闊にして知らなかつた私には、相手のいうことがよく聞きとれないである。きょとんとしていると、売り子はこんどは “With salt or without salt?” と言い直してくれたので、ようやく事情がのみこめた（動物の餌には塩のついてない方がいらっしゃるのである）。しかし、言い直すときの売り子の口調も顔つきもあきらかに突っけんどんな不機嫌なものになっていた（「何度いったら分かるんだ？ このトンチキ野郎！」）。

Salted とか unsalted は、英語としてはなんでもない単語なのだが、予期してないところなかんたんなことばでも聞きとれないことがある、という例として挙げてみた。それにしても、素っ気ない取扱いだと思った。もっとも、いちいちお客様に向かって “Now, sir, we have two kinds of peanut...” などとばかていねいな応対をしていたら商売にならないのかもしれないが。

“How'd you like it?”

アメリカでアイスクリームを注文すると必ず好み (Vanilla, chocolate, strawberry...?) を聞かれる。それで、昔、ガリオア資金で留学したわが先輩たちは、大いにまごついたものだ、という話を私は何度も聞かされた。“Salted or unsalted?” の質問もその類に入るのかもしれない。一般に英語のヒアリングを苦手とする人は、こういうふうに注文をいちいち聞き返されるのを好まない。私もあまり好きでない。ハンバーガーひとつ注文しても、まず味付けを聞かれる (relish か pickle か mustard か onion か……)。だから一応自分の好みを決め、受け答えの準備をしておかないと、まごつく破目になる。注文の品によっては、好みのドレッシングまで聞かれる（私はフレンチ・ドレッシングしか知らないのでそれで通ずが）。こういうふうに、ことごとに “How would you like it?” とお客様の希望を聞くのは、前にあげた素っ気なさと正反対の親切心の表われと解しうるのかもしれないが、どうもそうとは思えないのである。だいたい，“How'd you like it?” と聞くときの口調は、必ずしも丁重でなく、きわめて事務的であり、ときには突っけんどんになることさえあるのだから。慣れない私は、注文の品を黙ってもってきてくれればいいのに、とつい思ってしまう（この気持は、素っ気なさを慨嘆する気持と矛盾するのだろうか？）

ヒアリングと生活常識

とにかくヒアリングといつても、その中には、いろんな要素が入ってくるのである。ある期間、外国生活をしていると、向こうのいわんとすることを予期し聞きとのに必要な生活常識みたいなものは、自然に身につくのだから、そう心配することはないのかもしれない。窮すれば通ず。必要に迫られたら、なんとかするはずである。ビールに目のない男が外国でビールの買い方が分からなくて、悶々とビールなしの日々を送った、などという話はきいたことがない。カナダなら（アメリカも同じだろう）、ビールのブランド名と6本入り(six-pack)か1ダース入り(twelve-pack)かの区別さえいえば、それですむ。あらかじめ聞かれることが分かっていたら、それこそ中学1年の英語で用が足りるのである。

英会話の学習に、このような日常生活の常識になってることがらを加味すれば、いざというときにまごつかないですむかもしれない。しかし、将来の外国旅行に備えて、ハンバーガーやピーナツの味付けのことまで会話教室で教える必要があるのかどうか、疑問に思う。まごつくという経験も、外国旅行の新鮮さの一部を形成しているのだから。

言語能力の衰退

近ごろの大学生は、人前で話す場合も、主語と述語から成るまともなセンテンスを使うことを知らない、と私の同僚某氏が学内新聞に書いていたのを、旅立つ前に読んだ記憶があるが、前述したようにカナダの近ごろの若い人たちもfull sentenceを使うのを苦手としているように見受けられた。これは、言語によるコミュニケーション能力の、ある種の衰退と解していいと私は見るのが、私が知っている十数年前のカナダと比べても、この衰退の兆候は、歴然としているように思われた。その後、私のこの見解に同意してくれる年配のカナダ人に何人か会うことができた。

“Last name?”

たとえば、こういう例がある。撮影ずみのフィルムの現象をたのみにドラッグ・ストアへ行くことがある。こちらも、もう慣れたから黙ってカウンターに撮影ずみのフィルムを置く。すると若い店員は、なにやらフィルムを入れる封筒みたいなものを出し、こちらの顔もみないで“(Last) name?”と聞く。“Hirano. H-I-R-A-N-O.”とスペルを教える。向こうは、それを封筒に書きこむ。(場合によっては、さらに住所か電話番号を聞かれるこ

ともある。) それから“Thank you.”(あるいは、たんに[kju:])といつて向こうは引渡し証みたいなものを渡してくれる。こちらはそれを受け取って [kjoo:]といつて立ち去る。それでおしまい。現象に要する日数は、もう決まっていて(バンクーバやトロントのような都會なら、たいがい翌日。ここセント・ジョンズのような辺境の地では、4,5日後),客の方もいちいち、いつですか?などと聞かないし、向こうもわざわざ説明の労をとったりしない。日本で市販されているおびただしい数の英会話本の類を調べたわけではないが、こんな会話のやりとりは、おそらく載っていないと思う。こう素っ気なくては、会話のテキストにもなるまい。しかし、現実には、それですむことが多いのである。

上述の“Last name?”という店員のせりふも、今回の旅行でなんとなく心に引っかかった clipped sentence の一つである。フィルムの現象をたのむときでも、ホテルの予約をとるときでも、相手がとにかく確かめたいのは、こちらの名前だから(日本でも事情は同じかもしれない)、やりとりの始めにこの質問が出るものと覚悟しなければならない。それはいいのだが、問題は、その聞き方である。けっして“May I have your last name, sir?”などと full sentence で聞いてくれないのである。“Your last name, sir [or please].”というのは、よほどていねいな方で、若い人なら“Name?”だけですませてしまう場合すらある。日本でも同じでないか、と反論する向きもありそだが、日本語の「お名前は?」というの、述部こそ欠けてはいるが、ちゃんとした敬語体なのである(「お」という接頭辞がついている)。“Name?”の素っ気なさとは、だいたい文体が違う。

ことばの素っ気なさという点では、ここ1か月あまりの経験だけでいうなら、カナダの玄関口のバンクーバがいちばんひどかったようだ。かつて少年時代の数年間をすごしたこの町に私はなんのうらみもないのだが、それが正直な実感だった。この町に長く住んでいる評論家ジョージ・ウッドコック氏の奥さんのイングさんも、当節のカナダの若者は、ことばも態度もひどく curt になった、と歎いておられたから、この印象は、どうも私一人だけのものではないらしいのである。

先月ニューヨークを訪れたとき、街角に立っている警官や屋台の売り子に、ものをたずねたことが何度かあったが、だれの応対ぶりも、バンクーバの場合よりはるかにていねいだったので心地よかった。ニューヨークで私は、素っ気なさというものを感じることがなかった。いろいろと悪評のある街だが、私は、さすがニューヨークだと

(p. 19 へづく)



中山大学

Taking advantage of its new accessibility, I have made short visits to mainland China for the past two summers. In 1978, I visited two provinces, Guangdong (which is next door to Hongkong) and Guangxi (which is just to the west of the former, bordering also on Vietnam). Last summer I covered much the same ground, with a short trip to Changsha and Shaoshan in Hunan province, Mao's birthplace, as well. The Chinese regard all three provinces as part of the region known as *huinan* or south China.

First Surprise

The city of Guangzhou (Canton) provided the first surprise of my trip: everyone spoke Chinese! By that I mean, of course, that everyone spoke a common language, *putung hua* as it is termed, rather than a dialect. The southern and coastal provinces of China abound in dialects and the Cantonese in particular are known for their linguistic chauvinism. My grandparents came from a village just outside of Canton, but they had great difficulty communicating with the city folk. When I was learning Mandarin Chinese at college, my teacher, a northerner, used to recite a little ditty that goes something like this in English:

I'm not afraid of Heaven 'n I'm not afraid of Hell,
I'm only afraid of Cantonese speaking Mandarin too well.

TRIP TO CHINA

Sherman Lew

Instructor, The ELEC Institute

Although efforts to unify the spoken language started early this century, dream has become reality only in the thirty years since the Communists took power. Across the border in Hongkong, probably 98 percent of the people know only Cantonese; and Singapore has recently admitted the failure of its bi-lingual language programs.

A School in China

As I joined tours sponsored by the China Travel Service, Hongkong, the emphasis was on sightseeing: an ancestral temple in Foshan, a cruise down the Li River in Kweilin (the same tour that the Nixons got), a two-hour bus ride to Mao's birthplace (now a showplace with a museum), etc. However, we did visit factories (handicrafts, textiles, condensers), communes, and schools, too. Undoubtedly one of the highlights of my first trip was a visit to the Guangxi Institute for Nationalities.

Guangxi, strictly speaking, is not a province but an autonomous region. These are border areas where most of China's minority nationalities live, often outnumbering the Han Chinese population. Altogether there are 12 nationalities in Guangxi, the majority of whom (about 11 million) are *Zhuang*. At one lecture hall, the instructor asked the students to identify themselves, but it would have required much experience and a sharp eye to distinguish one from another, although the *Zhuang* are Moslems.

The biggest surprise, however, was in the Foreign Languages Department. There students study English, French, Vietnamese, Laotian, or Thai. Each of us was taken in hand by a couple of students and we rapped for about an hour or more non-stop. These were mainly freshmen and sophomores. I could not imagine my own students in Japan reacting so spontaneously in a similar situation.

Students and Teachers in China

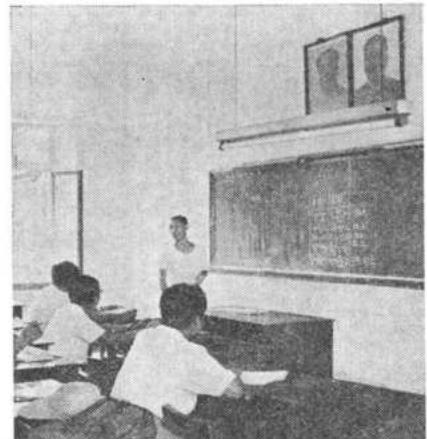
There are said to be about 8.5 million college students in China with another 300,000 in technical institutes. Elementary school begins from the age of seven, English from the third grade. They range from the highly sophisticated such as at Zhung Shan University in Canton (a national university comparable in rank to Kyoto University) to the provincial. In Changsha I met several students who were waiting outside my hotel (forbidden territory for them), anxious to talk to foreign visitors. Some were students at Hunan University and some at Hunan Teachers College. All were astonished to hear that Tanaka Kakuei had been indicted years ago. I was surprised to find them studying *Kernel Lessons* and *Jane Eyre*.

The teachers I met were generally fluent in English, Russian or Japanese, with a lively interest in what was going on in the world. One professor at Zhung Shan University questioned me closely about Community Language Learning and Suggestopedia. He told me that the Bureau of Foreign Experts in Beijing assigns foreign teachers to schools around the country. Most are young and on two-year contracts.

Some Conclusions

Intellectuals have always occupied a special place in Chinese society. Although regarded with suspicion by government bureaucrats, it is obvious that they have an important role to play, especially in the current drive for modernization.

It is also obvious that education — language education — is considered one of the keys.



University classroom

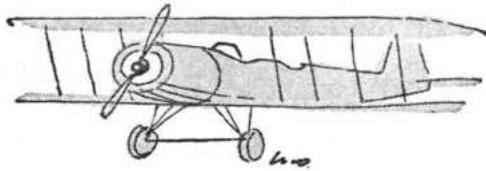
Tourists are bringing in welcome foreign exchange, but there is already a shortage of good interpreters. One of our CTS guides was fresh out of college; another had been plucked from his high school teaching job to fill a gap.

The disruptions caused by the Cultural Revolution are obvious too: I rarely met teachers in their thirties — a missing generation? Students besieged me with questions about law and human rights and requests for copies of the U.S. Constitution or law books. Hotel personnel told me that they had been kept too busy with political meetings when students to do their studies properly.

There is a deep desire for knowledge everywhere in China. The present openness of the people and government, short-lived as it may well prove to be, is probably one of those periods of intellectual ferment in Chinese history such as the Spring and Autumn or, more recently, the period between the World Wars. Language teachers in Japan, whether native or foreign, would surely find an exchange of information, material, and teaching techniques useful to both the Chinese and ourselves.



〔対談〕 短期海外英語研修を志す人のために



短期海外研修で得られるもの

浅野 短期海外語学研修という場合の短期というのは、せいぜい2か月、長くて3か月でしょうが、短期で語学の研修に海外に行くことの意味はどのくらいあるのか、あるいは意味あらしめるためにはどういうことが必要かという問題が1つある。

それからもう1つは、そのような研修が、この間もいろいろ問題を起こした業界の営利事業の対象になっているわけですね。ということは、意外と簡単に短期海外研修をする人の数が多く、またそれが商売にもなるということだと思うのですけれども、わりと簡単に海外へ行けるような状況であるということの持っている意味も考えてみたい。

それで2番目の問題からいいますと、わりと簡単に行ける状況というのは、行って、しかも短期であればその間に自分が何かを吸収しようという意欲に関してどれほど切実なものを感じているのか。要するに語学研修というのと、海外旅行を楽しむということとの間に実質的にどういった違いを意識的にわきまえていくのかという、妙な精神論みたいなのですけれども、そういう問題が一方にあると思うのです。

それから、ことばというのは即席で効果が上がるという性質のものではないでしょうし、どういう方法をとっても長い期間の積み重ねでしか習得できない性質のものですから、短期で行くとしたら、語学を研修するのがほんとうに得なのか、あるいはもう少し別のものを見たほうがいいのか、あるいは語学という点でいうならば、語学のどういう面が短期間で一体身につくのか、そこら辺

NTVニュースキャスター

國 弘 正 雄

TBSニュースキャスター

浅 野 輔

どうなんでしょう。

國弘 まず第1に、私の身のまわりで、特に若い人で海外に短期の研修に行こうというときに、「どういう心構えで行ったらしいか」ということをたずねられると、私は、井上靖さんの『天平の甍』をぜひ読みなさいといふのです。実はあの本は私がアメリカに勉強しに行こうと思い立った1つのきっかけでもあったし、またあの本を読んだことがいまにして思うと、たいへん自分の留学生生活を意義あらしめてくれたなという気がするのです。

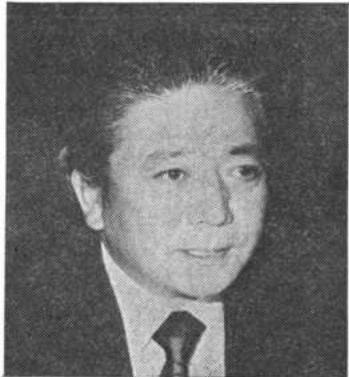
第2点は、英語の勉強をしている人が英語を母語とする国へ行くことは絶対に必要かどうかということ。つまり、アメリカなりイギリスへ行くことは英語の学習にとって不可欠な条件であるかどうかという問題提起をしておきたいのです。

私の感じでは、不可欠な条件ではないと思うのです。極端にいえば、日本で生まれて、日本で育って、日本からただの1歩も外へ出なくても、こと英語に関しては、機会・機器・器材等ありとあらゆる便宜がそろっているということを考えると、十分に英語の習得は可能であると思っているわけです。

しかし不可欠な条件ではないけれども行くチャンスがあったら行くにこしたことはない、非常に望ましい条件であると思うわけです。英語が生きて躍動して使われている場に自分自身を置くという意味でもたいへんに望ましい条件ですし、また、自分の生まれ育ったところを離れたところに自分自身を置いてみると、何か自分自身を写す鏡みたいなものができてきて自分がよりよく見えてくる、日本がよりよく見えてくる、場合によっては日本語もよりよく見えてくる。

そのときに、ことばを身につけるということが1か月

や2か月でそう簡単にできるのかどうかという問題ですけれども、私はできるといえればできるし、できないといえばできないと思うのです。できるというのは、英語の場合はすでに3年なり5年なり、へたすると10年なり20年なり日本で勉強



浅野 輔 氏

してきたわけですから、日本における体験、日本における蓄積というものが前提にあれば、2か月でも3か月でも行ったら行っただけのことは必ずある。それにプラスされるものが必ずあるはずだというふうに思いますから、英語の勉強のためにアメリカへ行くこと、イギリスに行くことは、たとえ短期間であってもたいへんに望ましいことだと思うのです、その意味においてはできると思います。

それからとても2か月や3か月でできるもんかというふうにいえば全くそのとおりでして、たいへん奥の深い、懐の深いことばを、たとえ日本でどれだけ予備的な勉強をしてきたとは言い条、わずか1,2か月の英米における体験でそれがほんとうに身につくなどと、そんなになまやさしい、甘っちょろいものではありようはずがない。

ただ、英語の習得がよしんば不可能であったにしても、とにかく異質な社会や文化の中にみずからを置いて、異文化の中における生活体験を持つこと自体は、特に日本のように四面海にかこまれて、しかも国内に異民族、異人種、異文化をほとんど持たない社会に生を受けて育ってきたわれわれにとっては、かけがえのない経験、体験になるわけで、私のことばでいえば応用人類学的な異文化間体験というものを身につけて日本に戻ってくる、そして、そういう体験が日本の中にどんどん蓄積されていくれば、個人にとってはいうまでもなく、日本全体にとってもたいへんに望ましいことだというふうに考えているのです。

ただ問題は、その間現地の人々にはたいへんご迷惑をかける。われわれの言動が彼らに対して非常な迷惑をかけたり、ふんまんやるかたない思いを強いたりすることがあるだろうけれども、ひとつこれは日本が、日本人が大成していく過程なんだから、その間での苦労は、悪いけれども、忍んでいただけますまいと、非常に身勝手ない方ですけれども、そう思うのですね。

しかし、もちろんそういうご不便やご苦労をおかけしないにこしたことはないわけで、またおかげしては相すまんわけですから、やはり出かける前のある種の研修というか、異文化間体験をするに当たっての基本的なABCだけは身につけておいてもらいたいものだという意味でのorientationが十分になされる必要があるのではないかと思います。

効果的な海外研修の条件

浅野 國弘さんのおっしゃったこと、ほんとうにそのとおりだと思うのです。まず短期間でできるかできないかという問題は、英語ということばの学習の持っている本質からいって、たとえ短期間であっても何かの成果はあるという意味ではできるし、それからできないといえば、それはきわみに到達することはできないわけですから、そのとおりだと思うのです。

そういうことは一応別にして、程度の問題としてできるかできないかという問題もあるうかと思うのです。つまり当面、2か月なり3か月の期間でこれだけはと期待されるような成果がそれなりに一応はあると思います。現実的にこれだけのことは成果としておさめ得るのではないかという期待値があって、それに到達するかしないか、それが実現できるかできないかという意味で、できるかできないかという問題がある。

それには2つ重要な問題点があるのではないかと思います。例の異文化間のorientationという問題を一応別にして、ことばの問題だけでいようと、行く前に習得している語学の能力の程度についての自覚ということが必要ではないか。自分はどの程度の語学を国内で習得しているかということはある程度客観的に知る。それがないと妙にわかったつもりになってしまうという誤りもあるし、それから最初にぶつかる困難で必要以上に失望して意気消沈するというようなことにもなりかねない。程度を知るということは、物見遊山ではなく、語学研修で海外に行くのだということについての自覚を高めることの意味も実はあろうかと思うのです。真剣に自分はどの程度英語ができるだろうか、どの程度その能力を今度の短期間の研修で伸ばしていきたいのかというような、自分に設定するところの努力目標みたいなものを持つか持たないかということが重要だということがまず第1点だと思うのです。

それから2番目の問題は、これはえらい現実的な話になりますが、そういう短期海外語学研修というのは多くの場合に何らかのプログラムに乗っかって行く人が多い

わけです。プログラムに乗ってやるということは往々にして日本人の集団で行動するという形をとります。その場合、日本人集団への求心力みたいなものが語学の学習を通じてでも、あるいはアメリカにおける3か月の生活を通じてでも常に働くと思うのです。それに対してどう自分が行動していくかということをはっきりと自覚しておく必要があると思いますね。

考え方としては、日本人同士で寄ってしまうということをどうやって避けていくことができるかということを実践的に考えていく必要があるのではないかという気がします。

國弘 たしかに集団で外へ出かけた日本人の場合に、研修旅行に限らず、いかなる目的であれ、群をなして海外へ出かけた日本人というのは、「とかくメダカは群れながら」じゃないけれども、やたらに求心的にかたまり合って凝集し合うという傾向はありますね。そうだとすれば、日本的小集団をまたま物理的に小集団ごとアメリカに移植したというだけあって、アメリカにわざわざ出かけていったことの意味というのはたいへん薄れてしまうということはありますね。

しかし、少なくともアメリカに3週間なり、3ヶ月いれば、1つの効果として考えられるのは、外国人に対するいわれのない恐怖心というか、異和感というか、それがかなり薄れるのではないかという気がするのです。それと同時に英語に対する恐怖心みたいなものが薄紙をはぐがごとに少しずつ薄れていくのではないか。そのことは案外短期間の英語研修旅行というものの1つのメリットであり得るのではないかと思うのです。

もう1つは、外に行ってそのことばがしゃべられている環境に身を置くと、今まで英語なら英語というものが紙の上に書かれたことばでしかなかったものが、音声を伴って人間の表情とか身のことなしあり、ジェスチャーとか、あるいは人間の温度とか湿度とか、そういうものを伴った人間のことばとして意識されるようになる。

つまり非常にメタリックなことばが、生物的なものに変わっていくという、そういうメリットがあるのではないかという気がします。そのことは、実はことばというものを今度は主体的に自分が使いこなしていく上に1つの非常に大事なプロセスではないか。その意味においては意味があるというふうに思います。

浅野 ほんとうにそうだと思うのですが、ぼくの知っている、ある女子学生が短期の研修に行って帰ってきて言ったことが愉快なんです。つまり、英会話というのは次の3つの表現さえ身につければやっていけるというのです。それは何かというと、“er, ha”というのと



國弘正雄氏

“really”というのと“Is that so?”この3つを適当に織りまして聞いていると話がどんどん進んでいくというんですね。(笑)

そういう意味でいと、英語というのは無機質なものが何かanimateされるといいますか、血の通ったようなものになったという感じをとらえることもできたわけでしうしね。それから外国人に対する妙なコンプレックスというか、異和感、恐怖感は実際克服して暮らしてきたわけですし、それから英語に対する妙なおそれも克服したという側面はあると思うのです。

しかし、事柄の別の側面としては、100人の中で、國弘さんのいわれるような意味で成果を上げる人が60~70人いるとすれば、残りの30~40人という人たちもいるのですね。その人達は全く逆で、英語に対する恐怖感がますますつたり、それから特にアメリカ人ならアメリカ人に對して、それこそ誤解と偏見はさらに強化される。そういうことに結果する場合もゼロではないと思います。

國弘 全くそうだだと思います。

浅野 そうなってくると、効果ということよりも、むしろマイナスの効果になるわけで、そういうことに陥らないようにするためにもある程度の語学力を持っていなければいけないし、異文化に対する心の持ち方、心をオープンしていくという態度も必要なんでしょう。ぼくは意外にそういう面を無視してはならないという気がしますね。

それから1人の人間の中にこの2つの側面がないまぜになって帰ってくることもあるのではないですかね。

國弘 ぼくらだってそうですものね。アメリカに対して、あるいはアメリカ人に対して何かないまぜになった、かなり複雑な心穏やかでない面もあるし複雑な面がありますものね。

たしかに恐怖感が増したり、かえって異和感が増したりして帰ってくるというのは大いにあり得ると思いますね。

浅野 最近の若い人をみていると、外国人に対してのこだわりみたいなものがなくて、外国人のふところの中に飛び込んでいけるようなタイプの人がふえていますね。そういった人たちはことばの障害にもかかわらず、非常

に親しくなって、最後に別れるときなんていうのは空港で涙の別れみたいなことになって、えらい感動的な状況なんていうのもないわけではないのです。

魅力的な教師に変身

國弘 ところで話をちょっとこの雑誌の主たる読者である学校の先生、特に英語を教えておられる中・高の先生方のイギリスないしはアメリカにおける英語研修ということにしぼって考えた場合にどうでしょう、何かご意見ありますか。

浅野 異文化間の communication というレベルでいいますと、高校なり中学の英語の先生がアメリカに行って生徒にとってどれだけ魅力的な先生となって帰ってくるかということを考えてみたい。

生徒からアメリカでの話を聞かして下さいといわれたときに、何とか大学の summer school に行ってその学校とその campus だけの話では困りますね。一歩出れば生きた community があり、そこからいろいろなものを洞察できるわけですが、もろにアメリカというものにぶつかってきた自分の体験、それがその先生を何かちょっと別の人間にしてきたんだというようなものがどこかにないといけないと思います。それはさっきから繰り返しているように、心がけみたいなものですね。

1つの例でいえば、1人でリュックサックしょってアメリカをあちこち歩いて、いろいろなものに出くわし、いろいろな人に会って帰ってきた先生の話のほうが、セットされた定食メニューを腹いっぱい食べて帰ってきた先生よりはおもしろい話を生徒にできると思うのです。だからプログラムに乗って行く人もそういう精神で行けば、接すべきもの、接すべき人、観察すべき事柄というのはそれなりにあるわけですから、短い期間であればなおさらどんどん欲になってもらいたいということなんです。

國弘 それは全く同感です。特に子供たちにとって、どちらが魅力のある先生であるかというの、それはリュックサックしょって歩いた人のほうがはるかに魅力があるということは間違いないと思います。

プログラム作成者への注文

浅野 いままで行く人の心がけ、心構えみたいな意味で申しましたけれども、プログラムをつくる側においても、同じ定食でもいろいろな定食があるわけですから、今までいってきたような趣旨が生かされるようなプログラムの作成、これがあっていいと思うのです。

たとえていうと、一定のいわゆる定食のプログラムが終わって、それから日本に帰るまでの間に、たとえば1週間という期間を設定して、それで1人ひとりが集団にならないように、全く別のコースを設定してオリエンテーリングというようなことをやらすわけです。それで何月何日にサンフランシスコに結集せよと。

國弘 そういうときにもし現われなかつたときにどうするのですか。

浅野 それはしょうがない。リスクとして背負う以外ないです。特に学校の先生とかおとなを相手にする場合です。それでぼくなんかがやったのは、1人ひとりといふわけにいかなかったから、4つか5つぐらいのグループに分けて、グランドキャニオンに行くやつ、ヨセミティに行くやつというようなことで分けて学校関係者はだれもついて行かなかったのです。事故は結局なかったですけれどもね。

最初は非常に抵抗があったのです。もし間違いがあつたらだれの責任かという。でも一緒にくっついて歩いたって1対1でくっついて行けるわけではないですから、何か起き得るわけ、だからやってしまえということでやつたことがあるのです。

國弘 学生は喜びましたか。

浅野 それは非常に喜びました。

國弘 私は、出掛けていく日本人に対するオリエンテーションのほかに、現地で受け入れてくれる host family 側に対してもぜひオリエンテーションを実施してほしいということをプログラム作成者にお願いしたい。

最近聞いたことですが、アメリカの家庭に入ってみたものの、食事が終わったらまっすぐ自分の部屋に入ってしまって host family と何ら談話もかわさない人が多く、host family に気苦労を強いいるというようなことがしばしば起きているという。

郷に入っては郷に従わなくちゃいけないので、われわれがアメリカにいる以上、アメリカ人の風俗習慣、生活様式というものに順応していくなくちゃいけないことは事実ですけれども、しかし、ことばのハンディもあるし、日本人の一種の文化的諸性癖というものもあるわけですから、少し大らかに、大目に見ていいってほしい。日本人が黙っているからといって、決して彼は unhappy なのではないということ、つまり日本人についての諸性癖の常識的なことがらは主催者のほうがあらかじめ host family に伝えておいてほしいということです。

日本について勉強する

浅野 日本人があまり会話しないということ、これは日本人としての性格の問題、それから語学の障害もあると思いますが、もう1つ、話題が豊富でないということは決定的なことなんですね。話題がないからしゃべれない、しゃべれなければ精神的な負担ですから、さっさと1人になりたい。英語からも解放されるし、ホッとするというわけです。話題がないというのはぼくは決定的な問題だと思います。話題といっても人にはそれぞれ得手、不得手いろいろありますが、共通して1つ申し上げておきたいことは、日本について何にも知らない人が多いでしょう。

國弘 全くそうです。

浅野 それはなにも深遠なる日本人論とか日本文化論とかいう、そんなものを開陳するというのではなくて、アメリカ人というのはいろいろな意味で factual なことを好むわけですから、たとえば経済の問題にしても、政治の問題にしても、社会の問題にしても、たとえば離婚率は大体何%かとか、それから日本の経済の規模というものはどのくらいですかとか、日本とアメリカはどのくらい貿易しているのかとか、アメリカと日本との貿易は他の国の日本への貿易の中でどのくらい比重を占めているかとか、それから日本の議会というはどういうふうになっているのかとか、何かといえばそういう質問が出るわけですね。それに対して専門家の答えてなくていいので、いってみれば高等学校程度の知識ですよね、中学校程度かな。そういうものについて、たとえば『日本経済図説』(岩波新書)、あるいは『日本国勢図会』とか、そういうデータシートみたいなものを1冊持つて行くぐらいの心構えはほしいと思う。つまり持つて行くということは、それに準じた心構えとして日本に関する少なくとも1つの問題について5分間ぐらいのストートメントができるというふうな、そういう関心を持ってアメリカに行くということでもあるわけです。

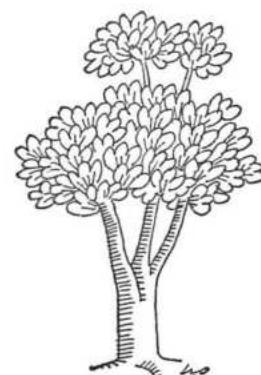
國弘 いまおっしゃられたことは非常に重要なポイントだと思うのです。それについて若干ふえんさせていただくとすれば、英語なら英語に上達するためには、できるだけ幾つかのテーマについて自分自身の意見を持っていかなければならない。これを私は bias と呼んでいます。偏見というふうに訳すとちょっとことばが悪いのだけれども、少なくともある幾つかのテーマについては自分自身の意見というものを持っていかなければ絶対にことばはうまくならないし、ましてやそれが外国語で

ある場合には、なおさらのことです。そういう意味において、できるだけ幾つかのテーマについては自分自身の発言するに値する、発言したくてたまらないような意見なり見解なり、あるいは bias を持つべきだと、これは英語に熟達するためにも必要だと思うのですね。

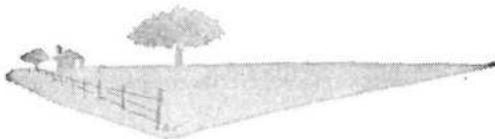
その際に、じゃあ何についての bias かということになれば、これは浅野先生おっしゃったように、何といってもわれわれは日本についての bias を持ちやすい立場にあるわけだし、また host family のアメリカ人にしてみれば、日本について知りたいと思っていることは当然だということになれば、日本についてある程度のことといえるだけの知識の裏づけのある見解を持っていてもらいたい。その際の参考書資料として、私の訳しましたライシャワーさんの『ザ・ジャパンーズ』などは1冊読んでおいて絶対に損はしない本だと思います。英語の先生ですから英語で読んどいてもらえれば絶対に損をしない、何らかの話題には事欠かない本だと思うのですね。

さらに最後に、英語の先生方に若干皮肉に聞こえるかもしれないけれども辛らつなことを1つだけ申し上げるとすれば、残念ながら日本の英語の先生方は bias の持ち方が足りない。つまり何かについてかなり明快な見識なり意見なりを持つことにおいて、たとえば社会科の先生と比べて、あるいは国語の先生と比べて、率直にいって見劣りがすると思うのですね。

そうだとすると、外に出て home hospitality ということになった場合にはなおのことつらい思いをなさることでしょうから、まあ事日本に関してぐらいはある程度の知識を持って、それを英語で表現できるようにしておいていただいたら、ご本人にとっても非常に気の安まるこことではいかなと思います。(終)



海外研修のためのオリエンテーション



高橋 敏彦

アメリカあるいはイギリスへ短期研修を目的に渡航する人のためにオリエンテーションを、かれこれ12年間繰り返している。そして何年経っても難しいと思う。時には必要ないのではないかとさえ思う。当然のこととして、時とともに内容も変わって来ているし、対象によっても変わる。同じ話をしても、外国での体験のある人とない人では反応は全く違う。個人差もある。それにもかかわらず共通項があると思う。その中から重要と思われる何点かを拾ってみたい。

基本的にはオリエンテーションのねらいは、海外研修への参加者が、その研修で最大の成果が得られるように助けることにある。そして大別すれば、出発前の準備に対するものと、現地でのいろいろな情況への対応の仕方の2つになる。

海外研修への準備は、出発の1年前、遅くとも半年前には始めたい。というのは、海外研修の経験者の多くは、出発前の準備が不十分であった、もう少し準備が良かつたら成果は何倍にもなったのにと反省しているのだから。では何を準備すれば良いのか。まずは英語、それも聞き話す力を持つということには異論あるまい。この点についてはもう一度具体的に触れる。それを読んでいただいて、仮に英語に問題がなくなったとしても、相手との共通の話題、相手に伝えたいことがなければ会話は成立しない。会話の材料のためにも、訪問国と日本についての勉強は欠かすことができない。

昭和49年に私どもが実施したアメリカでの研修に参加した中高の英語教師を対象として、研修の準備として読んだ本と、訪問国での体験を踏まえて役立ったと思われる本について、アンケート調査をした。その結果から一般的にいえることは、良く読まれた本は訪問国についての本であり、役立ったとされた本は日本あるいは日米比較についての本である。最も役立った本の例としては『アメリカの家族・日本の家族』(増田光吉著)がある。良く読まれてしかも役立った本は、手前味噌な話で恐縮

だが、初めてアメリカを訪れた英語教師の印象記、体験記を私どもが編集したレポートであった。身近さと具体性が評価されたのだろう。いずれにせよ、海外研修の経験者の多くが、外国人から日本についていろいろと質問されて、日本について余りにも無知であったのに驚いたと語っているのだから、日本についての勉強に十分力を入れてほしい。

さて、出発まで2,3か月と時間が迫って来ると、なにやら不安が頭を持ち上げて来ることが多い。悪くすると、この不安は日本を出てからも付きまとうこともある。しかし、この不安について確言できることは、大なり小なり誰にでもあり自分一人ではないということだ。アンケートで調べてみたが、結果は予想していた通りであった。日常生活を離れ、未知のものに接するのであれば、当然であり自然でもあるのだ。しかも、ほぼ間違いなく、渡航後10日もすればこの不安は霧散してしまう。まずは、自信を持つことが肝心だ。

不安についてアンケート調査をしたといったが、不安の対象はホームステイ、日本紹介の授業をする学校訪問等にわたるが、その多くが、直接間接に英語力への不安と絡んでいる。しかし、いかに英語力が不十分だったにせよ、そのために生命までが脅かされる、といったことは絶対にない。それに英語を勉強に行くのだから、心配に価しない。高校生も3週間のホームステイで楽しくしかも立派にやって来ている。かといって、英語で困らなかつたという人も絶対いない。しかし、英語教師は本当に英語に困ったという話はまずしない。話があっても、こんな難しい場面を、こんな風にうまく切り抜けた式の武勇伝になりがちで、その時足がガタガタ震えたといった事実は表に出ない。英語については先輩の体験談も話半分で聞いた方が安全だ。それよりも、買物、レストラン、日常会話でも困らなかったという自己満足は、特に英語教師には、危険だ。

では、海外で英語を使うとき、何に困り、何を準備し、

注意すればよいのか。第一に困るのは、耳からの英語が分からぬことである。その原因の分析はさて置いて、私の経験からすれば、どんな努力を払っても、數か月間でこの問題を解決しきることは、はっきりいって不可能である。しかし、出発までの数か月間に、可能な限り英語を聞いておくことは確実に役立つ。英語教師はテープを通してでも、ネイティブ・スピーカーの英語に接していると思っているかもしれない。しかし、これはほとんど聞く訓練にはなっていない。まず、語学教材用のテープの多くは、基本的に発音のモデルであって、聞くためのモデルではない。現実にはテープで聞くような英語には中々お目に掛かれない。さらに、テープを聞く場合、既知の事実を聞いて、その内容を再確認しているか、聞くのと平行して文字の助けを借りて理解している場合が多い。現実にはこういうことはありえないのだ。訓練は個人のレベルに応じて、できるだけ現実に近い状態でやった方がよい。その方が進歩もあると思うし、現地で本物の英語に接したときもショックが小さい。では何を聞くか。テープを聞くならば、できるだけ自然な速さで読まれているものを選ぶ。テキストは最後の最後まで見ない。セサミ・ストリート、FEN それに流行の多重放送もいい。しかし、映画は概して難しいので注意が必要。私は今 “The Sound of Music” のレコードを聞いて、書き取りをしている。その目的は聞く訓練であるとともに、聞き違えた場合その原因は何か、全く聞き取れなかっただけの原因は音なのか、単語を知らないためなのかなどを調べることにある。その結果分かったことは、一度聞いて、聞き違えたり、分からなかった文章は、何度も聞いても同じというケースが多いということだ。例えば、「ドレミの歌」で、“Tea—a drink with jam and bread” が何度も聞いても、いぶかしいと思しながらも “a drink with German bread” と聞こえて、テキストを見た時は思わず苦笑してしまった。

耳は聞き違えるとの前提に立てば、それなりに対策が必要だ。それは間違っているとおしかりを受けそうだが、コミュニケーションを、誤りがあっても差し障りないものと、差し障りあるものに分けてはどうか。一生懸命やるのはいいけれど、それには必ず限界があるのだから、ある程度焦点を絞ろうという訳だ。いわゆる日常会話といふものは無責任なもので、少々ミスがあっても問題ない。それに引き替え〇月〇日〇時に〇〇で会いましょう、といった約束では、少しのミスも許されない。そこで得た情報を基づいて行動する場合、その情報を公表する場合も同様だろう。約束の場合を例にとれば、必要事項をノートに取り、それを相手に示すなり、読んで聞かせて

確認するくらいの慎重さがほしい。私自身の失敗もあるし、英語の先生方の失敗も目にしている。

ここで、異文化間の問題に話を移したい。オリエンテーションにおけるこの問題は、大変デリケートな要素を含んでいる。外国文化の話をすれば、日本文化との相違点を強調しがちになる。しかし、これは一歩誤ると外国人と日本人は全く異なる人間だといった印象を与えかねない。人間としての感情は、世界の文学作品が示すように、基本的には同じであるにもかかわらず、それさえも異なっているような印象を与えかねない。この印象は人間を妙に用心深くしてしまい、自然に振舞えば良いものを不自然なものにしかねない。悪くすれば、人間どこへ行っても同じだな、という大切な実感を味わわないままに終りかねない。

がしかし、差異に着目することによって、自己を客体化することができ、その結果人間は基本的には同じという実感も得られるのだろう。また、その差異からいろいろ学ばなければいけないとも思う。この差異が国と国との間の誤解や摩擦の原因にもなりうるのだから。

このデリケートな要素を踏まえた上で、差異の何点かに触れてみたい。

私は年に一度、オリエンテーションのために札幌へ行く。何年か前までは空港から市内行きのバスでは、バスに乗ってからキップを買っていったのだが、ある年乗る前に空港ロビーで買うようになった。それを知らずにバスに乗り込んだところ、キップを買って乗るようにとバスを降ろされた。そしてロビーに入って驚いたのである。テープの声は“キップを先に買って…”を繰返している。お願ひと警告の貼紙が沢山でている。それでも気付かずバスに乗ってしまった。私が人一倍ボンヤリなのかもしれないが、この種の失敗をするなというの無理である。日本においてすらそうならば、外国においてはなおさらである。それにこの種の情報を提供するにしても、ニューヨークのバス、ロンドンのバス、さらに地下鉄となつたのでは、いくら紙面があつても足りぬ。その上に文化の差異が原因となる失敗がある。こうなると、失敗を恐れていたのでは精神衛生上も悪い。その場その場で良く調べ用心することは大切だが、ある程度失敗は覚悟した方が、はるかに楽だ。そして失敗は、その時どんなに大変な思いをしようとも、帰国すれば武勇伝の種になるのだから。一番危いのは、失敗のパニックの中で闇雲に動き回ることだ。こうなっては通じる英語も通じなくなる。まず冷静さを取り戻して考えなければいけない。解決方法は必ずあるものだ。

昨年の9月21日の『毎日新聞』(夕刊)で、文部省の

援助のもとに地方自治体が英米へ派遣した中高の英語教師のうち英國へ渡った教師の活躍振り——いや苦戦振り?——が記事になった。私どももブリティッシュ・カウンシルとともにこの海外研修に協力していたので興味深く読んだのだが、その中であるイギリスの講師が、次のようにいっていた。「初めの1週間、教える方も教わる方もイライラしていました。お互いに意志が通じないでね。日本の先生方は分かっても、分からなくてもイエスというので、教える方が迷っていたようです。でも1か月で随分進歩しました。」このイエスは中々の難問だ。あるアメリカ人はこのイエスに接して、本当にイエスなのか、それとも本当はノーなのかを見分けられるようになるまで、20年を要したという。本当に見分けられるのかと疑問を抱き、ゲームをやってみたのだが、これが良く当る。ゲームの説明は省くが、彼の言によると、本当はノーの時のイエスは、声にも表情にも一瞬の迷いをよぎらせるという。分かりもしないのに、分かったというサインを出すのだから、迷いどころか、顔と声は「すいません。ウソをついてしまいました。でも分からなかつたのです。もう一度いってください」といっているのだろうが、これは海外では絶対に通じない。分かってはいても、最初のうちは——私の場合は恐らく一生——この難題のイエスが口をついて出てしまう。それを出すなどいうのは、無理難題を吹っかけるというものだ。ではどうするか。第一に自分がこのイエスを口にしているということを、本当に知ることだ。そして情況が許せば、相手とこのイエスの問題を話し合い、警告するのもいい。場合によっては冗談の種にもなる。

一般化すればこのイエスは、察しと密接に関連している。顔と声は察しを求めているのだ。これを今一步進めれば、日本人の間のコミュニケーションにおける察しの重要さに気付くだろうし、アメリカ人の間ではどうなのかという疑問も湧いてこよう。こうした学習が海外研修の大切な要素だと思う。

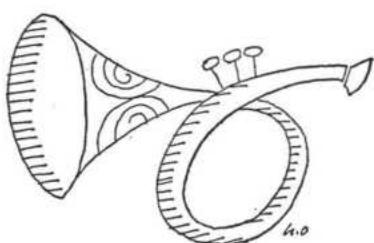
私は来日したアメリカ人に対してオリンピックを繰り返しているし、日本での彼らを見ている。そして新しい事柄に直面したアメリカ人と日本人を比較した場合、どうも日本人は損しているように思えて仕方がない。初めて来日したアメリカ人に箸の使い方を教えて、食事に行く。すると彼らの大部分は、恥びれず勇敢にハシと格闘する。その顔は、「どうです。初めてですが、この奇妙な道具を結構うまく扱っているでしょう」とでもいいいたげだ。一方、日本人がナイフとフォークで食事となればどうなるか。しかも、英語を話しながら、英米人と同席での食事となれば、汗だくという羽目に陥りか

ねない。

日米間の交流を見ていると、アメリカ人は自信と積極性過剰で失敗し、日本人はその逆で損しているようだ。高校生を例にとると、アメリカ人は東京で迷子になることがある。意図的とさえ思える時もあるのだが、迷子になれば、悲しくなるのは日米の高校生同じだ。その点、日本の高校生はまず外国で迷子にならない。これらの観察からいえることは、日本人はもっと自信を持って積極的に行動した方が良いと思う。そうした方が、精神衛生上も、成果の面からも良いのではないか。

今迄の話とは方向は異なるのだが、最後に一言触れたことがある。それは海外で日本人を受け入れる大学等に対する、企画する側のオリエンテーションについてである。ここには多くの要素が複雑に絡み合っているのだが、単純に図式化すれば、日本人が行くのだから、日本人の性向に合った研修にしようとする方向と、たとえ参加者がショックを受けたり、とまどったりしても、訪問国の文化や方法論を生かして行こうとする方向の相克である。企画側とすれば日本人の性向に合わせたくなる。というのは、外国へ出た日本人が日本食に舌鼓を打ち、日本の歌に涙を流すのはいたって自然であり、そうした方向の海外研修は概して評判がいいのだから。添乗員が電気炊飯器を持って行く団体海外旅行がその典型だろう。しかし、これでは外国へ行く意味が薄れてしまうし、総体的に見て海外研修の成果は小さなものになってしまう。かといって、まさしくアメリカ流にやられたのでは、適応に時間がかかりすぎて、短期研修としては不適当だ。この問題の舵取りは海外研修の細部にまで影響する。私は今迄日本人の性向に合わせすぎていたのではないかと考えだしている。そして、参加者と受け入れ側の双方にこの問題を理解してもらい、双方の協力のもとに問題を解決し、学習できないかとも考えている。ここには生き残った異文化間の問題が脈打っているのだから。

(CIEE(国際教育交換協議会)企画主任)





高校生への手紙

—海外英語研修旅行について—

田 村 泉

一郎君。

今度の夏休みに君がアメリカに3週間の旅をすることになったと聞いた。この前会った時、旅費の一部でも自分で作ろうとアルバイトをしているという話だったけれど、その熱意を買って御両親も ELEC の海外研修旅行への参加を許可してくれたのだと思う。よかったね。

今日は、私が今までに何回か君のような高校生の団体のリーダーとしてアメリカやイギリスに行った時の経験から、君に忠告やら注文やら、思いつくことを書いてみよう。最近はこうした学生の海外旅行が非常にさかんで、それこそ猫も杓子も海を渡る。それ自体すばらしいことだと私は思ってはいるけれど、なかには正直、参加する資格がないと思わせるような人もいるのだよ。せっかくアメリカ（イギリス）に行きながら、その国に対する関心が全くないような人が、ゲーテは「ひとは外国に旅をして、みずから身につけたものだけをもち帰る」といったそうだ。君は日本を出てこそ経験できるものを何でも貪慾に見聞して、そういう体験のお土産をたくさんもって帰ってくれたまえ。

英 語

まず、君が一番不安に感じている問題に「英語」がある筈だ。誰しもそれは同じだろう。そこで、ホームステイ2週間を含むこの種の旅行で英語が果たしていく分でも上達するものかどうかという問題がある。

私の答えは、イエスでもありノーでもある。

飛行場からのバスがホームステイ地につく。これは最大の緊張と昂奮の瞬間だろう。アメリカ人（イギリス人）の家族の人たちが君たちを迎えてそこに集まっているのだ。用意してきた挨拶の言葉も十分にはうまく口に出せないまま、一人一人が各家庭に引きとられていく。さあ、それからの君たちの苦労は（そしてむこうの家庭

の人たちの苦労もだが）大変なものだ。相手のいうことが聞きとれない。思うことの十分の一も口に出てこない。辞書を開いてその言葉を指さしてみたり、紙に文字を書いてみたり、泣きたい気もちになるだろう。今までの不勉強をくやんだり、日本の学校での英語教育をうらんだりするのもこういう時だ。

しかし私の見てきたところでは、君たち若い人の環境への適応性は驚くほど早い。2週間もたつ頃には相手のいうことが何となく分かるように多くの人がなっていくらしいのだ。あくまでもごく日常的な簡単なことについて、それも不完全な理解の段階だけれども、一種本質的なコミュニケーション（意思の伝達）が言葉（身ぶりなどもまじえてだが）を媒体として、最初の頃に比べればはるかにうまくいくようになっていくのである。これを英語が上達したといわなくて、何といおう。

ところが、こういう経験はたしかに貴重ではあるにしても、これは言語的幼時経験に類するもので、こんなカタコト英語にいくらか慣れたという程度のことを「英語の上達」などというのはいささか気がひけるというのも事実なのだ。この体験で一番貴重なのは、コミュニケーションの自信ということではあるまい。今までではるか遠いところにいた異国の人々が、一つ屋根の下で暮らしてみれば、何のことではない。彼も人なり我も人なり、曲りなりにも英語が介在する意思交換ができたという、その経験が今後の英語の勉強のはげみになることこそが最大の収穫なのだと思う。

一郎君。英語の勉強は本質的には日本でするのだ。こういう短期間の滞在では英語が「できる」ようになる筈はないのよ。言葉の習得とはそんなにお手軽なものではない。にもかかわらず、現地で君が経験する本場の英語の肌ざわりと、カタコトなりにも自分の英語が通じた嬉しさは実に貴重なのだ。それを刺戟にしてこれからのお学習にはげんでもらいたい。実際、研修旅行以来英語が

好きになった、もっと勉強したいという声を私はいくつも聞いているのだから。

ホームステイ

一般に日本人学生は、善良で清潔で行儀がよく、むこうの家庭での受けはいいとされる。その反面、おとなしすぎて何を考えているのかわからず張りあいがないといわれるケースも多い。個を主張して生きる欧米人と、仲間集団の中で人との調和を図りながら暮らしてきた日本人との必然的な違いということだろう。しかしこれは仕方ないことで、今更急に性格を変えることなどできはしない。むしろありのままで堂々とふるまうべきだ。

一郎君、君などは積極的なタイプで好奇心が強いから、私は心配はしていない。まかり間違ってもいつも自分の部屋にひっこんで、なるべく家族と顔も合わさず言葉もかわさないように逃げの姿勢で終始するようなことはないだろうから。むこうの家庭は日本や日本人に興味をもっているからこそ私たちを迎えてくれるのだ。君はできるだけ日本についての正しい情報と正しい理解を彼らに与える心構えでいなくてはいけない。そのためにはそれなりの準備がいる。自分の家族、家、学校、地域社会など身近なものの写真をもっていって、できるだけ説明をしてあげることは始ど義務みたいなものだと思ったほうがいい。事実、こっちで思う程彼らは日本のことを見知らないのが普通だ。

もちろん郷に入っては郷に従えといわれるよう、現地での生活に積極的にとけこんで経験してこようという気持ちも、今から準備することだ。お茶漬と魚が食べたいなどと寝言みたいなことをいってはいけない。僅か3週間ではないか。言葉も生活もとっぴり首までその国の習慣に漬かってこないとしたら本当にもったいないと私は思う。

世界の中の日本

日本人旅行者の殆ど共通の醜き習性と私はいいたいのだけれど、外国に行くと集団になってあれこれ物を買い漁るということがある。高校生といえどもその例外ではないようだ。空港の免税品店でも、町のレコード屋でも、それこそ札ビラを切っていろいろ衝動買ひ的に買ひこむのだ。いつも私は恥ずかしい思いをする。

1人ならまだいい。日本人はいつも集団だから殊更めだつ。Three is a crowd. という言葉がある。人間、3人集まればもうそれは集団だということだ。まして何十

人もが一団になって食堂などに入り一齊に同じものを食べるという図は、人に奇異の感を抱かせるのに充分だが、私たちの旅はどうしてもそうしなければならない時もある。だが、せめて自由行動の時は、なるべく crowd になることを避け、買い物もさりげなくしてくれたまえ。高校生が大金をもって集団でものを買い漁る……これだけはやめてほしいな。

もうひとつ最後に。

私たちの研修旅行はどうしてもアメリカやイギリスに行くことになる。しかし外国というのは絶対にそういう「西洋人」の国だけのことをいうのではない。今の時代で私たちの心のなかに、西洋に対する一種のあこがれなり劣等感のようなものがあることはどうやら否定できない事実だと私は敢ていうのだが、それが逆に東洋の諸国、アフリカの諸民族などに対する軽視になってくる傾向も同時に認められるのではないか。私はアメリカやイギリスに生徒をつれていくのは、ひとつにはそういう狭く貧しい気持ちを体験的に見なおす契機を与えるよがになると信ずるからである。つきあってみれば、結局は人間同士なのだ。それぞれくせがあったり、得手不得手があったりする、我々同様の人間なのだ。どこの国でも。

一郎君。

これからは我々個々人の生き方のすべてについて、地球的な規模で考えていかなければいけない時代だ。たまたま今度君が体験しに行くアメリカで、いつもそういう気持ちで生活してみてごらん。君はきっと、見るもの聞くものすべてに新しい好奇心が湧いてきて、ますます活動的な気持ちになるよ。

充実した、そして楽しい旅になることを祈っている。

草々

(東京都立駒場高等学校教諭)

合本 第5巻
英語展望 Nos. 49~60 定価 6,500円

英語教育の現状と改革の方向 (2), (3), (4)

マザー・グースのすべて

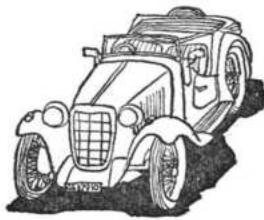
異文化間コミュニケーション (1), (2)

日本の英語教育

オーラル・アプローチ実態調査

どんな英語を学ぶべきか

国際人の条件



アメリカ英語研修

—現状と将来への提言—

ハルコ・クック

当世英語研修生

私のいるカリフォルニア州立大学ロング・ビーチ校でも、毎年日本人の英語研修生が増加し、キャンパスのいたる所でその姿を見かけるこの頃である。夏ともなれば、約1か月の短期プログラムが、いくつも実施され、大学寮は日本人村と早変わりする。短期プログラムでは大抵午前中の英語の授業が終わると、午後はあちこち見物に行き、ほとんどが英語クラス付きアメリカ観光旅行といった感だ。これらは期間も短かいため、ほとんどの参加者がアメリカ観光と、少々の英語を満喫し、夏の終わりには、たくさんのおみやげと共に、「よかったです！」を連発しつつ日本へ帰って行く。それに比べ、長期（3か月～9か月）の研修は観光といった性格が薄い。今回は、長期研修について話してみたいと思う。

加州立大学では社会人一般を対象とした研修を実施しており、高校卒以上の男女誰でも参加することができる。参加資格として英語力は問われないので、学生の語学力はさまざまである。年齢は圧倒的に20歳から25歳が多い。授業は週5日制で、午前9時から午後3時まで、文法、発音、作文、会話、アメリカ文化について、すべて英語で行なわれる。

最近参加した男女130名について（男76名、女54名）、アンケートを行なった結果、次のような回答が得られた。

問1：何故このプログラムで英語を勉強したいのですか。

- | | |
|-------------------|-----|
| 答：1. アメリカ生活の経験のため | 84名 |
| 2. 仕事のため | 33名 |
| 3. TOEFL受験に備えて | 29名 |
| 4. その他 | 3名 |

問2：プログラムから何を期待しますか。

- | | |
|-----------------|-----|
| 答：1. 英語を流暢に話す | 77名 |
| 2. アメリカ人と友達になる | 54名 |
| 3. アメリカ文化について知る | 39名 |
| 4. アメリカを旅行する | 18名 |

問3：プログラム終了後の目的は？

- | | |
|---------------------|-----|
| 答：1. 特に目的はない | 38名 |
| 2. アメリカの大学（短大も含む）入学 | 20名 |
| 3. アメリカ旅行 | 20名 |
| 4. 日本の大学へ戻る | 17名 |
| 5. 英語関係の仕事を日本で見つける | 10名 |
| (その他、いずれも10名以下) | |

上記の表で見ると、参加者の多くは、「アメリカ生活を経験してみたいので、研修に参加し、参加すれば英語が流暢になると考へ、研修終了後の目的はない」といった若い人である。仕事のために英語が必要であると答えた者は、130名中たった33名であった。もはや、英語研修留学は、英語の必要性に迫られた人が必死で勉強するという性格のものではなく、観光旅行ではもの足りない人が気軽に参加できる、一種の日本脱出ではないかという気がする。

目的を持って参加しよう

さて、夢見がちに到着する日本人の研修生達は、寮に入ればルームメートは日本人、クラスは皆日本人、どこを向いても日本人だらけと失望する者が多い。それに、英語でうまく自己表現が出来ないイライラが募ると、必ずといっていい程夜のうき晴らしパーティーが始まる。こうなると英語はそっちのけ、せっかくアメリカに来たのだから、毎日英語を使おうと意気込んで来た学生も、「まあそんなこと言わず飲もうよ」という連中に引き込まれていく。日本人集団志向型の弱みだ。夜ふけまで飲むので朝の授業には出席できない。そのうちどの授業も面倒になり、毎日集まってはうき晴らしをするようになる。残念ながらこうして、何も得ずに帰国する学生も多いのである。

もう一つの問題はマリワナであろう。アメリカ人の間でマリワナを吸っている者を見かけるため、日本人もつ

い手を出してみたくなる。しかしマリワナは加州では依然不法である。少量のマリワナを吸っているところを見つかった場合は、罰金で済むこともあるが、大量に所持したり、栽培した場合は、重罪になり懲役に服さねばならない。その後強制送還となり、再度の米国入国を拒否される。マリワナは非常に危険であることを知っておいてほしいと思う。

アメリカは、誘惑の多い社会である。参加者には、今まで親元で育ち、親に言われて勉強して来た自主性の少ない者が少なくない。

朝起きて学校へ行けと言う母親をアメリカまで連れて来たわけではない。すべてがこの社会は自由に見える。しかし責任あっての自由である。アメリカ人学生のほとんどは、アルバイトをして学費、生活費を稼いでいる。精神的にも経済的にも自立した生活をしているので、生活のきびしさを知っている。ところが親がかりの者が多い日本人学生の中には、このきびしさを知らず、すべてが自由とばかり遊びまわって、交通事故を起こし、ひどい目に遭う者もいる。

このような嘆かわしい状況の原因は、一般社会人向け英語研修留学の多くが、特に学位、資格を取得するためのものでないこと、又学生の多くが目的のない日本脱出組であることにあるよう気がする。これから英語研修留学に行かれる方に、私は、ぜひ何かの目的を持って参加することをお勧めする。目的がある場合には、必ず得るものもあるであろう。また3か月以上の研修の場合には、何らかの方法で、語学力、適性のテストを実施し、参加者を撰抜すべきであると思う。

どの位英語力が必要だろう？

では、どの位の語学力が最低望ましいであろうか。私の意見では、わからない事柄が尋ねられ、また簡単な用件が伝えられることだろうと思う。よくアメリカ人の教師から、日本人はクラスで黙りがちだが、どうしたらよいのだろうかと相談を受ける。日本人研修生は、先生の言っていることがわからなくて困っていると言う。先生の言うことがわからなければ、“I don't understand what you've said. Could you speak slowly?”と、もう一度ゆっくり言ってもらう。更にまだわからなければ、“Could you write it?”と言って書いてもらえばよい。アメリカ社会では以心伝心が通じにくい。黙っていても、先生が察してくれると思ったら間違いである。後で「あの時はこうだった」とアメリカ人に言うと、“Why didn't you say so then?”と言われるであろう。

アメリカ社会は自分のことは自分でする主義の社会で

ある。先日もある研修生が私の所へ来て、「大学の建築学科を見学したいのだが、どこへ行ったらよいか誰も教えてくれない。」と訴えて来た。日本人は特に団体で来ると、至れり尽くせりで世話をやいてもらって当たり前というような顔をしている人が多い。例えば大学の正規のクラスを見学したければ、キャンパスの売店でスケジュールを買い、見学したいクラスを見定めて、自分で教授の研究室を捜し、会って、見学の許可をもらわなければならない。誰も代わりに許可を取って来てくれない。アメリカ人は知っている限りの情報を提供してくれるだろうが、それをもらったら自分で足を運んで事を解決するのが原則となっている。だから日本式に、「じゃあ、私が○×教授を知っているから、明日電話して君のことをよく話しておくから心配しなくてもいいですよ。」と、言ってくれるアメリカ人は少ない。大抵「ここに教授の電話番号があるから、かけてごらんなさい。」と言われる。

以上述べてきたような状況下で生活することを考えると、次のような点を渡米前にマスターしておくことが必要ではないかと思う。

- (1) 質問に対して意志表示が出来る。
- (2) わからない時には、はっきりわからない旨、相手に伝えることができる。
- (3) 買い物、電話の応対、その他のごく簡単な日常会話が出来る。

ただ、簡単な文を読んで理解できるだけでなく、実際の場面で英語で話せなければいけない。これは訓練のことで、テレビ、ラジオの英会話番組等を利用して、渡米前にぜひ会話を練習しておくことを大いにお勧めしたい。

Cultural Sensitivity を身につけよう

海外英語研修旅行は上に述べたような問題を常にかかえているのだが、それでも私はある人達が説くような、「海外研修旅行廃止説」を支持したくない。歴史を振り返ってみると、移民は別として、これだけ多数の日本人が、特に若者が、海外へ出かけていったことはかつてなかった。私は多くの日本人に外国で外国语を勉強する機会が与えられたことは喜こぼしいことだと思う。貿易立国の日本は、もう文化的に孤立していることはできない。外国语を通じてじかに外国人の人、文化に接して来ることは貴重な経験である。外国の文化に触れ、cultural sensitivity を養うことにより、日本文化、また自己を客観的に見ることが出来るものだ。

ここで私の言う文化とは、華道とか茶道といったものではなく、ごく日常的な習慣等のことである。ごく卑近

な例を取れば、電話のかけ方でも日米で異なっている。日本では電話が鳴ると、かけた方も、かけられた方も同時に「もし、もし」と言うが、アメリカでは相手が“Hello”と言うのを待って、話し始めるのが常である。こんな小さい相異が数えきれない程ある。電話の話の続きをすれば、例えば、A宅へBから電話がかかって来たとする。Aの奥さんが電話口に出る。Bは“May I speak to A?”と言う。この時、A夫人は相手Bの名前を尋ねる必要はないのだ。ただ“Just a moment.”と言って受話器をAに渡せばよい。それを相手が誰かいちいち尋ねると、個人のプライバシーの侵害と受け取られる可能性もあるという。日本の感覚から言うと、奥さんは、「どなた様ですか。まあいつも主人がお世話になっております。」と一言挨拶するのが礼儀であろう。日本人から見ると、アメリカ人のやり方は不作法に見える。慣れない土地で物事がうまくいかない時、誰かに不満や問題を聞いてもらいたい。ただ相手が自分の立場をわかって同情してくれれば気持がすっきりすると、日本人なら誰しも思うだろう。ところがアメリカ人は問題解決志向型の民族であり、話はきいてくれるが、すぐに具体的な解決策を提案してくれる。これは有り難いのだが、問題はこのような解決策では割り切れない所に問題があることが多いのだ。そんな時日本人はよく話をきいて、「君の問題は

よくわかるよ」と言ってもらいたいものだ。それで、アメリカ人は同情心がないと批判したくなる。人間というものは、自分の生まれ育った言語習慣から一生抜けられない。自分の育った習慣は絶対であり、他の現実があるとは考えられないのだ。始めて外国へ出て異なった習慣に触れた時、多くの人は自分のやり方が正しく、相手のやり方は誤っているという判断で自己を正当化したくなる。この時「ちょっと待てよ。自分のやり方も正しいが、相手のも相手の社会では理にかなっているのではないだろうか。」と考えることこそ、外国で生活するにあたって大切なことである。要するに、cultural relativityの感覚を身につけることである。感情的には生まれ育った習慣から抜け出すことはほとんど不可能に近いが、理性的に相手の習慣を理解し、自分の習慣も相手の習慣も、世界のさまざまな習慣の一つにすぎないということを認識することが出来ればすばらしいと思う。

私は、このような理解、認識が本当の意味の国際理解であると思う。英語研修生の方々が、外国でこのような cultural sensitivity を養い、文化の相対性が理解できれば、将来、日米両国にとっても、また他の国々にとっても、非常に有益であろうと考えている。

(Bilingual Consultant of US Program,
California State University)

(p. 4 よりつづく)

思った。もっとも、カナダ人は昔から、アメリカ人よりも口数が少なく、とっつきにくい、という定評があったものだが、どうもカナダ（特にバンクーバー）の若者たちにみられたのは「寡黙」という美德（？）ではなく、「無愛想」であり、対人的な思いやりの欠如だったようと思う。その証拠に、たとえば“Last name?”という質問をこちらが聞き落とし、ぼやっとしていると、繰返してくれると、その繰返すときの口調に、露骨にいらだちと軽蔑の念が現われ出るのが感じとれるのである。心構えが、大体、よろしくない。

人の心の地域差

もっとも、広いカナダのこと、土地によって、人の心のあらわれ方が違うのである。私は、東へ行くほど、人の心からとげとげしさが薄れていくような印象を受けた。トロントの町の若い人たちは、バンクーバーより、一般に物柔らかな口調で話してくれたし、事実、親切だった。この東端のニューファンドランド島まで来ると、どういうわけか clipped sentence までが少なくなってくるよう

な印象を受けるのだった。近所の食料品店のおやじさんも、こちらが買物をすませると“Thank you very kindly, sir.”とていねいに full sentence で挨拶してくれるし、気のせいか、ここでは、お客様に対して“sir”とか“please”ということばを使う率がカナダ本土(Mainland)よりもかなり高いように感じられた。荒涼たる風土の counterbalance として、人の心が暖かになっているのかもしれない——そんな思いを抱きながら、私は、この島の生活を始めることになった。

（東京大学教授）



(資料) 今年行なわれる主な海外英語研修旅行



下記の資料は、1979年10月に信頼できる団体および旅行業社に対し、1980年度に行なわれる予定の海外英語研修旅行についての資料の提供を求め、その結果をまとめたものである。

掲載した資料の数字は、1. = 旅行代理店、2. = 研修地、3. = 研修内容および特色、4. = 募集対象、5. = 旅行期間(予定)、6. = 見学都市、7. = 費用(概算)を示している。なお、掲載は各項目とも主催団体名のアルファベット順による。

I. アメリカ

◆英語教育協議会(ELEC)

〒101千代田区神田神保町3-8 電話03-265-8911

ELEC 海外英語研修旅行 ウエストコースト・ホームステイとハワイの旅

1. 近畿日本ツーリスト 2. サンフランシスコ郊外またはサンディエゴ郊外 3. 3週間のホームステイを実施し、1週間に3日間9:00-12:00の3時間の英語研修を行なう。なお、出発前にELEC専任講師による事前研修を実施し、研修効果を高める。4. 大学生 5. 2月下旬より27日間 6. ホームステイ地とホノルル 7. ¥348,000

ELEC 海外研修 アメリカ生活体験

1. 近畿日本ツーリストSTセンター 2. カリフォルニア州、ワシントン州 3. 現地人教師による英語学習、現地生徒との交流やスポーツ、ホームステイによる生活体験および日本文化の紹介。4. 中学2年生-高校3年生 5. 夏休み期間中の22日間 6. サンフランシスコ、ロスアンゼルス 7. ¥420,000

第9回ミシガン州立大学英語研修旅行

1. 日本交通公社海外旅行新宿支店 2. ミシガン州立大学 3. 1クラス10名程度に分かれ、Pronunciation, Aural Comprehension, Writing, Reading, Lecture等毎日4時間の授業が行なわれる。その他、ホームステイ、Home visit、ピクニック、野球見学等も週末行事に組み込まれている。4. 教員、一般社会人、学生 5. 7月下旬から約1か月間 6. サンフランシスコ、シカゴ、ランシング、デトロイト、バッファロー、ニューヨーク、ワシントン、ロスアンゼルス、ホノルル 7. ¥698,000

◆阪急交通社

〒100千代田区有楽町1-7-1有楽町電気ビル 電話03-214-5731
(代)

第14回カリフォルニアの家庭滞在と英語研修

1. 阪急交通社 2. 米国カリフォルニア サンフランシスコ湾地区 3. 研修センターで20名前後のクラスで実践的英会話を勉強する。研修日の約半分はエクスカーション・社会

見学等の課外授業となり、ホスト・ファミリーとの野外パーティーも盛んに行なわれる。ホームステイ期間は3週間。4. 高校生以上一般27歳まで 5. 2月24日-3月20日(26日間) ホノルル・コースは帰路ホノルルに2泊するため期間は28日間。6. サンフランシスコ市内観光 7. ¥298,000(サンフランシスコ・ステイ), ¥338,000(ホノルル・コース)

◆インターナショナル ランゲージ サービス(ILS)

〒100千代田区大手町1-7-2サンケイ新聞社本館7F 電話03-246-1811

サンケイ新聞社後援 第11回カリフォルニア州立大学夏季短期留学

1. ILS 2. カリフォルニア州ロングビーチおよびサンディエゴ 3. 大学寮滞在。カリフォルニア州立大学両校の言語学部スタッフによる徹底した英語レッスン、および現代アメリカの生活、文化、経済、社会等、広範囲な分野にわたる講座がある。4. 高校生、大学生、一般社会人 5. ロングビーチ=7月18日-8月22日、サンディエゴ=7月25日-8月29日 6. ロングビーチ・コース—ロングビーチ、ロスアンゼルス、ハワイ; サンディエゴ・コース—サンディエゴ、ロスアンゼルス、ハワイ 7. ¥425,000

サンケイ新聞社後援 第5回カリフォルニア州立大学サンノゼ校英語教員夏季特別研修

1. ILS 2. カリフォルニア州立大学サンノゼ校 3. 現代日本の英語教育において不十分になりがちな口語英語の修得、総合的英語能力の修得に重点を置き、同時に英語教授法の研鑽を行なう。4. 大学生、一般社会人 5. 7月22日-8月20日 6. サンノゼ 7. ¥410,000

◆国際教育センター

〒531 大阪市大淀区豊崎3-20-9三栄ビル 電話06-374-0025

Summer Study in USA

1. 日本旅行関西海旅センター 2. ロスアンゼルス・シアトル・サンフランシスコ・サンディエゴの各ホームステイ地域の高校 3. 全期間ホームステイ。毎朝9時から正午まで現地のハイスクールで英会話を中心とした授業を行なう。その他、カリフォルニアの歴史、社会、政治、美術のレッスンも受けられる。4. 中学生、高校生 5. 7月24日-8月14日 6. サンフランシスコ、ロスアンゼルス 7. ¥428,000

◆国際教育交換協議会(CIEE)

〒100 千代田区永田町2-14-2山王グランドビル205号室 電話03-581-7581

1980年度第8回「日米高等学校交流プログラム」派遣プログラム

学生 5. 2月下旬より28日間 6. ケンブリッジ、ロンドン、パリ、ジュネーブ、ミラノ、フローレンス、ローマ 7. ¥378,000

オックスフォード大学英語研修旅行

1. 近畿日本ツーリスト 2. オックスフォード 3. オックスフォード大学セント・ヒルダズ・カレッジにおいて2週間の英語研修を行なう。4. 中学・高校英語科教員 5. 7月下旬より29日間 6. オックスフォード、ロンドン、パリ、ジュネーブ、ニース、フローレンス、ローマ 7. ¥678,000

◆国際教育交換協議会（CIEE）

〒100 千代田区永田町2-14-2山王グランドビル205号室 電話03-581-7581

第6回「英国における英語研修講座」

1. 日本交通観光社 2. バス大学またはエジンバラ大学 3. 大学における4週間の集中講座、英國の中等学校における1週間の教育実習および2週間のヨーロッパ研修旅行を行なう。4. 1980年4月1日現在、55歳以下の中学・高校英語担当教員および教育委員会英語担当指導主事 5. 7月21日—9月12日 6. パリ、チューリッヒ、ミュンヘン、アムステルダム、ロンドン 7. ¥880,000

◆毎日コミュニケーションズ

〒100千代田区一ツ橋1-1-1毎日新聞社内 電話03-211-2539

毎日海外研修プログラム

1. 日本交通公社、日本旅行、アイシェイトラベル 2. ケンブリッジ、オックスフォード、ペルスクール、エジンバラ、ストラットフォード・アポン・エイボン他9コース 3. 各コース共、1日3—5時間、3—8週間の英語研修を行なう。コースによっては国際ミックス・クラス、ホームステイも可。4. 16歳以上40歳未満 5. 2月中旬—3月下旬の4—6週間(コ

(p. 40 よりつづく)

ティーとセンターの意見の交換、他のコミュニティからの政治上の独立性を最大限に反映させる努力、センターの手によるアルファベットがコミュニティの人々に全面的に受け入れられる前提としてコミュニティに尊敬されている長老たちから資料を収集し、彼ら長老達に先ず受け入れてもらう説得の努力、等々、直接文字とは関係のない種々の仕事が次から次へと出て来たための長期戦であった。

私達大学に關係する者には、自己の研究とは直接關係のないように見えるこのような仕事も、一般社会へ貢献する仕事として大切なことであり、少しずつではあるが、大学關係者の重要な役割の一つとして学界から認められ始めて来ている。これから将来も、二重言語・文化教育は、合衆国において民主主義国家の重要な一端として、國家からの資金援助、教員養成への努力が続けられるものと思われる。従って、私達言語学者に対しても、言語学者であると共に、教育者としての要求が増え続けることであろう。

山本 昭（カンザス大学人類言語学准教授）

山本吉見子（カンザス大学比較文学助教授）

ースにより異なる。）6. コースにより異なるが、ロンドン、パリ、ローマ、ミラノ、ジュネーブ、その他 7. ¥348,000—¥638,000

◆大修館書店『英語教育』

〒101千代田区神田錦町3-24 電話03-294-2221 (大代表)

第12回語学研修とヨーロッパの旅

1. 日本交通公社 2. ダブリン 3. 会話コースと文学コースそれぞれ10—15名を1クラスとし、約1週間研修する。この間1人1家族を原則にホームステイ。4. 中学・高校英語科教員 5. 7月24, 25日—8月23, 24日(30または31日間の予定) 6. ロンドン、ダブリン、エジンバラ、カーライル、グラスゴー、ウィンダーシア、ストラットフォード・オン・エイボン、パリ、ケルン、ハイデルベルグ、ルツェルン、ローマ、ナポリ、ポンペイ、フィレンツェ(以上予定) 7. ¥700,000

III. ニュージーランド

◆阪急交通社

〒100 千代田区有楽町1-7-1 有楽町電気ビル 電話03-214-5731 (代)

第5回ニュージーランドの家庭滞在と英語研修

1. 阪急交通社 2. ニュージーランド北島オークランドより南へ130kmのハミルトン 3. ハミルトンでホームステイを行ない、附近に設置された研修センターで、主に実践的な英会話を1日3—4時間勉強する。クラスは10名前後の小人数制。その他エクスカーション、社会見学等の課外授業がある。4. 高校生・大学生・一般 5. 1980年2月27日—3月27日 6. 香港、オークランド、ハミルトン 7. ¥445,000

(p. 42 よりつづく)

は振れぬ」ということである。モームの *The Moon and Sixpence* の主人公 Strickland はフランスの画家 Paul Gauguin をモデルにしている。絵の修業のため妻子を棄てパリに出た Strickland をなんとかしてロンドンへ連れ戻してもらいたいという依頼を受けた作中の「私」(I) がしきりと説得している場面に次の対話がある。

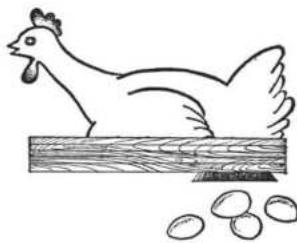
'At all events, you can be forced to support your wife and children', I retorted, somewhat piqued. 'I suppose the law has some protection to offer them.'

'Can the law get blood out of a stone? I haven't any money. I've got about a hundred pounds.'

「だが、とにかくですねえ、あなたは、いやでも応でも、奥様とお子さんを扶養する義務は負わされるんだ。」と、ぼくも多少ムッとして、言い返した。「たぶん法律が、それ相当の保護をしましょうからね。」

「いくら法律だからって、石塊(?)から血が絞れるかね？ ぼくは金なんぞ持ってやしない。あっても、まあ百ポンドくらいのものかな。」——中野好夫訳)

(静岡県立清水東高等学校教諭)



英語謎々考

橋内 武

O. はじめに

When first I appear I seem mysterious,
But when I'm explained I'm nothing serious.
—A riddle.

謎々は、昔話・伝説・寓話・俗諺等と共に伝承文化の一部を形造ってきた。しかし、

- (1)プロットがなく
- (2)文芸性と教訓性を欠き
- (3)遊戯性に重きをおいた
- (4)問答形式である

という特徴が災いしてか、英文学徒の間では等閑視されてきたように思われる。しかし、民俗学や言語学の上では、関心をそそる問題をいくつもはらんでいる。そこで、本稿では、英語の謎々について、形式、内容、技巧等の各方面から考察してみたい。筆者が英語学徒であるために、内容よりも形式を優先させる傾向があることは、予めお断りしておかねばなるまい¹⁾。

1. 謎々の形式

謎々が、問答形式である点に着目し、まず問い合わせだけを切り離して考えてみると、これには、3つのタイプがあることが判明する。第1のタイプは、1や2のようにいきなり謎を掛けるものである。

1. What stands on one leg and has its heart in its head? —A cabbage.
2. What has eighty-eight keys but can't unlock a single door? —A piano.

第2のタイプは、「なぞなぞナーニ」('Riddle me')のようなきまり文句(speech formula)が先頭に表われ、そのあとにこれから解いてもらおうとする謎の内容が描写される場合である。

3. Riddle come, riddle come ruckup!

What fell down and stuck up? —A fork.

4. Riddle me, riddle me,
What is that:
Over the head
And under the hat? —Hair.

これとは逆に、きまり文句があとに来る方が、第3のタイプである²⁾。最後の行に注意しながら、5と6の例を読んでみよう。

5. As I went through the garden gap,
Whom should I meet but Dick Redcap?
He had a stick in his hand and
a stone in his throat—
Answer this riddle and I'll give
you my goat. —A cherry on a tree.
6. Look into my face and I'm everybody;
Scratch my back and I'm nobody.
Who am I? —A mirror.

上記の3類型とは反対に、答えの方に注目すると、「二段なぞ」／「三段なぞ」の区別が生じる³⁾。二段なぞの方は、ただ単に答えを問う形式であり、子供達の間で受け継がれてきた。7.は誰でも知っているごく卑近な例である。

7. 上は大水、下は大火事ナーニ ——風呂.
8. Who gets the most kicks out of his job?
—A footballer.

一方、三段なぞでは、9のように問い合わせの結びつきについて説明する部分が加わる。この方は、本邦では近世以来演芸の世界でひろまつたものである。

9. 節分と掛け——鳩と解く——その心は豆を捨う.
10. Who was the fastest runner in history?
—Adam. He was the first in the human race.

英語の謎々では、「二段なぞ」／「三段なぞ」の違いは、

口承文芸史上明白に区別されるようなものではなく、問いと答えとの間がかけ離れている場合には、ひとこと理由を付け加えるにすぎない。

ところで、謎々問答を一種の対談と見做すと、次のような対話行動の型が存在することが判明する⁴⁾。斜線は「或いは」(or)の意。

対談者A	対談者B
謎をかける	謎が解けない／
正解を示す	誤答を出す／
Bの手柄を誉めるべきである	Aが考えもしなかった正解を思いつく／
Bの手柄を誉める	正解を出す

この表から次のことが言える。

- (1)謎々問答は、対談者Aが謎掛けを行うことによって始まる。
- (2)次に、Bが右欄のいずれかの行動をとる。これには4つの可能性がある。
- (3)Bの反応如何によって、Aは正解を示したり、Bを誉めて「御名答」と言ったりする。

このように謎々問答は、1から2へ、2から3へと展開する談話構造を探るのである。

2. ヒントの数と答えの数

ところで、数多くの謎々を当ってみると、ヒントの数や答えの数もまちまちであることがわかる。ヒントの数は、1つだけのもの、2つあるもの、3つあるもの、さらには4つ、5つの例さえも見つかる。

ヒントが1つしかないもの：

11. A riddle! a riddle!
A hole in the middle! —A doughnut.

ヒントが2つあるもの：

12. What runs about all day and lies under the bed at night? —A shoe.

ヒントが3つあるもの：

13. The man who made it did not want it;
The man who bought it did not use it;
The man who used it did not know it.
—A coffin.

ヒントが3つ以上になると、14のような連鎖謎(chain riddles)になることが多い⁵⁾。

14. There was a little green house;
And inside the little green house
There was a little brown house;
And inside the little brown house

There was a little yellow house;
And inside the little yellow house
There was a little white house;
And inside the little white house
There was a little sweet heart.

—A walnut.

手懸りの数は、いくつあってもよいが、大方のなぞは、12のように2つのヒントから成っている。

他方、謎の答えは、ふつうひとつだが、16, 17のように2つまたはそれ以上のこともある。17の類例には、「風が吹けば桶屋が貰かる」があり、連鎖答(chain answers)と呼ばれる。

15. Two people sat down on a log to rest.
One was the father of the other but the other was not his son. What kin were they? —A father and a daughter.

16. Beyond the seas there is an oak,
And in that oak there is a nest,
And in that nest there is an egg,
And in that egg there is a yolk
Which calls together Christian folk.
—A church, the steeple, the bell and the clapper.

17. Why is the wind blind?
—The wind is a breeze; a breeze is a zephyr; a zephyr is a yarn; a yarn is a tale; a tail is an appendage; an appendage is an attachment; an attachment is love; and love is blind.

謎の中には、次の2例のように正解のない場合もある。18は、「鶏が先か卵が先か」の問い合わせである。

18. Which comes first, the chicken or the egg?
19. Where does a pigs squeal go when he dies?

3. 謎々の内容

Archer Taylor (1968) の説明を待つまでもなく、英語の謎々は、描写型の謎 (Descriptive Riddles) と機知を要する問い合わせ (Shrewd Questions または Catch Riddles) に大別される⁶⁾。

描写型の方は、身近な動物、植物、物体、自然現象、身体各部などの外観を述べるものであり、愛とか怒りなどのような抽象概念は答えとして期待されはしない。すでに挙げたもの多く(例えば、1~5)は、描写型に入るし、『マザー・グース』にも入っている「ハンプティー・ダンプティー」も「リトル・ナンシー・エティコート」も描写型の謎である。

20. Humpty Dumpty sat on a wall,

Humpty Dumpty had a great fall;
 All the king's horses,
 And all the king's men,
 Couldn't put Humpty together again.
 —An egg.

21. Little Nancy Etticoat
 In a white petticoat
 And a red nose:
 The longer she stands
 The shorter she grows.
 —A lighted candle.
- 描写型は、what（擬人化の場合はwho）を問うものばかりであるが、catch riddlesと呼ばれる意地の悪い質問は様々な技巧を使い、内容も多岐にわたる。
22. Is it better to say, "The yolk of an egg is white," or "The yolk of an egg are white"?—Neither is right. An egg yolk is yellow.
23. What is in the middle of Paris? —R.
24. Who died but was not born? —Adam.
25. How can you show that two times ten equals two times eleven? —Two times ten is twenty and two times eleven is twenty-two (twenty, too).

同一または類似の内容を表わす謎が、シリーズをなす場合には、それぞれの範疇に名称が付けられている。23はLetter Riddles、24はBible Riddles、そして25はArithmetic Riddlesの一例である。ほかに、Barnyard Riddles、Bird Riddles、Body Riddles、Elephant Riddles、Flower Riddles、Kinship Riddles、Little Moron Riddles、Number Riddles、Nut Riddles、Occupation Riddles、Place Name Riddles、Spelling Riddles、Time Riddles、Tree Riddles等がある。

次にElephant Riddles(26~38)を掲げるが、5~6年前に流行した「カモメのジョナサン・シリーズ」は、この手のものと考えてよい。

26. What is big, grey and mutters?
 —A mumbo jumbo.
27. What's grey and lights up?
 —An electric elephant.
28. What's grey and white and red all over?
 —An embarrassed elephant.
29. What do you call an elephant that flies?
 —A jumbo jet.
30. What did the hotel manager say to the

- elephant who couldn't pay his bill?
 —Pack your trunk and clear out.
31. What do you give an elephant who is exhausted?
 —Trunkquillizers.
32. What did the river say to the elephant when he sat on it?
 —'Well, I'll be damned.'
33. What do you give an elephant with big feet?
 —Plenty of room.
34. What time is it when an elephant sits on a fence? —Time to get a new one.
35. What do you get if you cross an elephant a goldfish?
 —Swimming trunks.
36. What's the difference between a lemon and a white elephant?
 —A lemon is yellow.
37. What's the difference between an Indian Elephant and an African Elephant?
 —About 3,000 miles.
38. What's the difference between a biscuit and an elephant?
 —You can't dip an elephant in your tea.

4. 謎々の構文

前節すでに気付いたことだが、英語の謎々は、「X is A. What is X?」という形をとるものばかりではない。同じwhatで始まっても、比較級+thanの形式をとるものや、「What is the difference between A and B?」の形をとるものもある。

39. What is whiter than milk? —Snow.
40. What's the difference between a postage stamp and a girl?

—One is mail fee and the other a female.

以下、what以外の疑問詞が文頭にくる例を挙げておこう。

Whichの例：

41. Which side of an apple is the left side?
 —The side you haven't eaten.
42. Which is the strongest day of the week?
 —Sunday. The rest are week days.

Whoの例：

43. Who always goes to bed with his shoes on?
 —The horse.

44. Who is least likely to put on too much weight? —The butcher.

Where の例：

45. Where should you feel for the poor? —In your pocket.

46. Where did Washington go when he was 39 years old? —Into his 40th year.

How の例：

47. How long should a man's legs be? —Long enough to reach the ground.

48. How can you prove that a horse has six legs? —Every horse has four legs (forelegs) in front and two behind.

Why の例：

49. Why do we all go to bed? —Because the bed will not come to us.

50. Why does a railroad gateman punch a hole in your ticket? —To let you through.

勿論、疑問詞を用いないでも謎を掛けることはできるわけで、この点次に示す5つの例を比較したいものである。

51. Is there anything a man with a camera cannot take? —Yes, a hint.

52. Did you hear about the musician who spent all his time in bed? —Yes, he wrote sheet music.

53. Shall I tell you the joke about the pencil? —No, there's no point in it.

54. Spell 'dry grass' with three letters. —Hay.

55. My first is part of the day.
My second lets the light pass.
Together they measure the time.
—Hour-glass.

疑問構文と相並んで、命令構文(54)や平叙構文(55)も使われていることがわかる。

5. 音解き・意味解き・文字解き

謎々は、一種のことば遊びである。ことばは、音と意味から成り立っているので、「音解きなぞ」と「意味解きなぞ」があることは、すでにお気付きであろう。ほかに、英語や日本語のように文字言語の場合には、「文字解きなぞ」が加わる。そこで、本節では、これら3つの

解き方について光を当ててみよう。

まずは、音解きなぞについて。これは、同音異義語、多義語、同音の音節など音の類似を手懸りにするなぞである。例えば、56などは、我々に身近な例であろう。

56. 寒くなるほどあつくなるものナーニ —氷
以下類似の例を英語の謎々集から抜き出しておこう。

57. What is the best way to raise strawberries? —With a spoon.

58. Why is your heart like a policeman? —Because it follows a regular beat.

59. How do we know that phonographs have been to jail? —Because they all have records.

60. What bird is religious? —A cardinal. (1. 枢機卿, 2. 紅冠鳥)

61. What pets make the loudest music? —Trumpets.

62. Which of your kin is nearest you at the table? —Your napkin.

一方、意味解きなぞの方は、隠喩や直喻による表現であり、所謂「描写型のなぞ」はこの手法を用いている。まずは、我々に身近な日本語のなぞを2つ挙げ、それから英語の類例を並べるとしよう。

63. 段々畑に黒畑 —屋根瓦.

64. 段々畑に白畑 —障子.

65. Crooked as a snake, flat as a plate, Ten thousand horses couldn't pull it straight. —A river.

66. My face is marked,
My hands keep moving;
I've no time to play—
I must run all day. —A clock.

67. What has a foot and a head but can't walk or think? —A hill.

68. What do you have that a bottle has?
—A neck.

69. Thirty-two white horses on a red hill
Now they stamp, now they champ
Now they stand still. —Teeth.

文字解きなぞは、文字や記号を手懸りとするなぞであり、その中には、文の形をとらない判じ物になっているものもある。次に掲げる例について考えてみよう。一見して、74と75は他とは全く異質なものであることがわか

るだろう。

70. What changes a lad into a lady?
—The letter Y.
71. What is the longest word in the dictionary? —'Smiles', because it has got a mile between the first and last letters.
72. Why is the letter A like noon?
—Because it's in the middle of day.
73. What state is round both ends, and high in the middle?
—Ohio.
74. B 10
—Beaten.
75.

M
180 on day

What does it mean?
—I ate nothing on Monday.

6. むすび

限られたスペースに盛り沢山の謎々を紹介したので、読者は当惑したかもしれない。しかし、英語の謎々について、ある程度の理解を得ていただけたものと信じる。

謎々は、諺と相並んで口承文芸の一ジャンルを構成する。郡司利男、中右実の両氏によって研究の進んだ「ことわざの言語学」に比べると、英語の謎々の言語学的解明は著しく遅れているように思われる。そこで、筆者は本稿で、なぞの言語的特徴に焦点を定め、いくつかの類型を提出した。謎々は、童謡 (nursery rhymes) や民謡 (特に ballads) や民話 (folk tales) の中でも用いられている。従って、謎々の内部構造を分析するだけでなく、今後はその機能についても考察することが望まれる。加うるに、謎解きは連想の産物であるゆえ、心理学の知見を借りることも必要であろう。

英語学習の上では、謎々ほど楽しく面白い教材はないはずであるし、同音異義語や隠喻を通して、言語感覚が磨かれるここと詰け合いである。また、頭韻、脚韻、対句法などとの出会いは、英詩鑑賞への糸口にもなろう。平野敬一氏のすすめる「非文学英語」には、当然、「なぞなぞ英語」も含まれるものと思われる。

なお、本文中例示した英語の謎々は、以下の書物によっている。記して、編者に謝意を表したい。

- Brook-Taylor, T., et al eds.
The Crack-a-Joke Book. Harmondsworth: Penguin Books, 1978.
- Opie, I. and P. Opie, eds.
The Oxford Dictionary of Nursery Rhymes.

London: Oxford University Press, 1951.

- Wiesner, W., ed.
The Riddle Pot. New York: E. P. Dutton, 1973.
- Withers, C. and S. Benet, eds.
The American Riddle Book. New York: Abelard-Schuman, 1954.

(ノートルダム清心女子大学助教授)

注

- 1) 本稿は、去る昭和54年10月20日に岡山大学教養部で開かれた、日本英文学会中国四国支部第32回大会での口頭発表「謎々の定義と類型」に基づく。
- 2) 描写型のなぞでは、対象になっているなぞを単に記述するに留まることが多いが、これは、第3のタイプの変種であって、"What am I?" が省略されていると見做せよう。
- 3) わが国の謎々については、鈴木栄三編『ことば遊び辞典』(東京堂、1959) を参照。
- 4) See John Platt & Heidi Platt, *The Social Significance of Speech* (Amsterdam: North-Holland, 1975), p. 156.
- 5) 'Chain riddles' という用語は、民俗学者 Archer Taylor の造語である。
- 6) See Archer Taylor, 'Riddle' in *Encyclopaedia Britannica*. Vol. 19 (Chicago: Encyclopaedia Britannica, 1968), pp. 320-21.
- 7) 以上の名称は、C. Withers and S. Benet, eds. *The American Riddle Book* による。

THE STARS

The stars are shining
In the sky,
Millions of stars,
Though I cannot tell
What they are saying,
They are my musing delight.

The stars are twinkling
In the sky,
Millions of stars,
Though I cannot reach them,
They are my touching pleasure.

by Tsutomu Fukuda



漱石のロンドン（その4）

伊村元道

11. 3軒目の下宿

最初の年（明治33年）の12月、クリスマスの直前に、漱石は下宿を変った。ただし、この年の日記は「12月18日（火）（Craigニュク）」で終っているので、転居の正確な日付はわからないが、26日付の留守宅宛の手紙には新しい住所が記されている。

さて、その住所というのは、6 Flodden Road, Camberwell New Road, London, S.E. の Harold Brett 方である。「S.E.」というのは‘South East’の略で、ロンドンの郵便区域（postal districts）のこと、現在ではもっと細分されて、「S.E. 5」（数字が小さいほど都心に近い）となっている。行政区域でいうと、テムズ南岸のランベス区（Lambeth borough）とサザク区（Southwark borough, ‘borough’は「自治区」）とのちょうど境目になっているのが Flodden Road である。ランベスといえば W.S. Maugham の処女作 *Liza of Lambeth* を思い出しが、あれはモームが医学生時代に産科の医局勤務を命じられ、ランベスの貧民街へ往診に出かけた時の体験をもとにしたもので、彼は『人間の紳』第113, 114章でも当時の経験を使っている。「警官でも立ち入ることをちゅうちょするような、怪しげな路次」とモームが書いているのをみても、この辺の雰囲気は察しがつこう。モームの医学生時代というのは1892-97年で、漱石のいた時期と10年とはちがわないので、當時もほとんど同じだったと考えてよいであろう。事実、漱石は住所にある Camberwell を「貧乏町」と書いている。もっとも、薄暗くてむさ苦しい貧民街と町工場が延々とつづくのは Flodden Road で、そこを右へ入ったのが、 Flodden Road, その右側の角が兵営で2番地、4番地、下宿はその先の角の6番地、そのあたりはややましな住宅地になっていた。だから、漱石が住んだのは貧民街そのものではなくて、その隣り町だったのである。

ところで、漱石が下宿した家であるが、それは元来は個人の住宅ではなくて、私立の女学校の建物として建てられたものであった。だから、この近隣でもちょっと目立つ、ねずみ色のれんが造りの3階建で、白い石の門と石段がついていた。この建物は今から10年ほど前にとりこわされてしまった。（掲載の写真は、とりこわし直前の昭和42年夏、江藤淳氏が写されたもの。）

漱石が借りていた部屋については、彼自身が東京の友人たちにこんなふうに知らせている。

下宿といえば、僕の下宿は随分まずい下宿だよ。3階でね、窓にすきがあって、戸から風が入って、顔を洗う台がペンキ塗のいかがわしいので、それにおもちゃ箱のような本箱と、横1尺縦2尺ぐらいな半間な机がある。（椅子は板張り。）

夜などは、君、ストーブを焚くとドラフト（draught, 「すき間風」）が起って戸や障子のスキからピューピュー風が入る。室を暖めているのだが冷しているのだから分からないね。それから、風の吹く日には煙突からストーブの煙を逆戻しに吹き下ろして、室内は引き窓なしの台所然としている。（1901年2月9日付、狩野亭吉ら4人宛）

どうやらこの部屋は学校の教室だったのを改造したもののらしく、別の手紙（「倫敦消息」）によると、このほか、寝台、たんす（「箪笥というのは勿体ない、ペンキ塗りの箱だね」）、その「箱」の上に「尺4方ばかりの姿見」があって、戸棚もついているようだ。それに、本が書棚や机の上はもちろんのこと、暖炉の上（やがては板の間）にまで、ところ狭しと並べてある。

どうしてまた、女学校が下宿屋にくら替えしたのかといふと、「女学生中に伝染病が起る、生徒がなくなる、借金が出来る、やむをえず閉校して下宿開業、借金返済策と出掛けた」（2月9日付書簡）わけで、漱石が移ってきた

のは転業早々だったようだ。その女学校 (ladies' college) を経営していたのは Misses Sarah & Kate Sparrow の姉妹で、姉が校主で妹が音楽教師であった。その姉が閉校後結婚した相手が Harold Brett である。だから、この家は女天下である。漱石の書いたものをみても、亭主の影はうすい。



6 Flodden Road の家

12. Brett 家の人々

Brett 家は主人と妻とその妹に下女の 4 人家族に、下宿人が何人かいるわけであるが、次にその人たちのプロフィールを漱石の日記や手紙などを材料にしてまとめてみよう。

主人 (Mr. Brett)

「すこぶる膨大なるシマリのない顔をしていて、申訳のために少々鼻の下へ髭をはやしている。」

「亭主もいい奴だが、すこぶる無学で書物などは読んだこともあるまい」とある通り、漱石はそこそこに付き合ってはいるが、腹の底では軽蔑している。が、たまには一緒に外出することもある。

家賃を滞納して家財を差し押さえられそうになっている妻君にとっては、「今迄は女 2 人だと思って随分勝手な事ばかりしたのですが、今じゃ男が付いているから、そなへかり踏みつけられちゃいませんのさ」という、頼りになる存在。小店主らしい。

妻君 (Mrs. Brett)

この家に来た当座は「下宿にしては女学校の女先生だけありて上品に候。色々親切にて家族の如く致しおり候。」と気に入っていたが、やがて「姉君の方はもとはどこかの governess (住込みの女性家庭教師) であったとかで、しきりに昔の夜会や舞踏などの話をする。大変な vanity (虚栄心) の強い女で、お相手をするのがいやだから、フンフンと言って向こう通りを眺めていると、張合いがないとみえて自慢話をやめることがある。」

「姉の方たるや少々お転（婆）だ。……ちょっと小学生の気に入らない点を列挙するならば、第一生意氣だ、第二知ったか振りをする、第三つまらない英語を使つて、あなたこの字を知っておいでですか、と聞くことがある。」というわけで、漱石は彼女の高慢さにはだいぶ反感をいだいている。

妹 (Miss Kate Sparrow)

音楽教師だったが、「ごく内気なおとなしい」人で、漱石の「洗濯や室の掃除などの世話をする。中々行届いたものだ。シャツや股引の破けたのなどは、何にも言わんでもちゃんと直してくれる」と妻に報じている。4月4日の日記には「コノ人娯楽ヲ好マズ、貧ニテ勉強、日々働く。アナタハコンナ生活ヲシテ愉快デスカ、ト聞ケバ、真ニ幸福ナリ、ト答ウ。何故ト尋ヌレバ、宗教ヲ信ズレバナリ、ト答ウ。有難キ人ナリ。」とある。

下女のベン

“I beg your pardon.” と言うべきところをいつでも “bedge pardon” と言うので、「ペッジ・バードン」とあだ名。この下女の cockney 英語は漱石にもさっぱりわからない。ほっぺたの赤い、喘息持ちの娘で、おしゃべりが大好き。「朝から晩まで、晩から朝まで、働き続けに働いて、それから 4 階の天井裏へ登って寝る。」

アーネスト

主人が店で使っている少年。

女学生のロバート

3月28日の日記に「夜、ロバート嬢とピンポンの遊戯をなす」とあるのが、この女学生のことだと思われる。

日本人の下宿人

移ったばかりのころは、「同宿のもの日本人少々これあり候。主人はすこぶる日本人好きにて、西洋人を下宿させるよりは日本人を客にしたしと申しあり候。これは日本人はおとなしく、かつ、金にやかましからぬ故に候」(12月26日付) と書いていたが、翌年2月になると「ウチノ下宿ノ飯ハスコブルマズイ。コノ間マデハ日本人ガ沢山居ッタノデ少シハウマカッタガ、近頃ハ段々下等ニナッテ来タ。」(2月15日付日記) となる。

名前がわかっているのは漱石ともうひとり 2 階の部屋を借りている田中孝太郎 (漱石日記には「田中君」とあって、当時30歳) だけだが、ほかにも何人かいるようだ。漱石も友人や知人を時々宿泊させる。

漱石は「田中君」と一緒によく散歩をしたり、芝居に行ったりする。彼はサミュエル商会で貿易の見習いをしている。漱石のことを「夏金の親分」とか「夏目

のおやじ」と呼んで親しんでいる。

このほかに、「カーロー君とジャック君」という犬2匹が飼われている。

13. 川向うへの転居の意味

この転居について漱石は妻にあてて、「以前の所は東京の小石川の如き所に存じ候。今度の所は深川といふよな、いずれもへんびな所に候。すなわち、北西より南東に転居致し候。」(12月26日夏目鏡あて)と知らせている。

しかし、この川向こう(South Londonとかthe Surrey Sideと呼ばれる)への転居は、ただ単に「北西より南東」へ住居が移ったというだけではすまなかつた。日本経済新聞のロンドン特派員当時、漱石の下宿した跡を訪ねて歩いた葛西嘉雄氏は「ロンドンは、階級観念とアドレス、すなわち住むところのやかましい国である。『住所によって人間の社会的地位の40パーセントはきまる』といわれるほどだ。」と述べて、どんな階級の人がどんな地域に住むかを例示しているが、いまそれを表にしてみると、次のようになる。

上流階級：Mayfair, W.

Belgravia, SW

St. James's, SW

Knightsbridge, SW

Lancaster Gate, W

中流の上：Regent's Park, NW Portman Square, W

中流の中：Kensington, W St. John's Wood, NW

中流の中・下：Chelsea, SW Highgate, NW

Hampstead, NW Pattersea, SW

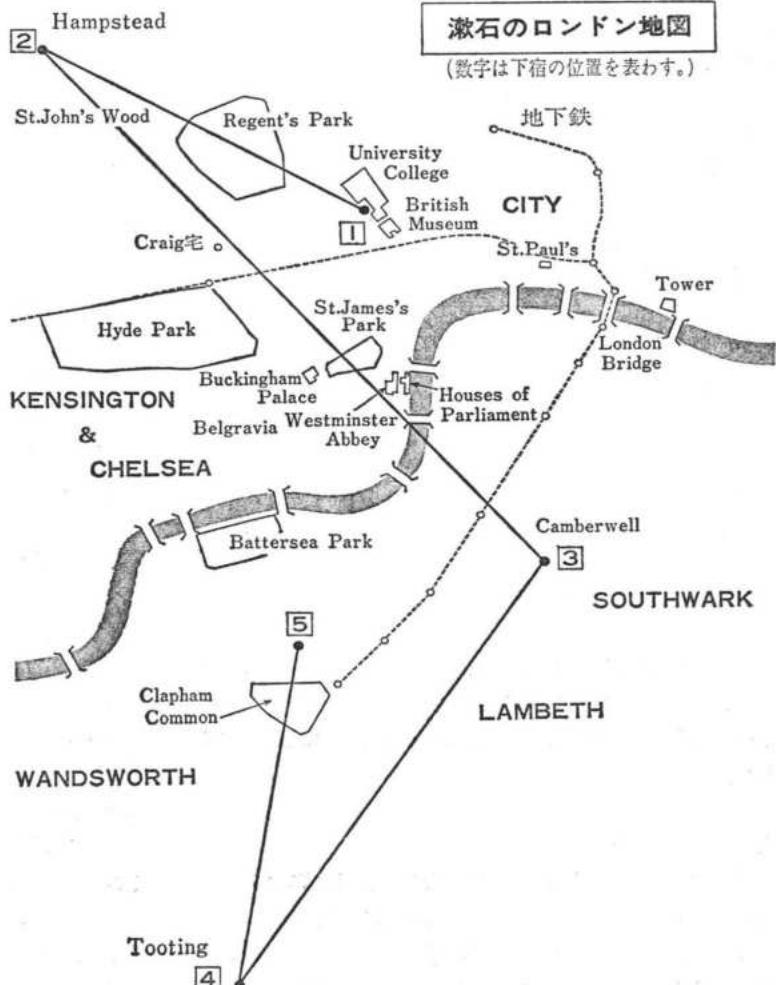
労働者階級：Kennington, SE Tooting, SW

Camberwell, SE the East End, E

これを見れば、漱石が下宿を(West) HampsteadからCamberwellへと移したのは、山の手の中流の中ないし下の住宅地から下町の労働者階級の居住区域へと変ったことを意味するのは一目瞭然である。この事実は、実は、漱石自身にもよくわかっていたようである。というのは、翌年8月3日、池田菊苗とカーライル博物館を訪れ

漱石のロンドン地図

(数字は下宿の位置を表わす。)



た折、「K. Ikeda, South Kensington」とサインした次に、「K. Natsume, //」と署名している。当時はすでにClapham Common, SWに移っていたが、下層階級の住宅地であることには変りはない。そして池田のいた(South) Kensingtonが中流階級の住宅地であることは左の表でごらんの通りである。

ならば、漱石はなぜそんなところへわざわざ引っ越したのであろうか。答えは簡単明瞭、金がなかったからである。漱石はロンドン到着以来、くり返しきり返し留学費の不足を訴えている。漱石に与えられた学資は、すでに述べたように年額1,800円、英貨に換算して180ポンド、月額15ポンドである。年400～500ポンドかかるといわれて、ケンブリッジでの大学生活を断念したのも金のためであった。1日6円(月18ポンド)の下宿屋を急いで出たのも金のためであった。次の下宿は1週2ポンドというから、ここは月にして8ポンドである。

「書物は欲しいのが沢山あるけれど、ちょっと目ぼしい

のは40円以上だから、手のつけようがない。なるべく衣食を節儉して書物を買おうと思う」(12月27日付藤代楨輔宛)ということになると、「Biscuitヲ買イ昼食ノ代リトナサント試ム。1カン80銭ナリ」(11月20日の日記)という哀れなことになる。

そこで解決策はただひとつ。体面を捨てて場末の安い下宿に移ること。それを決心させたのは、University Collegeへ聴講に行くのをやめたせいもあったろう。引っ越し当日の様子を「日本にて3里ばかりの道のりこれあり、馬車を傭いて書物をのせて、宿替え随分厄介なれど、日本の書生のごとくランプを手に持つような不体裁はこれなく候」(12月26日付鏡あて)とか、「道のりは4,5里もあるだろう。随分書物などは不便なものだよ。東京の書生のようにランプを持ってこそ行かないが、実にいやなもんだよ」(2月9日付)と報じている。新旧の下宿の間の距離がだいぶくいちがっているが、実際には、直線距離で10キロ、2里半ほどである。それにしても、どうしてこうも「書生のランプ」にこだわったのであろうか。次の二節がその答えのように思われる。

あらゆる節儉をしてかようなわびしい住居をしているのはね、一つは自分が日本に居った時の自分ではない、単に学生であるという感じが強いのと、二つめには折角西洋へ来たものだから、成る事なら1冊でも余計専門上の書物を買って帰りたい慾があるからさ。

そこで、家を持って下婢どもを召し使ったことは忘れて、ただ10年前、大学の寄宿舎で雪駄のカカトのようなビステキを食った昔を考えては、それよりは少しは結構?まず結構だと思っているのさ。人はカムバーウエルのような貧乏町にくすぼってるといって笑うかもしれないが、そんなことに頓着する必要はない。

(「倫敦消息 2」)

前記董沢氏によれば、「1900年ごろのイギリスの労働者の週給は1ポンドから2ポンドぐらい、普通のサラリーマンは3ポンドから5ポンドどまりだった」というから、月15ポンド、週4ポンド弱という漱石の留学費は中流の下(lower middle)程度ということになるが、そこから本代を出すとなると、さらに生活水準を下げるほかはなくなる。

実際、今度の下宿の下宿代は安かった。週25シリング、月に5ポンドというから前の下宿の8ポンドと比べてはるかに安い。これなら留学費の3分の1ですむ。これでやっとひと安心した漱石は、ここへ移ってから4か月ばかりの間に相当な額の本を買い込んでいる。董沢氏は

「日記に購入金額を記しているものだけでも188円、書名だけで金額を書き入れてないものまで含めれば、恐らく250円、英貨にして25ポンド近くの本を買ったと推定される。4か月の留学費60ポンドのうち、下宿代に4か月分20ポンドを支払い、昼食代(「外に出た時ちょっと昼食を一皿ぐらい食えばすぐ6,70銭はかかり候」)やクレイグへの謝礼(月1ポンド)などを出した上に、なお25ポンドほどを書物に捻出したのである」と書いている。

しかし一方では漱石はこうも思う。「同じ英國へ来たくらいなら、今少し学問のある、話せる人の家において、汚ない狭いは苦にならないから、どうか朝夕交際がしてみたい。」

また、正岡子規にあてて、こんな愚痴もこぼしている。

自分の着ている着物が次第に変色してくるにつれて自分が段々下落するような情けない心持のする時は、何のためにこんな切り詰めた生活をするんだろうと思うこともある。エー構わない。本も何も買えなくてもよいから、為替はみんな下宿料にぶち込んで、人間らしい暮らしをしようという気になる。(「倫敦消息 2」)

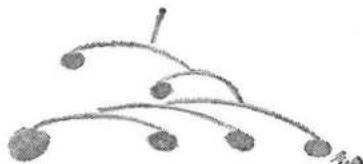
かくして、第五高等学校教授・高等官5等の文部省留学生夏目金之助は、「橋向こうの場末の貧乏町」へ落ちてきた。これは、ケンブリッジでの大学生活を断念したのにつぐ、漱石の留学を規定した第二の重要な出来事であったといわねばならない。文部省に出した報告書の中に、金之助は「学資軽少にして修学に便ならず」と書いた。

(付記) 今回は次のものを参考にさせていただいた。

- 江藤淳「ロンドン・漱石・ターナー」(『朝日新聞』昭和42年10月6日付夕刊)
- 角野喜六「漱石とロンドンの下宿——Brett家の家族構成」(『図書』岩波書店、昭和50年5月号)
- 董沢嘉雄「ロンドンの夏目漱石」(『中央公論』昭和31年3月号)
(玉川大学講師)



Community Language Learning の 妥当性とその限界（その 1）*



石田 雅近

はじめに

この10年間に “unconventional approach” と総称される新しい外国語教授法が現われて、すでに確立されている既成の教授法に多くの問題を投げかけている。

特に最近では、アメリカの主要都市で毎年1回開催されている TESOL (Teachers of English to Speakers of Other Languages) 国際大会でも、その研究発表が活発になされてきた。また、ここ数年、日本でもその新しい教授法のいくつかが話題になり、東京や大阪などで公開授業が催されたり、各地の学会や研究会でも取り上げられ、英語教師の関心が高まっている。

シカゴにある Loyola University の心理学教授 C. A. Curran によって提唱された Counseling-Learning / Community Language Learning, イタリア人 C. Gattegno 博士によって開発された Silent Way, ブルガリアの G. Lozanov 博士が政府の援助を受けて現在積極的に研究を進めている Suggestopedia (Suggestology とも呼ばれる), ホノルルの East-West Center を中心に活躍してきた R. Via の Drama Method などが、その主なものである。これらはすべて、それまでの言語学の研究成果とは無関係に生まれてきたと言ってよく、1960年代に外国語教育界を風靡した Audio-Lingual Method が、それまでのアメリカ構造言語学から派生したのとは成り立ちが異なる。その意味では、これらの教授法はいざれも、今までとは違う視点から外国語教育を捉えているので、既成の教授法に固執している教師に多くの反省材料を与えていよいと言えよう。とりわけ、ともすれば授業の展開の仕方などの技術論に終始しがちな現場の教師にとっては、「外国語を教えるとは何か」という根本的な問題を含めて学ぶところが多いと思われる。

この小論では、前後2回に分けて、外国語学習および教授の問題をカウンセリングという心理学的考察の中で

捉えた Curran の Community Language Learning に焦点を当て、その成り立ちを Audio-Lingual Method と比較し、教材の内容、教師の役割り、カリキュラムの編成、学習者の discipline の問題等の面から、この新しい教授法の妥当性について述べ、さらにアメリカではかなりの評価を得てきたこの教授法が、はたして日本における英語教育の実際の場では、どの程度有効であり得るかについて、日本人英語学習者の心理的傾向から見て論じてみたい。

I. Community Language Learning の 出現した背景

Community Language Learning (CLL) は、Curran が psychotherapy の原理を外国語教授に応用して効果を上げた Counseling-Learning (C-L) が母体となっている。これが彼の論文¹⁾で初めて紹介された当時は、全米就学児の約20%が slow-learner であり、正規のカリキュラムについて行けないというショッキングな報告²⁾が相次いで発表され、いわゆる「落ちこぼれ」の問題が表立って取り上げられるようになってきた。

教師と学生が教える者と教えられる者という対立、対峙の関係に立って、教師が一方的に教え込むという従来の教育のあり方では、増え続ける drop-out や slow-learner をくい止めることはできないであろうという認識が、アメリカの教育界に広まりつつある時期でもあった。

CLL の母体となっている C-L は、slow-learner でも、たとえそれが知能の低い者であろうと、クラスの中で果たす役割りが必ず存在し、それを果たさせることによって学習が成立するものだという理念に立脚している。さらに、CLL で明確に示されているように外国語学習では、学習者が他教科では経験し得ない複雑な心理的負担を大なり小なり感ずるものであって、その負担は放置しておくと、結局、学習効果をすべて覆してしまうほど大きく

なる可能性があるものだという外国語学習の特殊性に目が向けられている。

C-L や CLL の研究が、Loyola University を中心に盛んに行なわれるようになった60年代後半には、「どんな教育であろうと学習者の人間としての健全な成長を促すべきものであり、決してそれを妨げるものであってはならない」³⁾ と主張する C. Rogers (1967) や A. Maslow (1969) などの humanistic psychologist が現われてきたのも興味深い。G. Kneller (1971) の “Persons are viewed as essentially benevolent.”⁴⁾ ということばに象徴されているように、C-L や CLL で代表される humanistic education の根底には、人間に対してわれわれはもっと信頼を置いていいのではないかという性善説が流れている。60年代に、学生紛争を頂点として数多く起きた人間不信に根ざす問題に端を発した從来の教育のあり方に対する反省と危機感が、humanistic education の動き全体に感じられる。

後で詳しく触れることになるが、50年代後半に確立されて、60年代に多くの語学教師に採用されるようになった Audio-Lingual Method の一つの特徴である「教師が classroom activity の initiative を取り学生の反応を control する」ことの是非を根本的に見直す材料として、CLL がアメリカの外国語教育に少なからず影響を与えるに至ったことも見逃せない点であろう。

II. CLL の特徴

1. 授業の進め方

この授業では、通常、6人から12人ぐらいまでの学習者が1つのグループを作り、円を描いて互に向き合って椅子に座る。その中心にはテープレコーダーが置かれる。教師は学習者の母国語と学習言語との両方に精通した bilingual として、カウンセラーの役割りを果たすべくグループの外側に立つ。

実際の授業は、特に入門期の段階では、学習者がお互いに母国語で自由に話し合うところから始まる。ただし、学習者は言うべき内容と話しかける相手が次ったら、手を上げて教師に自分の言いたい内容をそのまま母国語で告げる。教師はそれと同等の学習言語の表現を「学習者の心を和ませるように暖かく、どんな質問でも受け入れるようなおおらかさを持ち、なおかつ学習者に同情を寄せるような方法で」(in a warm, accepting, sympathetic way), 学習者の耳許で言う。必要があれば何度も同じ文を繰返し、求めに応じて文の途中で区切り学習者が反復しやすいようにする。話しかけられた他の学習者は、同じように教師の助けを借りて話しに応ずる。

このようにして、15分ないし20分程度のやり取りがグループの中で自由に行なわれる。すべての発話はテープレコーダーに録音される。

次に、録音テープを playback して教師が学習者の協力を得ながら、その内容を黒板に書上げていく。板書した文について、発音、文法、意味の面からだけでなく、発話のレベル、スタイル、慣用法などのあらゆる角度から、あくまで学習者の質問を中心に、教師が説明を加える。

最後に、「授業で学習したことを探る時間」(reflection period) があり、学習者同士が実際に外国語を用いて自己を表現し、意志疎通の場を共に持った経験について話し合う。その時感じた感情の動き、変化、たとえば、恐怖感、自意識、恥ずかしさ、もどかしさ、苦しさ、あるいは満足感、楽しさなどの具体的な心の揺れについて意見を交換し合う。普通、これは教師を交えず母国語で行なわれる。

これでひととおり授業が終るのだが、教師は板書したものと同じものをプリントにして、次の授業の始めに学習者に手渡すことになっている。

2. Audio-Lingual Method との相違点

CLL では、教材や授業の進度は教師が決めるのではなく、学習者が自分達の自由意志で行なう “free conversation” の内容や参加の程度によって決まってくる。教師は從来のように、カリキュラムや教案に沿って教える内容の質や量を裁量するのとは異なり、学習者がお互に interact するのに、なるべく抵抗の少ないコミュニケーションの場を提供するのが、本来の役割りである。そして、学習者が全幅の信頼を置いて接することのできるカウンセラーとして待機する。質問されない限り教師の方から “教え込む” ことをしない。したがって、CLL は学習者中心の典型的授業であると言える。

また、CLL では、流暢さを増したり、記憶を強化するための語句や文の口頭反復練習は行なわれない。この点で、反復練習とドリルに相当の時間を割く Audio-Lingual Method (A-LM) と大きな違いがある。CLL に反復練習らしきものがあるとすれば、それは学習者が “free conversation” の際に、強制によらず自らの自由意志によって不明な語句や文を、教師に確かめながら繰返えす時ぐらいであろう。これも教師の方から反復することを求めるのではなく、学習者が自分の必要に応じて決めるものであり、A-LM の練習やドリルとは本質的に異なるものである。

学習内容は、学習者自身が母国語を媒介にして、教師

から必要な学習言語の表現を得ながら作り上げていくわけで、当然のことながら、実際のコミュニケーションの場に即応した表現が中心となり、自分達の知的レベル、興味、関心に合った内容を選ぶことができ、それを教材にして学んでいくことになる。

A-LMでは、教師が学習者の学びたいことを推測して、幾分なりとも教材に反映させることができたら上出来であろう。多くの場合、文の構造上、理解しやすいものから、徐々にむずかしいものへと教材を配列するために、文法項目に教材が書かれる傾向がある。文法項目の難易に注意を向けるあまり、人為的な場面を中心に教材が展開し、不自然な「練習のための練習」が現われてくることがある。学習者が自分達の手で学ぶ内容を決めたり、作り上げたりすることは、まずA-LMでは考えられない。後で詳述するが、教材内容による「動機づけ」という点では、A-LMはCLLには及ばないと言えよう。

アメリカにおいて、最近、特に affective domain の研究が数多くなされてきていることからも分かるように、外国語学習は独特な心理的葛藤を伴うものだという認識が高まっている。CLLは外国語を実際のコミュニケーションの場で用いる際に付きものの精神的負担の問題を、授業の中で明確に位置づけている。

CLLには、学習者の間で学習上のあらゆる困難点を母国語で話し合わせ、解決に向かわせようとする“reflection period”が一つの授業の中に、必ず1回は設けてある。これを通じて、学習者がお互に同じ目的を持った者としての共感を深め、外国語を使うという精神的抑圧を軽減しながら学習を進めていくという点で注目される。学習者が個人単位で成績のよしあしを競争する、いわゆる勝ち負けの学習に価値を置かず、グループあるいはクラス全体の協調の中で学ばせていくというところに、最大の意義を認めている。教師が学習者の敵になったり、より良い成績を得ようとして、学習者仲間で敵対するという対立関係を崩し、クラス・コミュニティのメンバーとして、一人一人何らかの果たすべき役割があることに気づかせた上で、クラスでの存在価値を十分に發揮させようとしていく。

A-LMが学習言語そのものの効果的な教え方に大きな重点を置いたのに反し、CLLは、多大な心理的変容を伴う外国語学習と、限定されてはいるが学校というコミュニティの中で、実際のコミュニケーションを通じて、学習者がしかるべき社会的、精神的成长を遂げなくてはならないとする全人格教育とを、融合しようとしたものである。このことは、いかなる大義名分があろうと、外国語教育によって学習者の健全な成長を損ねてはならぬ

いと主張する、humanistic educationの教育理念に合致している。CLLを含むhumanistic educationの動きは、あまりにもde-humanizeされた今日の外国语教育への、大きな警鐘とも受け取れるのではなかろうか。

III. CLLから見た A-LMの一再考

habit formation theoryに理論的根拠を置いたA-LMは、チョムスキーの出現以来、さまざまに批判され、それなりの修正がなされてきた。その多くがcognitiveな面からのものであったが、ここでは外国语学習の affectiveなつまづきの解決に中心を置くCLLから見たA-LMの問題点を挙げてみたい。

habit formation theoryに厳密に従った初期のA-LMでは、4技能のうち listening から始まり speaking, reading,そして最後に writing を持ってくるという手順が守られたが、これはアメリカ構造言語学の、“音”を出発点とし phonetics を最下部構造とする理論のあり方を、外国语教授の手順にあてはめたもので、70年代に入り、これに対する多くの反論が出された。

たとえば、listening, speaking, reading, writing の順序に従わなくても、学習者の必要に応じた技能を中心授業を展開して、十分に学習効果を上げられるというものである。学習者が reading の力をつける必要に迫られていたら、それを最も効果的に身につけられる方法を教師が採っても不都合はなかろうという主張である。readingを効果的に学習するには、oral-aural から入るべきだとするA-LMの古くからの考えがあるが、listening から入りその力が reading、さらに writing にまで波及するまでには、膨大な時間を要するのが実情である。特に、puberty を過ぎた者が外国语学習を始める場合にはそのことがあてはまる。

listening, speaking, reading, writing の順序を追いながら、文の構造上、やさしいものからむずかしいものへと段階を経た教材を進んで行くのでは、学習者の知的レベルに合った内容の教材にまで到達するには、長時間にわたる忍耐力を要する学習が必要である。学習者は学ぶ内容に興味を繋ぐことができないまま何年間か授業を受け、将来いつか自己を表現できる文を生み出せるだろうという、保証のない望みに期待をかけて勉強を続けることになる。これでは学習意欲をそがれることおびただしい。

CLLでは、語句や文構造の難易、新出語の多少など一切こだわらず、学習者の興味、関心の赴くままに、彼らのコミュニケーションに必要な表現を取り上げて教材とする。前にも述べたように、学習意欲を高めてそれを

持続させるという点では、CLLは大きな長所があろうが、逆にそれがカリキュラムや教案を作ることができないという欠点にもつながっている。A-LMが多く批判を受けながらも、依然として多数の教師に用いられている理由の一つは、教師があらかじめ学習計画を立てることができ、教材の準備が十分にできるからであろう。

初期のA-LMでは、教室での母国語の使用を禁止し、既習語句や文を使い、さらに視覚補助教材を併用しながら新出事項を理解させていくという方法が取られていた。しかし、母国語を禁止するところから来るマイナス面が少なからず指摘され、その制限を緩める方向に変ってきた。母国語の使用を極力抑えることで、学習言語により多く触れさせ、慣らせるというにはそれなりのmeritがある。しかし、学習者は説明されていることが分からず、あるレベルに達し教師の言うことが部分的にしきる、学習言語だけで理解できるようになるまで、暗中摸索を強いられることになるので、学習者自身に強い意欲と根気がない限り、かなり無理の多い授業となる。必要に応じて、母国語で指示や説明を与えることで、めりはりのあるリズムに乗った授業をすることができ、その結果、より多くの時間をmeaningful practiceに振向けることができよう。学習段階によっては、母国語を適宜使用するmeritの方がdemeritよりもはるかに大きくなるものである。

CLLでは、母国語を使うことで授業が始まり、その使用に関し何らの制限も加えていない。むしろ、学習者に母国語を使わせることにより、彼らの思考を活発にし、自由闊達な精神の働きを促すことを重要視している。Direct Methodや、厳密に行なわれるA-LMに、よく見受けられることだが、母国語に頼ることをまったく禁じているために、学習者が極度に萎縮し思考力まで鈍らせてしまうことがある。この問題も、その授業の型に慣れるということで自然に解決する部分もあるが、しかしながら学習者によっては、それが学習言語に対する嫌悪、さらに恐怖にまで発展し、学習を続ける際の致命傷にもなりかねないことに注意しなければならない。

A-LMでは、学習者のおかす間違いは、たとえどんなに小さいものでも、望まれる言語習慣形成に悪影響を及ぼすものとして嫌われ、それがなるべく生じないような形でドリルが構成される。しかし、最近、psycholinguisticsにおける研究が進むにつれて、外国語学習に必然的に附隨する間違いの本質を、従来の“contrastive analysis”とは別の立場から見極めようとする動きが、応用言語学者のみならず、現場の教師からも出てきている。たとえば、学習者に自己を表現させ、それを他人に

伝達させるのを目的とする授業では、間違いが出てくる可能性の少ないドリルに重点を置くよりも、学習者の発話がcomprehensibleでありcommunicableである限り、伝達内容そのものや表現意欲を大切にしていくとするものである。つまり、不完全ながらも、学習者が教師から自立して意志伝達ができるような能力の開発に目を向けるようになってきている。しかし、だからと言って教師は学習者の間違いを直す必要がないと言うのではなく、その直す方法が重要なのである。しかし、残念なことにその方面での研究が十分になされてきたとは言えない。

間違いが起こるのをなるべく抑えようとするA-LMのような授業には、学習者自身が限られた材料で不満足ながら、自己を表現してみようとする意欲や学習者に内在する創造力を窒息させてしまう副作用が伴うことは否定できない。

学習過程で間違いを否定的に見るA-LMとは対照的に、CLLでは、学習者の試行錯誤が一見放縱と思えるほどに許されている。学習者が分からぬ箇所や間違った部分を、彼らの求めに応じて教師は何度でも繰返してやる。それも、学習者やおかした間違いに対し何の非難めいた感情を入れずに、あくまでsympatheticな態度で行なう。この間違いに対する教師の対処の仕方でも、CLLとA-LMとが大きな違いを見せてている。

A-LMでは、教師はよほど意識的に注意しても、学習者の間違いを直す者としての高圧的でauthoritativeなイメージからなかなか逃れられない。これは、程度の差こそあれ、A-LMを用いて進める授業にいつもつきまと問題であろう。(次号へつづく) (日本大学講師)

注

* 本稿は1979年10月20日にELEC月例研究会で行なった講演を敷衍したものである。

1) Cf. Charles A. Curran, "Counseling Skills Adapted to the Learning of Foreign Languages," *The Menninger Bulletin*, March 1961 and "Counseling, Psychotherapy, and the Unified Person," *The Journal of Religion & Health* 2(2), Jan. 1963.

2) Cf. P. Witty, "Needs of Slow Learning Pupils," *Education* 2, 1961, M.W. Tate, *Statistics in Education and Psychology*, New York:McMillan, and National Education Association, Research Division, "Education of the Slow Learner," *Research Memo No. 18*, 2, Washington, D.C., 1964.

3) Cf. Beverly Galvean, "Humanistic Education:A Mosaic Just Begun," in A. Jarvis(ed.), *An Integrative Approach to Foreign Language Teaching: Choosing Among the Options*, Illinois:National Textbook Co., 1976, p. 203.

4) Cf. George Kneller, *Introduction to the Philosophy of Education*, New York:Wiley, 1971, p. 21.

アメリカン・フォークロア

アメリカ開拓地のユーモア

倉田好子

アメリカにおける諧謔または、ユーモアの文学や、喜劇等は主に初期の辺境にあった開拓地から起つた。口承書承をふくめて、開拓者並びに辺境地居住者達の途方もない説話、小話、民話の類は、当時のグロテスクなまでのアメリカ山間地の状況を描いている。アメリカの伝説的過去への近道は、これら意気揚々とした、土くさいが大胆な色彩の濃い文学である。そしてこの種の文学の粗雑さの下には、微妙な機知に富んだものが潜んでいる。

アメリカ南部や南西部のいわゆるユーモアというものは、その各地域によって特徴づけられるが、アメリカの他のどの種類のユーモアよりも、これら南西部のものが、抜きんでているのは、まさしく開拓地での生活がにじみ出でているローカル・カラーに依るものである。それ故に、今日でもマーク・トウェインの作品は当時の他のどのユーモア作家のものよりも広く読まれているのである。

これらフロンティア（辺境地や辺境の開拓地）のユーモアの特徴には色々あるが、一番明瞭にあらわれているのは、何といっても、フロンティア・ボースト(frontier boast)と言われる自慢話や誇張、法螺話の類で、それに次いで、山間地や奥地での毒舌、空想話、ぴりっと味のある方言、喧嘩好きな輩に、野趣に富んだ土くささ等である。

このフロンティア・ボーストは南部のユーモアの語り手達にとっては、多分一番なじみ深いものだったのだろう。そういう自慢話の一つは、足を蹴散らし、そっちこっちを飛びまわりながら、「おれは、熊を殺し、バンサ一も一打でやっつけた。水の上だって歩けるし、雷よりも響く音を出す。おれが熱くなった時には、ミシシッピ一川だって隠れちまうんだぞ！」(The Big Bear of Arkansas, W. T. Porter, ed., (Phila., Carey & Hart,

1845), "Chunkey's Fight with the Panthers," p. 139.) 等と叫んでいる元気一杯の荒野の闘鶏を目の当たりに見せてくれる。他にもまた次のようなことがある。

「おれは東部の雷と稻妻の国から来た正真正銘の咆哮者。朝食はヤンキー（東部人）のシチューと豚肉のステーキ。消化のために塩と釣を飲む。夕食は、山猫をつめたがちょうのロースト。おれが吸うのは風だけで、おれがくしゃみをすると、彼の有名なデービー・クロケット大佐の着ている上着は東部から、南部のテネシー州あたりまで吹っ飛ぶ。おれがにやりとすると、蒸気船の機械も故障する。おれの鼻息は、ジャック・ダウニング小佐をワシントン州から、おれのおじのジョナサンの納屋小屋まで吹っ飛ばす。おれは、まさに俗に言う鼻あらしの名人。睡眠、飲み食い、くしゃみに鼻息、鼻あらし、仕事に、走りに、うそつきに関しては、おれは、北のメイン州から南のルイジアナまで人と動物の形をしている何ものにも勝るとも劣らじ！」
—Crockett Almanac for 1836 (N. Y., Elton), "Crockett Outdone."

このように法螺話はかぎりなく続いて行く。また、森のしぶとい猟人は、時によって半馬、半鶴の大すっぽんとなり、森の花形、竜巻ともなる。彼は蒸気船をかついで、3条の稻妻中に立っても微動だにせず、また彼の撃つ弾は月をも突きさすと言う。

開拓地においては、多弁と誇張が独り言を支配し、無口と寡黙が仲間との会話の特徴であった。彼らは故意にまわりの事実を避けて、とりとめもない話をかわした。そういう奥地での他愛のない会話は、ヤンキー一人や東西部人のユーモアの中にしばしば見られる。

「やあ、おはよう。さーてと、お前様の名前が、ちょっと思い出せんのだがな…」と車から今しがた降りた山男に向かってその土地の地主は声をかけて来た。
「かまわんよ」と山男が言ったら、
「確かに、どこかで見かけたことがあるんだがな。」「そうかも知れないね。このあたりへは、ちょいちょい顔を出すから。」

「確かにそうだよ。しかしお前様の名前を忘れるなんて変だよなー。」

「全くだ。それに、元々全然知らなかった事を忘れちまうのも、これまた、もっと変だよなー。」と山男は言い返した。

—The Life of David Crockett (N. Y., A. L. Burt, nd.), p. 288.

このような会話は、好奇心の強い方が、抜け目のない相手方の山男に、これ以上質問をしても無駄だと悟るま

で延々と続く。

しかし、そのやりとりが激して来ると、今まで無口だった山男は、驚くべき流暢さで、毒舌をたたき出す。まして怒ったとなると、今までの彼の低姿勢や態度からは到底考えられもしないような想像たくましい悪口雑言が飛び出る。

「お前って奴は、火あぶりになった化け物のさぎ師だ！この野蛮で、うそつきの厄病神のほっつきまわるさそりめが！」

「あん畜生。冥土でのっぱり腹の歯くそだらけの、無駄酒飲みの鼻つまみのおいぼれモルモット奴が！」

これら想像力豊かな雑言には、悪意の刺激によって鼓舞されているものだけではなく、開拓地でのフォークロア（民間伝承）や森林地の生物等が貢献したものがかなりある。特に自然物の色は、彼らのスピーチに特別な色づけをした。生き生きとした直喩や、絵画的な語句、考えもしないような、ひねった表現等が、辺境の開拓地から豊富に芽をふいて行った。例えば、黒いということを表わすのに、「真夜中のからすの羽のように黒い」とか、「黒ん坊が炭をいじっているかのように黒い」「黒猫の毛の中にいるめくらの、のみのように黒い」等と言う。その他のもので、デービー・クロケット大佐の熊の肉のステーキの焼き方には、「あられを使って塩をし、鹿狩弾で胡椒をし、稻妻の光で焼く」等というものもある。外にも、「時たま、居住者の家がまるで吐き出されたかみタバコが壁にひついているように、丘の斜面にくついているのが見える。」

これら、悪口雑言にも勝るのは、醜者についての描写であろう。醜さと、それを描写し得る才能を誇りとするのは、開拓地での昔からの伝統のようなものとなっていた。その描写の対象が醜くければ、醜い程、語り手は、上手とされ、それら、醜惡な怪物を語るにあたっては、どのような微々たる怪奇さをも、見逃しはしなかった。例えば、

「彼の目は、一対の塩漬のそら豆のようであり、鼻は、まるで自然がその真中に発掘作業をしたようなもので、そのくちびるは、熟して真中から、ざっくり割れたスモモのようだった。あごには、バター用さじでえぐったようなくぼみがあり、その髪は、半分なめされた狐の皮のようであり、総じて、その顔は、ついちょっと前、突っついて穴だらけになったひき白のようだった。」

—*Pickings from the Picayune, "Jack Burns the Buster,"* p. 112.

「この食事法（赤粘土と黒いちご）のために、ランズ

イの顔色は、死人でさえも軽べつする程のものになってしまった。」

「彼のちょっとしたウインクは、侮辱となり、愛の告白は、完全なる極悪となるぐらいその醜さは、悪名の高いものであった。」

古典的な醜男は、何と言っても、おなじみのビリー・ウォレスで、彼の顔には、はえさえも止まらなかったと言う。彼が10歳の時、小川の流れにうつった自分の顔のおそろしさに、一足毎に母親の名を呼びながら命からがらの態で逃げて行ったと言う。また、1インチの厚さの鏡が、彼がのぞいた途端にこなごなにこわれたと言うし、彼の妻は、彼にキッスをする前に牛と何度もその練習をしたと言うことだった。

「大まかに言って、彼の顔は、今しも水ぶくれが直ったばかりという風で、その大目玉は、まぶたからはみ出し、今にも顔からこぼれ落ちそうだった。そのルビーのように赤い口は、でこぼこの蹄をつけられたラバに蹴飛ばされたみたいだった。もっとも、彼の口は、元々顔に、のみで穴をあけられたようなものだったのだが…とにかくその全容は全く、ひどく、言うに言われぬ醜さであった。」

しかしこの醜男の最高の勝利は、なんと言っても稻妻との対決にあった。

「…途中で、ハリケーンに出あつたんだが、その雷と稻妻が、ものすごいの何のって、風は、まるで悪魔のように吹きつけて来たので、おれは、仕方なく、大かしの木の下に入ったんだ。そしたら、そこへ稻妻が光って、おれが寄っかかっていた木にどかーんと雷が落ちて来た。それでおれの、丁度、ここん所へあたったんだよ。そしたらな…。」

「ほんとうかい。それでその稻妻がお前の顔を傷つけたって言うのかい？」

「傷つけたって？いやあ、その稻妻は、おれが言ったように、丁度、ここん所へあたったんだがね、一そしたら、その稻妻奴、おれの顔をチラッと見ただけだったんだよ！」

—*The Widow Rugby's Husband, "A Night at the Ugly Man's,"* pp. 50-1.

このような土くさいユーモアは、まぎれもなく開拓者やその後続の輩の粗っぽい、豪放な笑いをさそったにちがいない。しかし、一世紀前に、醜男や、死体等が提供したこれら、大げさな冗談や笑話は、今では、ユーモアとしては、流行おくれになってしまった。その無感覚なまでの粗雑さの下には、開拓生活の活気と精力が流れしており、その笑いもまた、その生活同様、上品なものでも、

洗練されたものでもなかったのである。

ある旅行家が小さい町に来て、そこで雑貨屋の前に足を投げ出して死んでいる馬とその乗り手を、無表情に眺めているその町の人々を見ておそろしくなり、おろおろとその場の様子を聞きはじめた。

「この男には、一体、かみさんも子供もいないのかい。」とその旅人が聞くと、

「わたしの知っているところでは、子供はいないね」とその死んだ男から少し離れた所でゆうゆうとタバコを吸っていた女が答えた。

「それでは、かみさんは？ 全く、御亭主がこんな不運なレースをして、こんな不幸な最後をとげたと知ったら、どんな気がするだろう。」

「そう、本当に運の無いレースだったよ。それにウイスキーまで失くしちゃって、お気の毒に。」とその女はため息まじりに言った。

「それで、お前さんは、もしや、そのおかみさんとやらを御存知かね。そのおかみさんは、御亭主のこの突然の、時ならぬ死について知らされているのかね。」とまた旅人が聞いた。

「そのかみさんを知ってるかって？ それにこの事を知らされているかって？ お前様は、このあたりの事は、あまり御存知無いようだね。わたしがその不幸なやもめなんだよ。」とその女は答えた。

「え？ お前さんがかい。お前さんが、この時ならぬ死に見まわれた氣の毒な御亭主のおかみさんですかい。」と仰天してその旅人は叫んだ。

「そうだよ。それがどうかしたかい。」と女は言い、また、

「時ならぬ死だって、死んだのは、それ、その丸太ん棒のとんがった先でのどを切って死んだんだよ。時ならぬって言うけど、どうせ何時死んだって、大して重要なお人じゃなかったんだから、今死んで良かったのさ。」と言いながら、その女は、またタバコを吸い出した。そこでその旅人もまた旅を続け出した。

—Sol Smith, *Theatrical Management*, "A Consolate Widow" (N. Y., Harper & Bros., 1868), pp. 102-3.

喧嘩や獵、それに女への言寄りが開拓地での主な気晴しであり、それぞれ骨の折れるスポーツと見なされて行われていた。ヴィクトリア時代のタブーに惑わわされることなく、奥地の語り手達は、醜男や殺ばつたる喧嘩を微に入り細に入り穿ったと同じ手法で、山間の麦畠の若い美人を描いている。次に述べるのは、自分のベッドに眠れる美少女を発見した語り手が、聞き手の好奇心をそそる話である。

「それがな、本当に、見れば、見る程、いや、今まで見たこともないような好い娘だったんだよ。小さいナイト・キャップから、巻毛が1つ、その雪より白い首から、石膏のような肩にかかっていたんだがね。」

「ほう」と言いながら、その興奮しかけたキャプテンは、ぐいっと椅子を鳴らした。「それに、あんな形の良い胸も見たことがなかったな。それでね、おれは、そのかけぶとんを取って、そーっと下におろしたんだよー。」

「それでー。」とそのキャプテンは、思わず興奮を抑え切れずに言った。

「ずーっと彼女のウエストのあたりまで下ろしたんだ。」

「へえー」と言って、そのキャプテンは、手にしていた新聞を取り落とし、足を組み直した。

「それでな、彼女は、その、前ボタンがけのねまきを着ていたんだが、そのボタンを上から2つそーっとはずしたんだがね。」

「ひえー。」とキャプテンは、のぼりつめた興奮にさになまれて言った。

「そしたらね、それは、まあ、何とも言葉では、言えない眺めだったんだがね。その、丁度その時ー。」

「それで！」とキャプテンは、椅子を、左右にぎしぎしきさせ、タバコをストーブにじゅーっと音を立てておしつけた。

「おれは、その時、ふっと、こんな風に、彼女につけ込むのはよくないと思って、すかさずまたふとんをかけ、大急ぎで上着とブーツをひっつかんで出て行き、外の部屋でねたんだよ。」

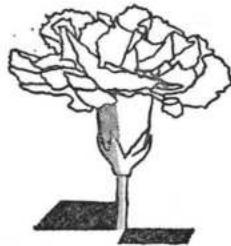
「うそだ！」と興奮したキャプテンは椅子から飛び上り、その椅子をふんだり蹴ったりしながら叫んだ。

「それは、真赤なうそだ！」

—W. T. Porter, ed., *Col. Thorpe's Scenes in Arkansas*, "Somebody in My Bed" (Phila., T. B. Peterson & Bros., Copyright 1858), pp. 170-1.

これら、豪放磊落な開拓地のスケッチは、百年前に、当時の新聞や、曆にあらわれた時と同じように、今でも生彩を失わずに生きている。それは、最も頭著で、持続している、アメリカン・ユーモアの流れであり、また、アメリカ人の風刺や誇張への傾倒、上品ぶった高尚さや、織細さへの揶揄を好む傾向、自然色を豊かに織り込んだ映像、開拓民の皮肉と奇癖、それに何にもまして、活気に満ちた現実性と力強さを我々に物語ってくれるのである。(次号へづづく)

(関西外国语大学助教授)



二重言語・文化教育(2)

—ワラパイ族の例—

山本 昭
山本 吉見子

二重言語・文化教育センターにとって重要な仕事として教育資料の作成も見逃すことはできない。特に筆者が関係しているのはこの分野である。ワラパイ語による資料の作成には勿論適切な文字が必要である。他のインディアン語と同じくワラパイ語は書き言葉を持たない言語であった。従って教育センターのワタホモジー夫人と筆者の第一の仕事は書き言葉を創ることであり、これは約2年の年月を要した。ここでその過程と私達の直面した問題点等を述べてみたいと思う。

今まで文字のなかった社会に文字を導入するには先ず第1にその一連の文字が話し言葉を容易に書き表わせるということ、第2に、その言語を話すコミュニティーに受け入れられることが必要である。第1の条件を満たすのには、言語それ自体の理解が当然前提となる¹⁾。

ワラパイの教育センターはアルファベット式を最適として採用した。これはコミュニティーの人々の希望とワタホモジー夫人の「ワラパイの正字法から英語正字法への移行が易しければ易しい程、生徒、児童の学習を助長する」という考えに基づいた結果であった。センターは特に次の3つの条件を考慮に入れてアルファベットの作成に取りかかった：1) ワラパイ正字法と英語正字法を出来るだけ近いものにすること、2) ワラパイの音組織を忠実に反映すること、そして3) ワラパイ語の個性を表わすこととの3条件がそれであった。

教育センター員は全員ワラパイ語を話す若い人々であったが、コミュニティーの長老を尊重し、手分けをして長老達から基本語の録音に取りかかり、その資料を基にして次のような音素表に到達した。

〈子音々素〉

	両唇	歯	歯茎	口蓋	軟口蓋	後軟口蓋	声門
破裂	有氣 p ^h			t ^h		k ^h	
	無氣 p	t	t		k	q	?
破擦				c			
摩擦	B	θ	s				h
側			l				
鼻	m		n	ñ			
弾			r				
半母	w			y			

〈母音々素〉

	前舌	中舌	後舌
高舌	i		u
中舌	e		o
低舌			a

母音体系は比較的簡単であるため、音素記号をそのまま文字として利用することにした。

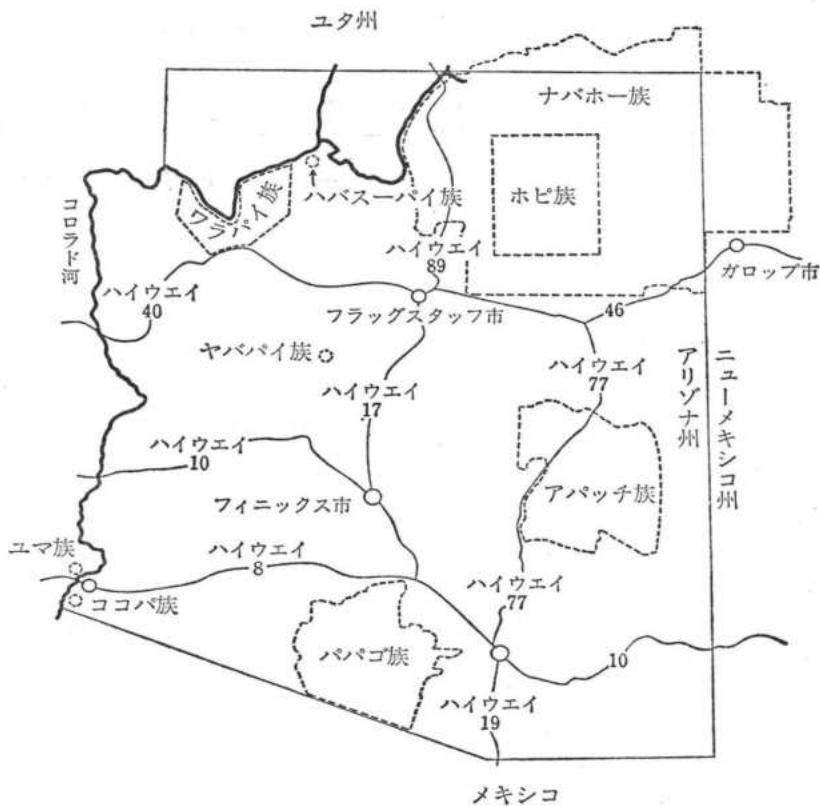
音素表を見て先ず気が付くことは、破裂音がすべて無声音であることである。ワラパイ語の破裂無声音は気音の有無が弁別的な働きをし、対をなすもの(p^h-p, t^h-t, k^h-k)と、気音により対をなさないもの(t, q, ?)とに分かれる。/t, q/を含める無氣音のものは、私達の耳には有声音と無声音の中間音的なものとして聴こえる。時

1) ミシシッピーのチャクトー族には、キリスト教宣教師の手により、1音1文字式のアルファベットが導入され、1948年には『聖書』がチャクトー語に訳されている。また、ノースカロライナのチェロキー族は同族出身者の発明したシラバター（日本語のように母音または子音と母音を1文字であらわす方法）が、1819年から使われている。これは北アメリカインディアンの間では最初の正字法で Sequoia Writingとも呼ばれる。

には完全な有聲音として聽こえることもある。この観察を基にして、破裂音々素から文字を造る作業に取りかかった。有氣音・無氣音の対をなす場合は、夫々有氣破裂音は p, t, k, 無氣破裂音は b, d, g で表わすことに決めた。ここで一つ問題になって来たのは、文字記号 d の使用である。というのは、歯茎彈音 /tʃ/ が（これは日本語のルに酷似した音）、一つには聽者の耳にはほとんど d に聽こえるため、またもう一つには、r を文字記号にした場合は、英語の巻舌音 /r/ との混同が危ぶまれるために、討論の末、ワラバイ弾音 /tʃ/ を文字記号 d で表わすことに決めたのである。所がこのため、文字記号 d が、無氣歯茎破裂音 /t/ と歯茎彈音 /tʃ/ の両方を表わす結果になってしまったのである。ここでセンター員は長老のもとで更に資料を集め、再分析の結果、無氣歯茎破裂音 /t/ が非常に怖であること、またこの /t/ が無氣歯破裂音 /t/ の自由変異形 (Free variant) であることに意見が一致したので、文字記号 d は弾音を、文字記号 t は有氣歯茎破裂音 /tʰ/ を表わすことに落着いた。

この次に問題になったのは、歯音 /t/ である。文字記号 t はすでに有氣歯茎破裂音 /tʰ/ を現わすのに使っている上に、/t/ は英語の /t/ とは調音点が異なる事実から、全然別の文字記号を使うことにした。始めは、t (t にもう一本横棒を入れたもの) を、という意見も出たのであるが、これは次の 2 点から却下された。すなわち、/t/ は無氣音であり、記号 t を使えば有氣音と混同されやすいこと。また、これ以上に重要視されたのはピーチスプリングズのワラバイ族のすぐ近くに、同じ言語の方言を話すハバスーバイ族（青い水の人々の意で人口約 350 名）があり、そこではこの同じ音素 /t/ を現わすのに文字記号 t を使っていたことであった。ワラバイ語の独自性、ひいてはワラバイ族の独自性を主張するため、同じ音素 /t/ であっても、別の記号を文字に使うことが望ましいという意見が圧倒的であった。長時間の協議の結果、d (d に横棒を一本入れたもの) を選ぶことに決定した。これにより、無氣音の性格を保ち、しかもハバスーバイ族の文字記号とも異なるものが可能になったのである。

この他に音素記号と文字記号が異なるものには、/č/



アリゾナ州の主なインディアン保護地 (1973年現在)

(文字記号 ch), /B/ (文字記号 v), /θ/ (文字記号 th), /ñ/ (文字記号 ny) がある。

以上をまとめると、ワラバイ語のアルファベットを構成する文字記号は次のような。

母音

- | | | | | | | |
|----|----|----|----|----|----|----|
| a) | 短音 | i | e | a | o | u |
| b) | 長音 | ii | ee | aa | oo | uu |

子音

p, b, d, t, k, g, q, ɿ, ch, v, th, s, h, m, n, ny, d, l, w, y (この他に、英語からの影響と見られる [f] が怖に現われるため、記号 f もアルファベットの一員として組み込まれている。)

以上を見ると、文字記号が各々タイプライター使用上からも、無理のないものであることが分かるであろう。教材作成上、これも重要な要素である。

以上、ワラバイ教育センターの仕事の一例として、文字の作成ということを述べて来たが、この一見単純に思える作業に約 2 か年を費やした。この過程は、コミュニ

(p. 22へつづく)

英語の諺(その11)

一金 錢 (2) —



戸 田 豊

Lend your money and lose your friend.

物や金の貸借は当事者どうしの間柄をとかく悪くする。物や金だけでなく、便宜をはかってやったり、世話をしたり、面倒を見てやることでも、貸しがあるとか、借りがあるとか、とお互いの間に言いようのない気まずさとわだかまりを生む。とりわけ金の貸借はいつまでも不快な気持を当事者に植えつける。

Neither a borrower nor a lender be. (借り手にも貸し手にもなるな) という諺は、シェイクスピアの *Hamlet I. iii. 75*からの引用句である。

Neither a borrower nor a lender be;
For loan oft loses both itself and friend,
And borrowing dulls the edge of husbandry.

(ええと、金は借りてもいけず、貸してもいけずと。
貸せば、金を失ひ、あはせて友をも失ふ。借りれば、
偽約がばからしうなるといふもの。——福田恆存訳)
金を友人から借りると、返済できない場合には、友情を損うし、また、金を友人に貸すと、返済を求めなければいけない場合には、友情を傷つけることになるかもしれない。友人間に金の貸借は禁物である。同じ主旨を、
When I lent I had a friend; when I asked he was unkind. (金を貸したら借り手と友人にはなったが、返済を求めたら相手はよそよそしくなった) / When I lend I am his friend, when I ask I am unkind. (金を貸すときには借り手の友人になるが、請求するときには冷たくなる) という諺で表わされる。貸すことによって一時的に友人関係が成立するが、いざ返済となると、どちらも友人らしく振舞えなくなる。その上、貸借関係は対等だった友人どうしの間に上下の関係を必然的にもたらす。恐縮して金を貸し、大威張りで金を借りるということはまずない。貸借関係が解消されても当事者にはしこりが残る。『聖書』 *Proverbs 22. 7* に The rich ruleth over the poor, and the borrower is servant to the lender. (富める者は貧しき者を治め、借りる者は貸す人の奴隸

となる) とある。

友人と金銭との関係は諺の好題目である。常日頃、心を許し合っている友人でも、貸借関係が生ずると、清算されるまではよそよそしくなる。悪くすると清算された後でも氣まずさは残る。Lend your money and lose your friend. (金を貸して友を失え) は、友人どうしで金の貸借はするな、ということを暗示している。とかく、金を借りた友人は借錢を払えないとなると、貸してくれた人を避け、極端な場合には、返済しないことの正当化のために貸してくれた人の悪口を陰で言う。友人に金を貸すことは、金も返してもらえず、友人をも失う破目になる。また、If you lend a friend money, you will lose either the money or the friend. (友人に金を貸すと、金か友のどちらかを失う) という表現もある。金を貸したがさいご縁の切れ目にならないようにするには、友人間に金の介在を許さないことがかんじんである。

Even reckoning makes long [lasting] friends. (貸借なしは永続する友をつくる) もまた同じことを説いている。万一借りなければいけない場合でも、Short reckonings [accounts, debts] make long friends. (清算を早目にしておくと交友が長続きする) / Oft counting makes good friends. (貸借の清算をよくやっていると良き友でいられる) を肝に銘じておかなければいけない。Old reckonings make new quarrels. (古い貸借は新しい不和になる) は、古くなつてこみ入った貸借関係が解き難い誤解を生むもとになる、ということを示している。とにかく、友との長い交わりには貸借は禁物である。友好関係を損う最悪のものは金である。

Out of debt, out of danger.

借金は堅く結ばれた友情をも台無しにするほど危険なものである。友人どおしをも分けへだてるほどの魔力を持つ金の貸し借りとは一体どういうものなのだろうか。

'借金する' ということを run [get] into debt というが、outrun [overrun] the constable ともいう。con-

stable とは「警官、法の執行者」を表わし、「法」をも意味する。昔、警官は借金の取り立てをもその職務としたことからこの句が生まれている。したがって、Don't outrun [overrun] the constable. (警官を走り越えるな) ということは、法に触れる限界点を越えてはいけない、ということを表わし、資力や収入以上に金を使ってはいけない、とか、借金はするな、という意味を持つようになつた。借金などしないで収入相応に暮らす (cut one's coat according to one's cloth) ことが望ましい。それでも人はとくに安易に借金に走り苦労を求めるがちである。He that goes a borrowing goes a sorrowing. (借りる者は悲しむ) は、借金は苦労のもとだから避けよ、ということである。借金がいかに恐ろしいことであったかを表わす諺に Out of debt, out of danger. (借金がないと危険はない) がある。これは、Out of debt, out of deadly sin. とも表わされるように、負債があるということは、身を危険にさらすことになる、ということを示している。danger の意味は、本来、「領主や主人の権力、処罰したり危害を加えたりできる権限」であった。したがって、in (one's) danger という句は、債権者の支配権のもとにあって、生殺与奪の権を握られているということを表わしている。借金を背負うことは、身を文字どおり債権者に委ねることであった。借金とは身を貰に入れることも同然であったと言つてもよからう。

今では、借金によって生命に危険が及ぶということはない。それでもやはり負債によって債務者は精神的にも負担を受け、言行や思考までも拘束される。借金の返済ができない場合には、心ならずもうそもそも言わなくてはならない。うそとまでいかなくとも債権者に媚びへつらうことでもまたやむを得ない。He that has not silver in his purse should have silk on his tongue. (財布に金銭を持っていない人は舌に絹をまとうべきだ) は、He that has no silver [money] in his purse should have silver [silk, honey] on his tongue. とも表わされるが、その意味するところは、借財を払えぬ人、気ままに使える金のない人、人から金を借りようとする人はせめて言葉づかいぐらいはていねいでなければいけない、ということである。平身低頭、三拝九拝し、さらに相手におべんちゃらを言い、相手の機嫌を損ねないように常に気を配らなければいけないのである。返済不能の言い訳には、「ない袖は振れない」理由のために不運と不遇が脚色される。債権者の同情を買って、延滞を許してもらわなければいけないからである。An ill payer never wants an excuse. (支払いの悪い人は言い訳にこと欠かない) には2つの意味がある。金はあっても返済しよ

うとしない図々しい債務者は、必ず賢いもっともらしい理由を言いたてるし、また、本当に返済不能の人は苦しめられに苦境を誇張してまでも返済を延期してもらおうとする。

できるだけ借金は避けるべきである。ところが、気軽に借金をすることがある。それは入るのを見越して人から借りる場合である。「捕らぬ狸の皮算用」をして、金を使うことに性急のあまり、つい前借りをしてしまう。この世では「一寸先は闇」だから、入る予定の金にも何が起こるか分からぬ。Never spend your money before you have it. (金が手に入らないうちに使ってはいけない) は、入る予定の金には慎重の上にも慎重であれ、金は入ってからその使い道を考えても遅くない、ということを示している。早まって金は使うなということである。また、借金があるのにもかかわらずそれを清算しようともしないで、見栄と外聞から気前よく振舞おうとする人がいる。Be just before you are generous. (気前よく振舞う前に借りは返せ) という諺は、借りたものは貰ったものと思ってか図々しくも自分の負債は棚に上げておいて、えびす顔で貧しい人に施しをしたり、他人に贈物をしたりする人がいることを示している。こういう人にはかぎって Godlike in giving but—the devil to pay. (気前よく人には与えても負債は片付けようとしない) である。金でも物でも借りないに越したことはない。Better buy than borrow. / Better to buy than to borrow [beg]. (借りるよりは買ったほうがまし) は借り物についての戒めである。借りた物は、失くしたり、こわしたり、返し忘れたりもする。またそれがもとで貸し手と不仲になることもある。借りるのは高く買うも同然である。金についても物についても、Neither a borrower nor a lender be. が当てはまる。

金銭の貸借は禁物である。借り手にも貸し手にもなるものではないということを教えてくれるのは、You cannot get blood [water] from a stone. (石から血[水]を得ることはできない) である。You cannot get [wring] water [blood, milk] from a flint [stone]. / You cannot get blood out of [from] a stone [turnip]. という形もある。借りようとする人にとっては、強欲な人からは金を借りることはできない、という意味になる。また、単に金銭とかぎらず、冷酷な人から同情を得るなどということはできない、という意味になる。一方、貸し手に向かってこのことばが使われるときには、金がなければ、あるいは払う気がなければ、借金など払えるものではない、という意味になる。どちらにしても「無い袖

(p. 22 へつづく)

Challenge & Response

〔質問〕高校用新指導案（試案）について

本誌66号に掲載された ELEC 教材・教授法研究グループによる高校用新指導案 (pp. 25—32) のうち、下記の 3 点につきご指導をいただければ幸せに存じます。

1. 新指導案では oral introduction は omissible となっていますが、この場合それに代わるものとして、どんなものが考えられるでしょうか。
2. 新指導案構成における基本的立場として、「聴解力」に力点が置かれているとのことですが、その割に「聞かせる」時間が少ないように思われますがいかがでしょうか。
3. Presentation of the new materials で行われる oral work の問題点、指導手順等についてご教示願います。

（埼玉県入間市 長沢 攻）

〔解答〕

昭和54年 ELEC Summer Seminar の Practice Teaching は『英語展望』66号で発表された「中学・高校の英語指導法」に基づいて実施されました。この Teaching Procedure に対し参加者その他の方々から率直なご批判をいただき、さらに積極的な適用への意欲を示していただき、研究グループ一同心から感謝致しております。さて、ご質問に対して以下順次説明いたします。

1. Oral Introduction を省略する場合について：

中学校では、入門期における基本的な英語学習の技術を正しく指導する立場から、予習よりもむしろ復習を家庭学習の中心にするよう指導しています。もっとも、中高を問わず、自ら積極的に学びとろうとする意欲を育てるために、主体的学習の重要性が、中学校の週3時間体制への移行について再認識されています。今後の学習指導法は、教室学習だけを考えるのではなく、予習、復習を含めた家庭学習指導が、指導法の大きな要因としてその一角を占めることになるでしょう。

一方、高校では教材の質量とともに高度になり、予習なしで授業を受ける場合には理解度が極めて低く、一般に

担当

ELEC 教材・教授法研究グループ

伊藤元雄

は約50～80%の生徒が学年を問わず、何らかの方法で予習を行っていることが報告されています。もっとも、予習の方法はさまざま、単語の意味だけを辞書で調べてくる生徒も含まれるのですが、ここで言う「予習を前提とする」という意味はその程度のものではなく、先に示しました Preparatory Sheet の内容が、ほぼ自習されているような状態を言っています。Paragraph の大意を把握するためには、語い、構文および文化的背景などがある程度理解されていることが条件になります。さらに、意味の区切りを自分で発見し音読を繰り返すことによって、Paragraph から文章全体の意味を大体感じることができるようになります。これだけの作業を学力差のある生徒たちに家庭学習として課すためには、個々の生徒の学力を意識して、綿密な「予習指導」を行う必要があるわけです。教室作業で Listening comprehension を含めた Oral work を多用しようとすれば、現在の高校教材では、どうしてもこのような準備をしない限り、時間不足になります。したがって、Oral Introduction に時間がかかり過ぎるということは、単に、導入作業の gist の与え方や、Q—A だけに問題があるのでなく、受け入れる生徒の予習状況にも原因があると思われます。

以上で大体おわかりのように、予習指導が十分行われている場合には、当然 story そのものの導入の意義は薄れます。しかし、生徒が学習内容をある程度理解していても、Oral Introduction (以下 O.I. と略す) には Oral (Aural) work の機能があるわけで、音声によってその理解度を確認しながら内容を導入することには、それなりの意義は十分あるわけです。また、item の導入についても、Preparatory Sheet などによってかなり家庭学習が行われている場合には、その内容を利用して実施可能です。

O.I. はこの Procedure では、「省略してもよい」ということではありません。この Procedure は一つの基本的な型を提示してあるだけあって、このままですべての授業に利用できるわけではないのです。もし、Reading aloud や Linguistic drill に指導の重点を置かねばならないような言語材料であれば、時間の配分はそれらに多

く与えられ、どこかの項目が少なくなります。その場合、予習という前提に立つと、あまり望ましくはないが、「omissible」ということもあり得るという意味なのです。高校の教材は Readerだけに限っても多種多様の内容があり、しかもも学力差を考慮しなければならないので、なるべく応用変化が可能な型にまとめてあることをご理解いただきたいのです。

2. 聞かせる時間が少ないのではないか、という点について：

この Procedure には大きな柱が大体 3つあります。1つは高校段階で音声ができるだけ利用し、ことばの学習の本質からはずれないようにしたいということです。2つめには、中学校における Oral Approach の基本的な型を継承して、高校英語の特性を十分に生かすような Oral Approach を考えるということで、中高の連携を意識していることです。また3つめには、どんな情報過多の時代にも自らの力で必要な情報を選別できる、主体的学習能力を育成したいということなのです。このような基本的理念をご理解いただいて、この Teaching Procedure の各項目、および配列の順序を考えてみてください。「聞く」という作業は必ずしも Tape-listening によらねばならないわけではなく、教師の Model reading、あるいは Intensive choral reading においても、Read-and-look up の技術を取り入れ、文字を半ば離れた状態で音読する場合でも、「聞く」練習は行われているわけです。勿論、後述するように、いわゆる Listening skill の基本的な技術をここで指導するということではありませんが創意と工夫によって、Procedure のある項目を特に「聞かせる」ための作業に置き換えることは可能です。たとえば Dictation, Oral composition に Tape-listening を利用することもよいでしょう。特に Oral composition は日本語を英訳させるだけではなく、英文で situation を与え表現を考えさせるような場合には、Listening comprehension と Production の作業が心的に統合され、大きな効果があがるものと思われます。

3. Presentation of the new materials での Oral work について：

Presentation での Oral work は O.I. の Q-A、および Practice of linguistic items における Pattern practice と Oral composition が中心になるでしょう。前者については、Preparatory sheet によって、reading points または listening points が questions の形式で既に示されていますが、これらは本文の内容を story の展開にしたがって理解するための suggestions であり、新言語材料そのものが使用されることが多いと

思われます。したがって、O.I. で用いられる Q-A とは異質のものであるということを確認したいのです。Preparatory sheet の questions そのものを、O.I. に利用するということは、item の導入まで行うということになる場合があります。今回の Procedure では item 導入についての型は示されていませんが、実施する場合の望ましい条件は大体次のようにになるでしょう。失づ、Oral work を多用し易い口語的表現の文であり、しかも、新言語材料が比較的少なく短時間で導入できる程度のもので基本的考え方は中学の場合にほぼ同じと思って差しつかえないでしょう。しかし、意味を確認しておかねばならぬような重要な構文とか、Paragraph の内容が要約されている Key sentence、または意味領域が広くて意味の正確な把握が困難であったり、1語の中に文全体の意味が抽象的に凝縮されているような Key word などは、高校では、日本語を使用してはっきりと概念を定着させておく方が、一般的には望ましいと言えましょう。Oral composition については先述したように、なるべく situation を先に与え、発想、表現法を言語活動としての作業に近づけるようにしたいと思います。

Listening drill の重要性は最近、言語学習の基本的な問題として論議されていますが、一時間の指導過程の中で明確に位置づけることは、かなり困難な研究課題です。「聞きとる」という作業にはさまざまな言語的能力や心理的要因が含まれており、ことばの働きとして最も基本的で、しかも他の言語領域への転移効果も高いと言われています。音素の判別、連結・同化などの変化、ことばの流れの速さ、ポーズの時間、文強勢のリズムなどの音声上の能力や、文構造を瞬時に把握し、次にくる構造や語いを予測する文法力が、基本的に要求されることになります。さらに「聞きとる」ためには話すために必要とされる語い数の数倍—約25,000と言われています——も要求されるというわけですから大へんな活動になります。しかも文化的背景がわからなければ本当に理解できるとは言えないのです。

《原稿募集》

- ▶『英語展望』では読者からの原稿を募集しております。内容・分量とも制限はありませんが未発表のものに限ります。掲載分には規定の原稿料をお贈りいたします。
- ▶“Challenge & Response”欄に質問、ご意見をお寄せ下さい。内容は英語教育問題に限らず、広く社会・文化・国際問題を含みます。



言語学習者の言語

ELEC 情報・資料の収集および分析研究グループ
玉崎孫治

母国語のほかに新しい言語体系を学習する場合、学習の方法によってその言語と母国語の関係がどのようになるか——すなわち、母国語と独立した体系となるか否かについての心理言語学的考察はこれまでもあった。しかし学習途中のその言語が、方言、言語習得期の子供の言語、ピジン¹⁾、クリオール²⁾と同じく、それ自身分析の対象となるような独自の言語体系としてみる考え方が出てきたのはごく最近のことである。教授者にとって学習者側の社会的・心理的・言語的要因を理解しておくことは、言語教育の成果を上げるために必須なことであるし、まして教えた、あるいは学ばれた言語そのものがどのように成長するかについては更に興味ある問題である。本稿は、言語学習におけるこのような新しい見方を提案している英國エジンバラ大学の S. P. Corder 教授の論文

“Language-Learner Language,” Understanding Second and Foreign Language Learning: Issues and Approaches, ed. Jack C. Richards (Newbury House Publishers, INC. 1978. 71-92) を紹介するものである。

Corder は、まず言語学習者の言語（以下 L₃ と略す）が独自の体系を持つ³⁾と考える困難点にふれている。それは L₃ が目標言語（L₂ と略す）への近接度によって無限に異なる体系を持つこと、又 L₃ が社会というより個人の所有物であるという点にある。しかしこのような動的な性格を持つ変異性は、別に L₃ に限ったことではなく、観点こそ少し異なるが、方言、クリオール、子供の言語にも認められるもので、人間の言語の特徴であると述べている。たとえば、言語習得期の子供の言語は大人の言語の特徴も持っているが、子供の発話はみな異なる。しかしそのような変異性は予見できる体系性を持っているのである。Corder は同じような体系性が L₃ にも認められると言う。このような L₃ の考えは Selinker の提案した中間言語 (interlanguage) 説⁴⁾と同じである。

L₃ の発話に L₂ と異なるところがあると、通常その個所

は誤りとして扱われるが、中間言語説をとると、それを誤りとして認めることは理屈に合わなくなる⁵⁾。これは方言の話し手による発話が標準語と対比し、又子供の発話を大人の言語と対比して誤りを指摘することが非論理的であるのと同じ理屈である。中間言語は子供の言語と同じく、徐々に変化し発達する連続体であり、学習者はこの連続体上に位置づけられる。

◆連続体としての中間言語

L₃ は母国語（以下 L₁）と L₂ の中間的体系で、しかも L₁ から L₂ までの連続体である。この中間言語連続体には、学習過程の相違によって、再組織連続体 (restructuring continuum) と発達連続体 (developmental continuum) の 2 種類が考えられる。

まず再組織連続体は、学習者が L₁ の特徴を徐々に L₂ の特徴に入れかえていき、L₁ 体系を漸進的に L₂ 体系に接近させることによって生まれると考える連続体である。この連続体の顕著な特徴は、連続体の最初から終りまでどの部分においても言語の全体的複雑さは変わらないという意味合いを持つもので、これは学習初期に文法と音韻両面にみられる L₁ からの転移を説明するけれども、L₃ がある意味で L₁、L₂ のいずれよりも単純であるという、教師の経験的主張と対立するものである。この中間言語の単純さの指摘は直感的に納得できるものである。

この単純さを説明するものとして、もう一つの連続体、すなわち発達連続体の考え方がある。この考え方では、中間言語は連続体の最初から終りまで一貫した複雑さを持っているのではなく、学習の進歩に従って漸進的に複雑さを増すとみられる。これはある点で L₁ の習得過程に似るもので、このような連続体を再造連続体 (recreation continuum) と呼ぶこともできる。この連続体は、子供の言語や中間言語のみならず、ピジンのクリオール化の過程にもみられるといわれている。

中間言語を発達連続体とみる場合、発達の起点は何か。 L_1 習得の場合、ゼロであると考えられるが、 L_2 学習の場合、全くのゼロとは考えられない。恐らく漸進的複雑化(increasing complexification)と再組織化(restructuring)を共にみとめた中間的な学習過程を考えるのが妥当であろうから、このような考え方にも合うような、しかも中間言語の研究から得られるデータにも合うような起点を考える必要がある。

中間言語説は、 L_2 学習者がすべて個別の発達過程をとると考えるものではない。もしそうであれば、 L_2 学習過程を一般化することも、その原理を発見することもできないことになる。反対に、 L_2 学習者のすべてに学習過程上の類似性があり、その中間言語連続体のどの段階においても類似性があることを前提にしているのである。このような考えが言語習得過程に基づいた学習者の“built-in”シラバス⁶⁾の仮説である。

このシラバスの仮説には強い仮設と弱い仮説が考えられる。前者は漸進的複雑化に基づいた仮説で、すべての L_2 学習者が L_1 に関係なく、概して同じ学習過程を取ると考えるものであるが、後者は再組織化に基づいた仮説で、 L_1 が同じである学習者は同じ学習過程を取ると考えるものである。この2つの仮説は、各々一方だけを受け入れるには少々無理があり、又必ずしも両者は互いに相いれないものではないから、学習過程の局面に応じて、両仮説の優位性が変ると考えたほうが現実的な考えである。たとえば、音韻体系の習得では弱い仮説を、又統語面では強い仮説を受け入れることが可能であろうし、又学習の場が異なること（教室内か、教室外の自由な場か）によっても両仮説の優位性は入れかわると考えられる。

◆言語の学習過程

Corderの立場は認知的学習過程である。学習者は言語的環境と関わりながら、その環境の内的表示すなわち仮説をたてる。つまり言語学習は言語の使い手と関わることによって行われ、言語資料の本質とその運用に関する仮説をたてるのである。 L_2 学習者の場合、子供と異なり、非言語的環境に対して発達した見方を持つばかりでなく、既に L_1 の言語的環境についても完全に発達した仮説を持っているから、 L_2 の言語資料を処理する場合にも利用できる。人間の言語の文法に関する豊かな仮説を持っている。もし学習者がこの仮説を用いるならば、再組織化の過程を取り、用いないならば、子供の言語習得に類似することになる。しかし L_2 学習者は認知的学習能力において成熟しているから、この点における L_2 学習者と子供の相違が、 L_2 に関する仮説の発達速度のみならず発

達過程にも影響を与えると考えられる。

学習者は、自分がたてた仮説の妥当性を検証するために、言語的やりとりを行う。自分の仮説（すなわち、内的中間言語文法）から生成される発話を発し、それが伝達の目的を果たすかどうか確認るのである。もし果たさなければ、仮説を改めるわけである。しかしこのような言語的やりとりは、仮説の検証を意識して行われるのではなく、あくまで意思の伝達を目的としたものである。要するに、言語学習は L_2 の話し手との伝達活動の中で行われるのである。

さて、その伝達活動についてであるが、教室内における中間言語のやりとりは、ディスコース⁷⁾の観点からみると、非常に限られたものである。それは学習者に対して教えるという目的に限られ、多くのディスコースの機能の1つを果たしているにすぎない。従来の言語学習の研究が教室におけるやりとりにだけ基づいていたから、言語学習に対するイメージはゆがめられていた。最近では、教室内においても、できるだけ幅広い伝達活動を行い、多くの異なるディスコースの機能にふれることができ重視されている。

◆入力と出力

コンピューターの入力、出力という概念を借りて、学習者の言語資料（入力）とその資料処理によって生ずる中間言語文法（出力）の関係を検討するのは、資料処理、すなわち学習の性質について考える上で有益である。この関係は、教育の現場では、教えるものと実際に学習されるものの関係に外ならない。俗に学習者は教師が教えるものを学習すると考えられ、このような考えがテストや問題練習の結果によって支えられている。しかしテストや問題練習は通常の意味における伝達活動ではなく、そこから学習者の中間言語の性質を推察することは期待できないのである。テストや問題練習の目的は、 L_2 に対する学習者の知識を計ることであって、中間言語の文法の実体を示す資料を引き出すことではないからである。中間言語の実体は、伝達のために言語を運用し、学習者が他の話し手と言語的なやりとりを行な際にかわされる自発的な発話の検討によってはじめて明らかになる。

コンピューターの出力と中間言語の文法の出力との間に何らかの類似があるかもしれないが、入力については、学習者が接触する言語資料をコンピューターの入力と同じように考えるのは、教材と学習されるものの間に何も必然的な結びつきがないから間違いである。教える側のシラバスも又入力ではない。学習過程の入力とは学習される（中間言語文法に吸収される）ものである。言語資

料には入力となるものもあるが、又ならないものも含まれていて、入力となる要素は、学習時の中間言語文法によって決定される。

学習者が接触する言語資料の性格を検討してみると、教室内の資料は教室外の資料と著しく異なり、教える側から作られた構造的シラバスに制御されているのが普通である。しかし、そのような教える側のシラバスにおける資料の導入順序の論理が必ずしも学習者の学習プログラム（すなわち、“built-in” シラバス）の内的論理と関係があるとはい難いのである。従来のシラバスは、いずれも自由な学習環境における言語習得においてみられる中間言語の発達の研究に基づいて作られていない。従って、学習者に構造的シラバスによって制御された資料が与えられたとしても、“built-in” シラバスに基づいた必要な形式が与えられないすれば、学習時の中間言語文法の発達に必要な情報が与えられないことになりかねない。しかし現在のところ、“built-in” シラバスについてまだよく分かっていないから、やらなければならることは、学習者の言語資料（与えられる言語形式）に対する構造的シラバスによる制御をゆるめることである。

学習者による言語資料の処理をできるだけ容易にするために、資料には何らかの制御が課されている。それは構造的シラバスによって与えられる制御とは異なったものである。これを仮に修辞的制御と称する。母親等の大人が子供とやりとりをする場合、子供の年齢や言語的発達に合わせて、構造的観点からというよりも、むしろ機能、話題、発話の長さ、テンポ等の点で単純な言語を使う。このような単純化された mother talk は、子供の知覚的過程に合わせて発話の解釈を容易にするために、普通の大人の言語活動を子供の文法に合わせたものである。L₁の話し手がL₂学習者に話しかける場合も同様に、学習者が言語記号の処理を容易にするために普通の話し方を修正する。教師と生徒の間の伝達活動にも同様の単純化が起り、修辞的制御を加えて与えられる資料を teacher talk と呼ぶ。これが中間言語文法の入力である。

◆伝達の方略

中間言語の話し手とまじわるL₁の話し手が、伝達を容易するために修辞的単純化の方略をとるならば、中間言語の話し手はどのような方略をとるか。常識的に考えて、話し手は冒険的（risk-taking）方略と非冒険的（risk-avoiding）方略の2つをとると考えられる。前者はいろいろな手段を講じて伝達の目的を果たそうとする積極の方略で、パラフレーズ、推量、新語創造、L₁なしの他の既習の言語からの借用（翻訳）、身振り等の

形をとり、言語資源拡大（resource-expansion）方略とも呼ばれるものである。一方、非冒険の方略は、言語的やりとりを拒んだり、話題を変えたり、あるいはなるべく話さないようにしたりするような消極の方略である。

中間言語の話し手による伝達の方略を研究するのは、方略と学習（中間言語文法の発達）の関係に興味があるからである。非冒険の方略はほとんど学習につながらないが、冒険の方略はつながる。もし推量によって使った形式やL₁から借用した形式が対話者に容認されるならば、L₂の一部として学習者の言語目録（linguistic repertoire）に組み入れられる。もし容認されないならば、それはそれでL₂体系の限界についての情報を提供してくれる。われわれはいろいろな推量を行うことによって言語規則の限界を学習するのである。原理に従った推量は仮説の検証と同じ働きをするのである。

さてL₁の借用は理論的な観点からみて興味のある推量方略の1つである。L₃によくL₁の特徴に似た特徴がみられるが、もしこの特徴についてL₁とL₂の間に類似性があれば、借用の結果は誤りとならず伝達の目的を果たすから、L₂の話し手に気づかれずすむ。このような借用は学習につながるし、L₃の文法に組み入れられる。しかし、もしそういう類似性がなければ、誤りとなり、伝達は不成功に終る。ここで問題となるのは、その誤りが再組織化によって生じたL₁の特徴（すなわち、転移の特徴）なのか、あるいは伝達のために推量方略に基づいて一時的に借用した特徴なのかということである。これを区別することは容易でないが、それには、その特徴が体系的に生じるか、あるいは偶発的に生じたものか検討しなければならない。

それでは学習者が借用の伝達方略をとる原理は何か。われわれは自分の母国語特有の特徴について何らかの概念を持っているといわれているし、又L₁と普通よく教えられている外国語との間に感じる相違感——つまり言語間の距離感⁸⁾——についても何らかの概念を持っており、このような概念が学習方略（再組織化か再造過程か）を決めるといわれている。

以上において、学習方略についても、伝達の方略についても、いくつかの可能性があることを述べて来たが、このような選択の可能性があること自体、言語学習者がみな同じように学習するものであるという考え方を捨てる必要があることを意味する。又それらのどの可能性についても個人差のある、いろいろな要因がからんでいるので、中間言語の発達は、発達の基本的な型については学習者ごとに変らなくても、発達の順序や速度については一様ではないのである。

◆運用上の変異性

中間言語の変異性は、連続体として持つ本質的な、ダイナミックな性格からあらわれるもののほかに、中間言語の話し手の運用上あらわれるものがある。教師の側からL₂学習者を観察していると、既習事項と思われる形式が時によって使えたり、使えなかったりで、学習の結果に一貫性がみられないように見えることがある。これが中間言語を規則的な体系としてみる考えの反論に挙げられるのである。しかし、この反論は、L₁の運用においても同じような変異性がみられるという事実を見逃したものである。実際、この種の変異性は、でたらめなものではなく、伝達の場の社会的脈絡によって条件づけられたものであり、一定の原則に従ったものである。中間言語の話し手も、少なくとも音韻面において、フォーマルな場とかインフォーマルな場といった伝達のコンテクストの相違によって発話の仕方を変えていることが明らかになっている。中間言語における運用上の変異性は、学習者の忘却などの原因であらわれるのではなく、対話者に対する話し手の態度などの社会的意味を伝えるために⁹⁾、中間言語の話し手が、豊富な変異形が駆使できる言語資源を持ったL₁の話し手と違って、限られた言語資源を使う結果として起こるものである。

◆単純化された言葉と学習者の学習起点

L₁の話し手は、L₁の運用において、その言語的複雑さの程度をいろいろ変える。ディスコースによっては、普通の言語体系よりも言語的に単純な体系を使うことができる。このような言語の単純化は、言語社会の中で様式化されており、運用される言語の構造的な複雑さは予測できるのである。例えば、指示の表現、電信文、見出し語等の場合、構造的単純化はそれほど極端なものではなく、冠詞の省略、けい辞動詞の省略がみられる程度である。一方、幼児語や外国人の言語の場合は、単純化の程度がもっと高いものであり、あらゆる形態的標識の省略、語順の固定化、語彙の縮小などがみられる。おそらくこの両者の中間的な程度の単純化がみされることも考えられる。

このような単純化された言語は小さい頃から身についているものであり、又このような体系を分析すると、ピジンとか、中間言語連続体や子供の言語の初期の段階とかに著しい形式的類似性がみられるが、こうした類似性は偶然的なものではない。

われわれは、単純化された言語を学習する、しないにかかわらず、変動性のある幅広い複雑さを備えた言語体系を持っている。言語体系の単純化の程度が高けれ

ば高いほど、言語間における類似性が強まってくる。単純化の程度の高い体系は、何らかの基本的で普遍的な言語体系（すなわち、自然の意味=統語体系（natural semantax））に近いものを表わしているのではないかとさえいわれている。

さて、既に問題として挙げた、複雑化の過程であると同時に再造過程であるL₂学習の起点がどのような性格を持つかについて大体見当がついてきたように思う。それは、おそらくL₁の単純化された体系であり、基本的な言語体系であり、同時に母国語、ピジン、クリオール等のすべての言語の発達が始まる自然の意味=統語体系であろう。しかし、どの言語を学習する場合にも起点は同じであるというのではなく、何を起点とするかは言語間の距離によって異なるのである。たとえば、中国語と英語の場合のように、距離が大きければ、起点は単純化の程度の高い体系となり、デンマーク語と英語のような近い関係にある場合は、それほど単純化の程度は高くなくてもよいのである。

（南山大学助教授）

注

- 1) 共通の言語を持たない話し手が商取引のために使う、2つ以上の言語の特徴を単純化した混成国際語を指す。
- 2) 元はピジンであるが、成長してある言語社会の母国語となり、完全な自然言語としてのすべての機能と特徴を完備して来た言語を指す。
- 3) Corderは、言語学習者は自分自身の文法を操作し、自己特有の言語を持つと考えた。これを一種の方言としてとらえ、過渡期的方言(transitional dialect)とか個人特有方言(idiosyncratic dialect)と呼ぶ。
- 4) Selinkerは、言語学習の過程に、母国語とL₂の間に存在し、そのいずれとも性質を異にする別個の言語体系が作られるという説を提案した。“Interlanguage,” *IRAL* Vol. 10, No. 3 (1972). 更にこの提案については『英語教育』1978年4月号の田中春美氏の論文を参照されたい。
- 5) しかし、これは決して誤りの分析(Error Analysis)が無意味になることを意味するものではない。Corder自身、誤りの分析の意義について次の3点を挙げている。
(イ)教習者に学習者の目標到着度を暗示する。
(ロ)言語の学習過程や言語の本質を発見するために用いている学習者の方略についての証拠を示す。
(ハ)誤りをすることは学習の手段であって、学習者自身にとって必須のものである。このうち(ロ)、(ハ)は中間言語の研究に直接関係する。“The Significance of Learners' Errors,” *IRAL* Vol. 5 No. 4 (1967) pp. 161-170. この論文は Jack C. Richards (ed.) *Error Analysis* (Longman, 1974) にも再録されている。
- 6) このシラバスは Corder (1967) が教える側のシラバスと対比して提案したものである。“The Significance of Learners' Errors”(注5) 参照。
- 7) 言語形式と伝達時のコンテクストにおける言語の機能の結びつきを指す。
- 8) これについて検討するのは対照分析の役目である。
- 9) 拙稿「社会言語学と言語教育」『英語展望』No. 61 (1978) 参照。



『英語教育学研究 ハンドブック』

垣田直己編、大修館書店刊
A5判、xxxvi+739pp.、¥5,600

伊藤嘉一

昭和40年代に入ると、それまでの言語学主導型の英語教育への反省がなされ、英語教育の学的独立への機運が高まってきた。45年頃から各地に英語教育学会が誕生し、以来英語教育学研究への多くの努力が払われてきた。本書はいわばこれらの努力の種々重ねの結晶といふことができる。「まえがき」に示されているように「英語教育にかかわる諸領域における論考を可能な限り集約、整理し、ささやかな考察を加えて、『英語教育学研究ハンドブック』という一書にまとめた」ものである。

従来、日本の英語教育には2つの傾向が見られた。1つは言語学や心理学など周辺分野を強調するあまり、情報過多となって、英語教育の概念をあいまいにし、英語教師に過度の精神的負担を与えてきたことである。もう1つは、「英語教育は理論ではなく、実践である」という観点から、指導法や教材のみを強調し、英語教育を技術的なレベルにとどめ、視野の狭いものにしてきたことである。前者の場合には、関連分野の理論の紹介や寄せ集め的な本が多く、後者の場合には、体験的、隨筆的な本が多くあった。

その点、本書は英語教育学という観点から、英語教育そのものに焦点を合わせ、できるだけ余計な情報をカットして、関係情報のみを取れんさせている。29名という多数の執筆者にもかかわらず、全体としては非常によくまとまっており、編者の目がよく行き届いていることを感じさせる。従来の伝統的な英語教育書からは大きく前進した画期的な労作であるといえよう。

序論を除いては、外国の理論の紹介が中心であるが、単なる紹介にとどまらず、それらを咀しゃくして、日本の英語教育に関連づけようとする意図が感じられる。いずれにしても、外国の理論や資料が豊富に紹介されているので、英語教育研究者にとっては参考になる面が多いであろう。また英語教師にとっては、外国での新しい理論を知り、視野を拡め、教育を改善するのに役立つであろう。ただ多くの執筆者が分担しているために、多少の内容の重複や優劣があることはやむをえないことであろう。

本書は総計783ページにも及ぶ分厚いものなので、ハンドブックという名が示すとく、参考書というよりは、便覧として有用であろう。とくに巻末の110ページに及ぶ外国の文献リストは英語教育関係者には貴重な資料となろう。

本書は、「目的にかかわる領域」、「言語材料にかかわる領域」、「習得にかかわる領域」、「教授・学習にかかわる領域」、「評価にかかわる領域」、「教師養成にかかわる領域」、「研究方法にかかわる領域」の7つの章から構成されている。この他、「英語教育学について——はじめに」という序章と「外国语選択一覧表」など2つの表と文献リストとが付加されている。

次に各章の内容を概略してみる。

まず序章の「英語教育学について」では、英語教育学という言葉の起りからその成立までの過程を詳細に記している。歴史的なものとして記録にとどめたいという編者の意図は理解できるが、別記するか、もっと簡潔な形で表現すべきであったかもしれない。というのは、学問の成果のみを利用する現場にとっては、かなり冗漫でわざらわしいものと映るかもしれないからである。しかし研究者にとっては英語教育学成立の過程やプロフィールを知る貴重な資料となろう。

第1章「目的にかかわる領域」には、「I. 外国語学習」、「II. 外国語教育の目的・目標」、「III. 目的・目標に関する国際比較」の3節がある。第1節では、外国語の定義や外国语と国家、社会、個人との関係が扱われている。社会言語学的視点からの第1言語教育と第2言語教育との区別は有益である。第2節では、まずUNESCOのデータから外国语教育の目的・目標を全体的にとらえ、次に各国のそれを国ごとに要約している。ヨーロッパ諸国の目的・目標がどんなところに強調点をおいているかがわかって興味深い。

第2章は英語という言語に関するもので、「I. 英語

の性格」、「II. 言語対照分析と教材編成」、「III. 教材の選択と配列」の3節からなっている。第1節は英語史や英語地理学の問題で、英語教育の面からは専門すぎるような感じがする。第2節は対照言語学の概説であるが、これも言語学の範囲であって、英語教育ではさほど深入りする必要はないように思われる。第3節は語い、文法、発音の言語材料や文化・題材についてのものであり、教材作成上の参考になるであろう。

第3章は言語習得の問題であるが、「I. 第1言語の習得」、「II. 第2言語の習得」、「III. 外国語能力の要素」の3節に分かれている。第1節は幼児の母国語習得についての理論で、脳の問題にもふれられているが、母国語教育や早期英語教育以外では、日本の英語教育への貢献度は少ないであろう。第2節は第2言語の理論的背景や中間言語、学習者の要因、干渉、バイリンガリズムの問題を扱っている。学習者の要因や干渉の問題は外国語教育に多少は関係するが、中間言語やバイリンガリズムは日本の外国語教育ではほとんど関係ないものであろう。第3節は外国語習得理論と四技能についてまとめたものであり、有効である。

第4章は「I. 外国語教授原理および論争点」、「II. 外国語教授過程と教授プログラム」、「III. 外国語教授のメディア」の3節からなる。第1節では、教授法の歴史や学説、オーディオリンガル・アプローチと認知記号学習理論の相違、Speech Primacy（音声言語優越主義）、母国語使用、構造主義と場面主義、誤り分析の問題を要領よくまとめている。第2節はカリキュラムや指導技術、言語技能などについてであるが、かなり具体的にまとめられているので、実際の指導の上でも役立つ面が多いであろう。第3節はいわゆる視聴覚教育やLLについての概説である。

第5章「評価についての領域」は、「I. 学力評価の原理と過程」、「II. 学力評価の方法」、「III. 外国語の教材とプログラミングの評価」、「IV. 外国語教授法の評価」の4節に分かれている。第1節は評価の一般的原理で、第2節は四技能や文化・態度についての評価である。ここでは、各技能ごとの評価と同時に、比較的新しいクローズ・テストやノイズ・テストにもふれている。またアメリカでの市販テストのリストも記載されているので、実物を取り寄せるには便利であるかもしれない。

第6章は教師養成に関するもので、「I. 外国語教師の資質」、「II. 外国語教師の養成と研修」の2節からなっている。第1節では外国語教師の具備すべき能力や教

授能力について述べている。第2節では、TESOLなどの教師養成プログラムにふれながら、その構成原理を説明している。ここではアメリカや西ドイツ、ソ連の外国语教師養成カリキュラムを具体的に示しているので参考になるであろう。次にマイクロティーチングにふれながら教育実習や現職教員養成の問題を解説している。

最後の7章は研究方法についてのもので、従来の英語教育書では見られなかったものである。「I. 一般的原則」と「II. 方法と内容」との2節がある。第1節では教育研究の上での一般的注意を、第2節ではアメリカでの外国语教育の実際の研究例を紹介している。本章では情報が部分的なせいか、外国语教育研究の特性や実際の方法にもふれられず、内容が理論的でも実践的でもなく、中途半端なものになってしまったのが残念である。

付表では「表1. 外国の外国语選択一覧表」と「表2. 外国語の位置づけ一覧表」が紹介されている。外国语教育政策に関心をもつ者には有意義な表である。巻末のほう大な文献リストは外国语教育研究に携わる者やそれを志す者にはとくに有益であろう。

最後に、この本が英語教育学研究の総まとめとしてではなく、編者がはしがきに述べるように、英語教育学研究発展への1つの礎石として、日本の英語教育を方向づける新しい出発点となることを祈りたい。そして、多くの時間と労力を費やし、外国の文献を綿密に調べて本書を完成させた努力に敬意を表したい。

（東京学芸大学助教授）

英語展望 パックナンバー

No. 67 外からみた日本の英語教育

日本の英語教育の成果とこれからの歩むべき道をさぐる。ライシャワー、國弘。

No. 66 新しい英語教授法

中学・高校の新しい英語教授法の具体案を提案する。80年代のTeaching Planはこれだ。

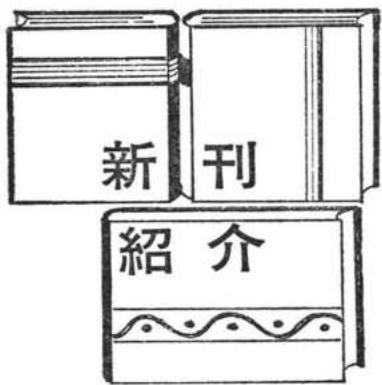
No. 65 楽しい英語教室

ゆとりとうるおいのある英語教室を求めて。日本語と英語について語る一國弘 vs. ジョーデン。

No. 64 大学の英語教育

英語科教員養成の問題点と改善策を多角的に検討。外山・羽鳥・田崎・朱牟田の各氏。

各530円



■『英語指導法ハンドブック ④評価編』

羽鳥博愛・浅野 博
伊村元道・大井上滋編著
大友賢二・清川英男

「ある学習活動が行なわれた場合、学習活動の目標が達成されたかどうかを測定するためにその目的にかなったテストが必要である。」これは極く当然の授業測定評価の原則である。しかし現実には、ある学習活動を訳読み文法と考え、測定方法は既習箇所から文の一節を取り出し、内容や語句の意味を問い合わせ、文法問題を加えるという形式が多いようである。さらに普段テープレコーダーの使用はおろか音声の指導を十分に行なわないにもかかわらず、中間、期末試験で抑揚や発音問題が出題されるのが現状である（国分寺市某中学校）。ある学習活動が行なわれないにもかかわらずテストが存在している。これは学習活動と測定評価の関係を正しく理解していないことから生じるものである。このような教師に本書の実践編を読んでもらいたいものである。

本書は理論編と実践編から成り立っているが、ここでは実践編を主に紹介したい。「ある学習とは四技能

を含む学習である、実践編では中学校で学習される（一部高校）文法項目が総て網羅され、各項目毎に四技能のそれぞれの設問例が記載されている。各設問例は、単に測定のための問題例というだけでなく、日常の学習活動はどのような形式になるのかが推測され、授業において学習活動を実践させる上での良いヒントを与えてくれる。特に「聞き」「語す」の設問例が、各文法項目毎に工夫されている点は、ユニークであるといえる。「聞く力」の場合はテープ利用の形式が、「話す力」の場合は教師の質問に答える形式がよく使われる手法であるが、本編では絵を利用した設問が多くみられる。絵を使用すると理解が容易になるばかりか、学習活動自体が活発になるのである。絵をヒントに文を発話させる設問例は、類似の学習活動が日常あるからこそこのような測定方法が可能といえる。この例は授業とテストの関係を如実に物語っている。

各項目にはテスティングポイントの他に、実施上の工夫が書きそえられている。この工夫は執筆者が生徒の学習活動を通じて体験した事柄であり、大変有益であるといえる。

このように実践編は授業中の学習活動の一部であるとの認識にたてば、理論編の各論とも関連づけて読めるのである。実践編は理論編を具体化したと考えてよいであろう。その好例は「外国語テストの基本的課題」の中にみられる。筆者は文法構造の運用を測定する従来のテストの他に、意志伝達行動能力を測るテストの必要性を主張し（実践編の絵を利用して「話し方」テストはこの主張の具体例と考えて良い）、そのためのテスト例として noise test, cloze test, productive communication test をあげている。いずれの場合にも現在の授業・測定評価方法を改善するた

めに良いヒントを与えてくれているといえる。

「テスト作成の実際 [I] 一般的留意点」では、実際のテスト作成手順に従って説明が平易にされているため、内容の理解は容易である。「リーディングテスト作成上の留意点」では、日本語訳は測定対象として最適ではないとする主張と、それに基づく設問例は参考となる。「スピーキングの考え方と問題点」において、リスニングとの関連の考察、すなわちリスニングとスピーキングを分離し指導する必要があるとの主張は、現状での学習活動を考える上での参考となる。「評価と研究のための基礎統計法」は、大学の教職課程では必修となっていないだけに、英語教師は体得しておくべき知識である。

総じて本書は理論編・実践編を通じて理解困難な箇所ではなく、日常の学習案作成研究の際に役立つものと思われる。

（大修館書店刊、A5判、643pp.
￥4,500）

（神奈川大学講師 浅野紀和）

■『英語を習うということ』

國弘正雄編著

本書は、編著者である國弘正雄氏が行なった数々の対談のうちから、外國語教育に関するものを集録したものであるが、多士済々、超一流のゲストと当代随一の聞き手の能弁に魅せられて、220余ページを一気に読んでしまいたくなる。しかしそれでは受容的な読みにとどまることになる。途中で随时反趣、咀嚼してこ

そ積極的な「表現よみ」に達するのではないだろうか。

「西欧思考と日本思考」の團伊久磨氏は、文章を書くことも作曲することも同じことで、ものを構造的にとらえる西欧型思考が必要であり、外国語学習でも、その国の人々の生活感情、気候、風土などを把握してからなければならないと説く。『パイプのけむり』の文章家は話したことばも実に美しい。

日本の英語教育のなかで最も立ち後れているのが文化に対する理解と指導の面であろう。「ことばと文化」の鈴木孝夫氏は、ことばのフィールドワークの重要性を強調する。目の覚めるような実例がポンポンとび出す具体的な話しぶりには説得力がある。

「異文化理解と外国語教育」のドナルド・キーン氏——この日本文学研究の大御所は、人間的な接触をぬきにしてことばの習得も文化の理解もありえない、もっと楽しい会話のことばをたくさん覚えよう、というキーン氏の正確で温かい日本語が心地よくひびく。

Jorden Methodとして知る人ぞ知るエレノア・ジョーデン氏の「日本語と英語」は、神秘的言語と思われがちな日本語を科学的に分析して、日本語教育に効果をあげている経験から、日本の英語教育に対し示唆に富むいろいろなアドバイスを披露する。

「日本人の国際性」の桐島洋子氏は『淋しいアメリカ人』を書いた洞察力で、国際性を身につけないで英語が学べますか、とさわやかに歯切れよく訴える。

畢生の大著 *The Japanese* のライシャワー元大使は、日本が世界のリーダーシップをとるために能動的な自己表現の英語の習得をすすめ、「国際語としての英語教育」を語る。

大の親日家の弁は滋味あふれる思いがする。

「外国语教育の周辺」の永井元文部大臣は、国際的平衡感覚の上に立つ外国语學習の構えを懇切に説いてきかせる。

三木元総理は体験を踏まえた「日本人と英語」の中で、若いうちに英語の基礎とその心をしっかり学びなさい、と親身に教える。

最後に國弘氏自身が「外国语上達の秘訣」として、只管朗読・筆写法を実証的な裏づけをしながらわかりやすく解説してくれる。

瑣末主義にとらわれがちなわれわれ英語教師に新鮮な驚きを与え、広い視野と多角的な視点の必要を教えてくれる啓蒙の書である。

(ELEC 出版部刊、B6判、240pp..

¥980)

(國土館短期大学助教授

名和雄次郎)

■『英語の発想と L L』

LLA 関東支部
高等学校部会新潟班著

高校生になんとかして話す力をつけさせたい。しかし、適当な教材がない。それなら自分達で良い教材を作ろうではないか。話す能力を養う場合、各自のベースで学習し、最も効果をあげるために L L を用いるのがよい。とすれば、教材はどのようなものにするのがよいであろうか。また、その理論的裏付けは何に求めたらよいのであろうか。

本書はこのような問い合わせに対する一つの解答を出した研究と実践の報告である。換言すれば、本書は高校の

現場の先生方が、話す能力を養うための実戦用兵器の自主開発のため、理論武装をし、その理論的基盤の上に立って、効果的教材の試作をしていった報告である。このようなすぐれた研究が現場の先生の中から出てきたということは、日本の英語教育の将来のために喜ばしいことである。

本書の理論の基盤は「語用論」と「談話」と「発想」にある。会話は2人(以上)の人が話をやりとりすることによって成り立つものである。それゆえ、話す能力を養うためには「談話」という単位の中で、どのような「発想」に基づく言語表現がなされるかを「語用論」の立場から明らかにする必要がある、というのが著者のすぐれた見解である。このために「談話法」にかかわりのある諸説を概観し、数多くの資料を集め、それを「発想」の型の違いに分類し、言語表現自体の分析を行い、それらの組み合わせの型を明らかにしていくという手順を踏んでいった。その結果得られた分析資料のために本書の約3分の1強がさかれているが、これは貴重な資料となろう。

本書には、この他にもいくつかのすぐれた点がある。例えば、理論的考察では、Hinds の網状図は、(1)ある発話が誰のどの発話に対してなされたかを明示的に示せないこと、(2)パラグラフの境界をこえた発話に言及している場合を扱う手段に欠けていること等の指摘は注目に値しよう。また発想の分析に関しては、談話にしろ発話にしろ、「つなぎ」の部分と主要な「意味内容」を表す部分とに分けて考えるべきであるというような所見も重要である。

次に、本書の問題点と思われるものに目を移そう。理論面では、語用論と談話法に関する諸文献の内容紹介がやや羅列的である。もっと外国语教育への応用という点から取捨選

択して、一本の太い柱を立てるべきであろう。さらにテクストの内容については、高校生を対象にしているにもかかわらず、ゴルフの話や夫婦のやり取りが範例としてあがっているのはいかがであろうか。また、発想の分類の仕方ももっと組織化・有機化する必要があろう。

細部の問題点にこれ以上立ち入る余裕は今は無い。そこで、このような試みのみならず、今後のLL教材開発の試みに対する希望を3つ程述べてしめくくりとしたい。

LL教材は、話す能力を養うものであれ、聞く能力あるいは書く能力を養うものであれ、教材の良し悪しが学習効果に大きな影響を及ぼすものである。したがって、教材内容を吟味し、一層質の向上をはからなければならぬ。その際には、気のきいた表現・なる程と思わせるような表現・愉快な表現等をふんだんに取り入れる工夫をすべきであろう。これらは応用がきき、話す能力の不足を補う上で大きな効果を發揮するものだからである。

話す能力を養うことを目的としたものの場合、言ってはいけないこと、言わない工夫をする表現（例えば言外の意味による表現など）に注意を払うべきであろう。言うべきでないことを言わないのは、英語の世界でも当然のことながら大切だからである。

最後に発想の違いによる分類に関して一言述べておこう。日本語と英語に共通（類似）の発想に基づく場合には、それ程繰り返さなくとも比較的楽に習得でき、口に出てくるものである。したがって、両言語に共通の部分とそうでない部分を明らかにし、そうでない部分の英語的発想とその表現を重点的に取り上げるべきであろう。この点の配慮が望まれるのは、そうしなければ、楽な部分

に過剰のエネルギーが費やされ、結果としてあまり効果が上がらなくなる可能性が大きくなるからである。
(桐原書店刊、A5判、viii+307pp.
¥2,500)
(筑波大学現代語・現代文化学系
助教授 原口愚常)

感じられる。

①記者として、②キャスターとして、③特派員として、④野次馬として筆者が語ろうとしているのは40男のカタルシスではなく、自ら感じたショックの集大成なのだろう。

『ワシントンポスト』紙が報道した「ウォーターゲート」事件やアメリカのベテラン記者たちの「国家機密」に対する個人的見解がふんだんに盛り込まれているが、なんといってもオモシロイのは、自ら大好きだったエルヴィス・プレスリーの死に際して書いた一文に関するくだりだ。23歳の女性から手紙をもらって「雑誌にエルヴィスのことを書いてお金が欲しかったのか」と批判されたと“告白”している箇所は、筆者がジャーナリストとしての感受性とつましさを持ち具えている証左だろう。

だからこそ「年間に8億部」も出版されているという漫画に注目し、「少年漫画の大部分は、友情、努力、勝利の3要素のカクテル」で、「それが疑うべからざる真ならば、越後の田舎から笈を負うて都に上り、努力の末に頂上に登りつめて、勝利の快感を味わい、その後も盟友への友情に厚く、盟友をして自分と同じ権力の頂点に就かしめた人こそはその体現者であろう」と言い切れるだけの主体的な見方——ができる。

ひとりのジャーナリストとしてまとめあげた体験的メディア論として、なにもジャーナリストをめざすばかりでなく、ごく平凡な一市民が読んでもうなづける部分が多いのが本書の最大の長所だ。それだけにジャーナリストとして自らが失敗した実例をもっと赤裸々に、ユーモラスに紹介する章がもうひとつ欲しかった感がする。

(日本ブリタニカ刊、四六判、288pp.
¥980)

(日刊ゲンダイ記者 寺石容一)



『英語教育の背景』（現代の英語教育—11）

國弘正雄ほか 8 氏著，A5 判，231pp., 1,400 円，研究社出版

「言語と文化」國弘正雄，「イギリスの歴史と国民性」中村敬，「アメリカの歴史と国民性」本間長世，「英米風物の基本知識」吉田正俊，「英米文学の常識」富原芳彰，「聖書とシェイクスピア」ピーター・ミルワード（山本浩訳），「英語の歴史」郡司利男，「新イギリス事情」木村治美，「新アメリカ事情」広中和歌子，以上が本書のテーマと執筆陣であるがそれぞれのテーマごとの入門書としては最適である。しかし、マザー・グースに関するものが入っていないことはなんとも残念。書名は『英語の背景』とでもしたほうがよかった。

『車の英語考現学』 山岸勝栄編著，A5 判，430pp., 2,200 円，こびあん書房

面白い本である。自動車の運転に關係のある英語の用例を3,000以上集めて分類していて、オーナードライバー、カー・ファンにはもちろんのこと海外生活をする人にとっても、まことに便利な本である。日本語と英語の索引はさらに利用価値を高めている。

『テムズの流れに沿って』 蛭川久康・井上宗和共著，B5 判，135pp., 4,800 円，大修館

チグリス、ユーフラテスを始めとして、およそ人間の文明は川と切っても切れない関係にある。イギリスのテムズ川の源流を出発点として、流れにそって文化の移り変わりを豊富なカラー写真とイラストによって説明してくれる。居ながらにしてイギリスの文学散歩が楽しめる。数十分見つづけても見あきることのない詩情あふれる写真がふんだんに使われている。4,800 円、それは非常に安い買い物である。これからイギリスに行かれる方、また、すでに行って来られた方にもぜひ一読いや一見をおすすめしたい。

『英語のていねい表現』（オックスフォード実用英語シリーズ3）リチャード・ブル著、井出祥子訳・解説、B6 判，263pp., 950 円、オックスフォード大学出版局

英語には敬語はあるのか？ という質問をしばしば耳にする。紹介、招待、訪問、病気見舞、道を尋ねる、買物、就職等々、のジャンルに分けて、そこでの典型的な

会話を見開き対訳で示している。同種の意味内容を表現する場合でも、いくつかのちがった表現のあることを例示して、それらの表現のもつ社会的評価を詳しく解説してくれる。著者は「人と人との心のコミュニケーションの鍵となる言葉のしくみが、英語ではどうなっているかを明らかにしようとした」といっているが、その意図は十二分に生かされている。

Daily Telegraph Newsmagazines

英語の能力別に編集された世界の情報誌として、全世界に話題になっている本誌は、来年から YOU (中学1年用) と PEOPLE (中学2年用) を発行することになった。これで今までの3種とあわせて5種類となる。いずれも年9冊発行。

You

中学1年向，450語，1,200円

People

中学2年向，750語，1,300円

Faces and Places

中学3年向，1,000語，1,300円

News and Views

高校1年向，1,500語，1,300円

Inside Britain & America

高校2年以上，1,500語以上，1,600円

これらの見本は ELEC 出版部へ申し込めば無料で送ってもらえる。

Mailman No. 1, No. 2 吉谷瑞男編集，B5 判，20pp., 300 円，パシフィックメイツクラブ

海外文通をしている仲間の情報交換誌。ガリ版刷りのミニコミ誌であるが、発行する着想が面白い。編集目的を要約するとつぎのようになる。

1. 日本中のできるだけ多くの若者に外国の人々と知り合う機会を与える。
2. 現在、海外文通を行なっている者に自分達の体験や意見を交換する機会を与える。
3. 日本および諸外国で文通相手を求めている人達の流通をより潤滑にする。

すでに2号まで発行されているが、希望者は、静岡県三島市旭ヶ丘17-10パシフィックメイツクラブ宛申し込めば送ってくれる。電話(0559)-71-2906

Think and Link by Janelle Cooper, 53pp., £1.60, Edward Arnold

上級者向英作文のテキスト。文章構成はいかにあるべきか、理論と実際について実技指導がなされる。実業人にとっては大へん役立つ教科書である。

ELEC 同友会通信

第15回 ELEC 英語教育研究大会

1979年11月3日（土）に行なわれた大会には、全国各地から約300名の参加者があり成功裡に終了した。大会の主なプログラムは、次の通りであった。

- (1) 講演 「やさしい英語のむずかしさ」
筑紫哲也氏 朝日新聞記者
- (2) 講演 “Intensive and Advanced Language Training”
Dr. Delmer Brown, Director, Inter-University Center for Japanese Language Studies in Tokyo
- (3) ELEC 賞授与式
ELEC 賞審査委員長の黒田魏先生から審査経過および授賞理由の説明があり、北海道教育大学助教授牧野高吉氏に ELEC 賞が授与された。受賞論文名は、“English Morpheme Acquisition Order of Japanese Secondary School Students”であった。なお、この論文の要旨は本誌第69号に掲載される予定である。
- (4) 実演授業は洗足学園高校の2年生を対象にして、佐藤和子先生によって行なわれた。
- (5) パネルディスカッション
「Oral Activities はいかにあるべきか—中学・高校の連携をめざして—」と題するパネルディスカッションは、下村勇三郎氏（東京学芸大学付属竹早中学校）の司会で、パネリストには、大貫辰雄（杉並区立松ノ木中学校）、行木操（共立女子中学校）、井田米造（都立石神井高校）、田村泉（都立駒場高校）の諸氏が当たり2時間の白熱した討論が行なわれた。

本大会における2つの講演と実演授業の3種類の録音テープ(C-60)が出来ており、希望者にはそれぞれ2,000円（含送料）で頒布しております。ご希望の方は、ELEC出版部宛お申し込み下さい。

ELEC 同友会総会

上記大会の一部として、ELEC 同友会総会が開かれ（議長清水護会長）、つぎの2議案が可決された。

1. 理事選出

石川 喜教	横浜市浅野中・高
井田 米造	都立石神井高
伊藤 和子	ELEC 出版部主任
伊藤 元雄	横浜市立桜丘高
岡田 啓裕	ELEC 総務部次長
大友 賢二	神奈川大学助教授
大貫 辰雄	杉並区立松の木中
大橋 菊子	都立神代高
桂 規子	都立神代高
河野 洋一	川口市立県陽高
吉良 哲也	船橋市立高根台中
金原 経	ELEC 総務部長
串原 国穂	ELEC 出版部主任
佐藤 貞友	ELEC 企画部長
清水 重夫	都立新宿高
下村 勇三郎	東京学芸大付属竹早中
田村 泉	都立駒場高
中田 実	都立桜水商業高
永尾 光史	東大付属中・高
行木 操	共立女子中
名和雄次郎	国士館短大助教授
橋本 弥	板橋区立上板橋第一中
松下 幸夫	関東短大助教授
桃山 和雄	都立江戸川高
山本庄三郎	ELEC 研修部長
渡辺 益好	埼玉大講師

（以上留任）

石川 史子	杉並区立高南中
石田 雅近	ELEC 専任講師
寺村 繁	ELEC 研修部課長
望月 国男	秦野市立本町中
山家 保	東横女子短大教授

（以上新任）

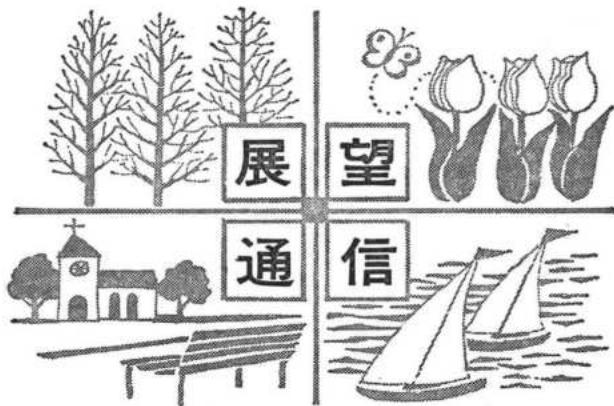
2. 会費の変更

1980年度分会費から年額2,500円とする。なお、会費は1980年3月末までにお納めいただきたくお願いします。

会員名簿・大会の開催

1980年版 ELEC 同友会会員名簿は、2月末発行を予定しております。住所・勤務先などに変更のあった場合は、すみやかにご連絡ください。

本年の ELEC 英語教育研究大会は、地方で開催いたしましたく、開催希望のご連絡をいただきたく存じます。



◆ 1980年 ELEC 春期英語教育研修会

目的 外国人講師と起居をともにし、英語運用力の集中訓練を受け、英語科教員としての専門的教養を高め、指導力の向上をはかる。
 対象 中・高英語科教員（新規教員採用予定者を含む。）
 期間 昭和55年3月24日（月）—3月30日（日）
 会場 大学セミナー・ハウス（東京都八王子市下柚木）
 参加費 68,000円（受講料、教材費、3食付宿泊料等）
 問合せ 〒101 東京都千代田区神田神保町3-8 英語教育協議会 SP係（電話 03-265-8911）

◆ 第13回言語学懸賞論文募集

題目 自由
 内容 言語の本質・機能に関する研究、言語の共時論的・通時論的研究など、いずれにしても、独創的な未発表の論文であること。
 形式 用語は日・英・独・仏語、日本語以外を用いる場合は、同一内容の日本語論文を提出のこと。論文の長さは400字詰原稿用紙30—50枚、6部（複写可）提出のこと。
 論文提出方法 昭和55年1月31日（木）までに東京言語研究所へ提出する。別紙に住所・氏名・年齢・学歴（職歴）・業績を明記し、論文には住所・氏名等を記さないこと。

当選発表 昭和55年3月20日（木）

選考委員 委員長 服部四郎；委員 梶田優、北村甫、西田龍雄、長谷川欣佑、松本克己
 問合せ 〒160 新宿区西新宿8-4-5 ラボセンタービル 東京言語研究所（電話 03-367-2421 内線233）

◆ AETC(The Assoc. of English Teachers of Children) ワークショップ

日時 昭和55年1月20日（日）1：30—4：30p.m.

場所 国際文化会館（東京都港区六本木5-11-16）
 講演 “Teaching Curricula Including Reading for Children” by Ms. Opal Dunn
 “How did I Translate Japanese Children's Songs into English” by Mr. Henry Drennan (He has recently been featured on NHK and English language newspapers.)

会費 2,000円（会員は500円）

問合せ 〒151 東京都渋谷区代々木1-43-7 MLS代々木スタジオ AETC（電話 03-370-7843）

◆ ELEC 海外英語研修旅行

1. ウエストコースト ホームステイとハワイの旅（27日間）

出発日 2月23日・25日・27日・3月5日（各出発日ともサンフランシスコ・コースとサンディエゴ・コースがある。）

英語研修 約15名を1クラスとし、月曜から木曜日の9：00—12：00（午前中3時間）に日常会話の習得を目的とした語学研修が行なわれる。

対象 大学生

料金 348,000円

2. ケンブリッジ ホームステイとヨーロッパの旅（28日間）

出発日 2月23日・27日

旅程 東京→ロンドン→ケンブリッヂ（家庭滞在と英語研修・2週間）→ロンドン→パリ→ジュネーブ→ミラノ→フローレンス→ローマ→東京

英語研修 約12名を1クラスとし、月曜から金曜日の9：15—12：30に行なわれる。

対象 大学生 料金 378,000円

申込み・問合せ 上記両コース共 〒101 東京都千代田区内神田2-16-11 内神田渋谷ビル 近畿日本ツーリスト 神田海外旅行営業所 ELEC 海外研修旅行係（電話 03-254-6071）

英語展望 (ELEC Bulletin)

第68号

定価 530円（送料120円）

昭和55年1月1日 発行

©編集人 朱牟田夏雄

発行人 酒井杏之助

印刷所 大日本印刷株式会社

発行所 エレック ELEC出版部（財団法人英語教育協議会）

東京都千代田区神田神保町3の8

電話 (265) 8911-8917

振替・東京 3-11798

ELEC BULLETIN

ELEC

THE ENGLISH LANGUAGE EDUCATION COUNCIL, INC